F83-P97-87
1200500765386
F83
P7
3

俠ゾ皿口ベ

袋

F 83
P97-8

俠盜記

ブーシキン 作

神西 清 譯

世界文學社

俠盜記

昭 24. 1. 5 和
購 入

裝畫　プーシキン自筆

目次

ドゥブローフスキイ……7
ヌーリン伯……149
キルジャーリ……179
ゴリューヒノ村史話……193
譯註……227
あとがき……235

ドウブローフスキイ

數年前のこと、キリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフといふ家柄の古いロシヤ貴族が、その持村の一つに住んでゐた。その富は莫大なものだし、門地は高いし、官界に縁故はあるしといふ譯で、彼はその領地のあつた縣内に隱然たる勢力を擁してゐた。あらん限りの取り卷き連中の甘言に思ひ上がつた彼は、生來の短氣なところを事ごとに遠慮會釋もなくさらけ出し、あまり利巧でもない癖に誰憚からずに我意を振るつた。近隣の地主達は唯々諾々として、假初にも彼のお天氣模樣を損ぜぬやうにつとめ、縣廳の役人連は彼の名が出ると顚へあがるといふ始末であつた。キリーラ・ペトローヴィチはかうした相手の卑屈さを、自分の當然受けるべき貢物と心得てゐた。彼の邸はいつも、この貴族の徒然を慰めようと伺候した客で一ぱいで、主人の騷々しい、時には粗暴にさへわたる氣散じの、お相手を勤めたものである。彼の招待を斷るなどは誰しもできぬ相談だつたし、また日を定めてボクローフスコエ村へ御機嫌伺ひに罷り出ぬ者とては一人も

なかつた。キリーラ・ペトローヴィチは大の客好きだつた。尋常一様でない體力の持主だつたにもかかはらず、一週間に二度ほどは食ひ過ぎのために苦しんだが、しかも毎晩のやうに一杯機嫌だつた。

屋敷づとめの年頃の娘のなかで、この五十歳の老人のお手の附かない者はまづなかつた。それのみならず、その屋敷の離れには十六人もの小間使が住んでゐて、さまざまの針仕事にいそしんでゐた。離れの窓にはすつかり木格子が嵌めてあり、扉には錠がおりてゐて、その鍵はキリーラ・ペトローヴィチが握つてゐた。この妙齢の世捨人たちは、定めの時間になると庭へ出て、二人の老婆に見張られながら散歩をするのである。ときどきキリーラ・ペトローヴィチはその幾人かを嫁に出したが、あとにはすぐ代りがはいつて來るのだつた。百姓や僕婢の扱ひは、きびしい我儘なものだつたが、それでも彼等は心服してゐた。彼等は主人の富と名譽を自慢にして、自分達は自分達でその隣人に向かつて、主人の威光を笠に着て目にあまる振舞ひが多かつた。

トロエクーロフが平生することといつたら、その廣大もない領地を乘り廻すことと、長夜の宴を張ることと、それから毎日その都度手を代へ品を代へて考案される惡巫山戯ぐらゐなものであつた。この惡巫山戯の槍玉にあがるのは、大抵は誰か新らしい知合ひではあつたが、古馴染にしても、唯ひとりアンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドゥブローフスキイだけは例外として、必らず

しもその戟先を免かれてゐた譯ではない。

このドゥブローフスキイといふ男は退職近衛中尉で、彼の一ばん近い隣人であり、七十人の農奴を持つてゐた。どんな身分の高い人に交はる時でもお高くとまつてゐるトロエクーロフではあるが、相手が小身者であるにも拘はらず、このドゥブローフスキイには一目おいてゐた。曾て二人は同じ聯隊に同僚として勤めてゐたもので、從つてトロエクーロフは經驗によつて、短氣で果敢な相手の性格をよく呑み込んでゐた。この二人をそののち長く引離したのは、あの名高い一七六二年[1]の變である。ダシコーフ公爵夫人[2]の縁者であつたトロエクーロフがずんずんと榮達したに反して、ドゥブローフスキイは尾羽うち枯らし、退職してわづかに一つ殘つてゐる持村に引込まなければならなかつた。これを聞いたキリーラ・ペトローヴィチは、後楯になつてやらうと申し出たけれど、ドゥブローフスキイはその好意を謝して、貧しくとも獨立を保ち續けたのであつた。數年ののち、トロエクーロフは退職陸軍大將としてその領地へ歸つて來、二人は再會を喜びあつたのであつた。それ以來といふもの、二人は毎日のやうに顏を合はせ、生まれてこのかた誰の家にも鶏を枉げたことのないキリーラ・ペトローヴィチが、この昔の同僚の陋屋へなら氣樂にふらりと立ち寄るのであつた。同い年ではあり、同じ貴族の家の生まれではあり、また受けた教育も同じだつたので、二人は氣質や性癖も幾分似通つてゐたのみならず、或る點では運命までが

同じだつた。つまり二人ながらに戀愛結婚をし、二人とも間もなく妻に先立たれ、二人の手にはそれぞれ赤ん坊が一人づつ殘されたのである。ドゥブローフスキイの息子はペテルブルグの學校へ行つてをり、キリーラ・ペトローヴィチの娘は父親の手許で育てられてゐた。そしてトロエクーロフはよくこんなことをドゥブローフスキイに言つたものである。

「なあ、アンドレイ・ガヴリーロヴィチ、君んとこのヴォローヂカ先生が一人前になつたら、うちのマーシャを嫁にやらうぢやないか。なあに先生が素寒貧だつて構ふこたあないよ。」

するとアンドレイ・ガヴリーロヴィチはかぶりを横にふつて、かう答へるのが常だつた。

「いやいや、キリーラ・ペトローヴィチ、うちのヴォローヂカはとてもマリヤ・キリーロヴナの夫にはなれんよ。あいつみたいな貧乏貴族の倅は、やつぱり貧乏貴族の娘を貰ふにかぎる。そして一家の主人になるがいいのさ、我まま女房の用人になるよりはな。」

尊大なトロエクーロフとその貧しい隣人との仲の好さを、羨まぬ人はなかつた。またキリーラ・ペトローヴィチの屋敷で食事の折など、主人の氣に逆らはうが逆らふまいがそんな事には頓着なしに、ずばずばと言ひたいことを言つてのけるドゥブローフスキイの大膽さには、人々はみんな驚いたものである。中には彼の眞似をして、その當てがはれた恭順の埒外へ踏み出さうとした者もあつたが、キリーラ・ペトローヴィチは凄い劍幕でその連中を威しつけて、二度とそんな

大それた氣持の起こらぬやうにしてしまつた。ただドゥブローフスキイだけは、相變らず一般法則の外にあつた。ところが意外な棒事が持ちあがつて、何もかも掻きみだされ一變することになつた。

ある秋のはじめのこと、キリーラ・ペトローヴィチは遠出の狩を催さうと思ひ立つた。その前の日に犬番や獵僕は、朝五時までに支度をして置くやうに命令を受けた。天幕や炊事道具は、キリーラ・ペトローヴィチが夕食をとるはずの場所へあらかじめ送り出された。主人と客達は連れ立つて犬小舍を見に行つた。そこには五百頭に餘るゴンチイ犬やボルゾイが、犬の言葉でキリーラ・ペトローヴィチの氣前のよさを讃へながら、何不足なく溫々と暮らしてゐた。そこには犬の病院もあつて、一等軍醫チモーシカが世話を燒き、また牝犬がお產をしたり仔犬に乳をふくませたりしてゐる分室もあつた。キリーラ・ペトローヴィチはこの見事な設備が頗る得意で、折さへあれば客達にその自慢をするのだつたが、一方客達は一人殘らず、少くももう二十ぺんは見物させられてゐたものである。さて彼は客達にとり圍まれ、後にはチモーシカや、犬番の頭たちを從へて、犬小屋を見廻つてゐたが、ときどき檻の前に歩をとめて、病犬の容態をたづねたり、多かれ少なかれきびしくもあり、尤もでもある注意を與へたり、顏見知りの犬を手近かに呼び寄せて優しい口を利いたりする。客達はみなこの犬小舍に感嘆するのを義務と心得てゐたが、ドゥブロー

フスキイだけは默りこくつて苦がい顏をしてゐた。元來彼は狩の大好きな男なのだが、その身代ではゴンチイ犬を二頭とボルゾイの牝犬を一頭しか飼へず、したがつてこの見事な設備を眼にするたびに、些か羨望の念に堪へなかつたのである。

「何だつてさう苦がい顏をしてゐるんだね」とキリーラ・ペトローヴィチが訊ねた、「それともうちの犬小舍が氣に入らんのかね？」

「いや、さうぢやない」とドゥブローフスキイは素氣ない調子で、「犬小舍は素晴らしいものさ。この犬ほどの暮らしを君の召使達がしてゐるかどうか、それが疑はれるほどだね。」

犬番の一人がむつとして、言ひ返した。

「あつちどもは、神樣と御主人樣のお蔭で、何の不平もなく暮らしてをりますよ。だがね、こいつは申し上げるまでもない分かり切つた話だが、どこやらの旦那にして見りや、お屋敷そつくりどれかその邊の檻の一つと取つ換へても惡かあないつてね。その方が食ひ物もいいし溫かでせうぜ。」

キリーラ・ペトローヴィチはこの下男のへらず口を聞いて大聲で笑ひだした。その尻尾について客達も笑ひだしたが、その實內心では犬番の冗談は自分達の耳にも痛いわけだと思つてゐた。ドゥブローフスキイは眞蒼になつて一言も口を利かなかつた。ちようどその時、生まれたての犬

の仔を籃に入れて、主人の前へ運んで來た。キリーラ・ペトローヴィチはそれに夢中になり、やがて二匹だけ選りだすと、あとは川へ捨てろと言ひつけた。その間にドゥブローフスキイは姿を消したが、誰一人氣づいた者はなかつた。

客達と連れだつて犬小舍から戻ると、キリーラ・ペトローヴィチは夜食の卓についたが、その時になつてやつと、ドゥブローフスキイの姿が見えないので、はじめて彼のことに氣がついた。召使に聞くと、アンドレイ・ガヴリーロヴィチはお歸りになりましたと云ふ。トロエクーロフは、直ぐ追つかけて行つて是非とも連れ戻せと言ひつけた。老練且つ炯眼な犬の鑑定家であり、また獵場で起こりがちの爭論を裁定して間違つたことのないドゥブローフスキイを伴れずには、これまで一度も獵に出た例しがないのである。その彼を追つて馬を飛ばした下男は、一同が食卓を起たぬうちに歸つて來て、アンドレイ・ガヴリーロヴィチはどうしてもお聽き入れがなくお戻りになりません、と主人に報告した。例によつて果實酒の廻つてゐたキリーラ・ペトローヴィチは赫として、ぢやもう一度飛ばして行つてアンドレイ・ガヴリーロヴィチに、もし今すぐボクローフスコエ村へ泊りに來なければ、このトロエクーロフはもう永久にお前とは絕交だ、さう言つて來いと同じ下男を使ひに出した。下男は再び馬を飛ばした。キリーラ・ペトローヴィチは食卓を起つと、客を歸して寢間へ引きとつた。

翌る朝、彼の發した第一の問ひは、「アンドレイ・ガヴリーロヴィチは來てゐるか？」であつた。その返事には、三角に折り疊んだ一通の手紙が差し出された。キリーラ・ペトローヴィチはそれを佑筆に讀み上げさせて、次のやうな文言を耳にした。

一札拜進。

余は貴下が、犬番バラーモシカを謝罪のため余の許に差遣はされざる限り、ポクローフスコエの土を踏む意なし。且つ彼を罰すると宥すとは余が自由なり。また余は貴下が下僕輩の戯言を忍ぶ意なく、貴下の戯言も同斷なり。何となれば余は道化役に非ずして、家柄古き貴族なればなり。

恐惶謹言。

アンドレイ・ドゥブローフスキイ

今日の作法に關する通念によつて見れば、右の手紙は不作法極まるものであらう。しかしこの手紙がキリーラ・ペトローヴィチを怒らしたのは、その惡文のせゐでも惡趣味のせゐでもなく、實にその內容のせゐであつた。

「何だと？」トロエクーロフは跣足のまま寢床を跳ね起きて呶鳴つた、「俺のうちの者を謝罪

のため差し遣はせだと！　罰するも宥すも奴の自由だと！　そもそも何をする氣になつたのだ？　相手が誰だか知らんのか？　よおし、覺えてゐろよ！　俺の目の前で泣かにやならんことにして見せるぞ！　トロエクーロフに齒向ふ者がどうなるか、思ひ知らしてくれるぞ！」

とはいへキリーラ・ペトローヴィチは着物をきて、いつもながらの豪奢な趣向で狩へ出かけたが、狩は散々の不首尾に終つた。一日ぢゆうに眼にとまつた兎の數はわづかに一匹で、それにも逃げられてしまつたのである。天幕の下の夕食もやはり巧く行かず、乃至は少くもキリーラ・ペトローヴィチの口には合はず、料理番をぶちのめす、客達には呶鳴り散らすといふ騷ぎのあとで、歸り途には供廻りを悉く引具して、わざわざドゥブローフスキイの畠地を拔けたのだつた。

二

四五日したけれど、隣同志の反目は薄らぐ氣配もなかつた。アンドレイ・ガヴリーロヴィチは二度とポクローフスコエ村へは足踏みもしなかつたし、キリーラ・ペトローヴィチはいい相手が顏を見せぬので物足らず、むしやくしや紛れにひどい侮蔑的なことばを吐き散らすのだつた。それがまた、近隣の地主連の熱心な努力のお蔭で直されたり尾鰭がついたりしてドゥブローフスキ

イの耳にはいる。と、このとき生じた新局面が和解への最後の望みの網をも斷ちきつてしまつた。

ドゥブローフスキイは或る日、猫の額ほどの自分の領地を乘り廻してゐたが、白樺林の傍まで來たときふと斧の音が聞こえ、すぐそれに續いてめりめりと木の倒れる音がした。急いで乘りつけて見ると、ポクローフスコエの百姓どもが平氣で彼の森を盗伐してゐるところにぶつかつてしまつた。彼の姿を認めると百姓達は一散に逃げださうとしたが、ドゥブローフスキイは厳者と力を協せてそのうちの二人を引つ捕へ、縛りあげてわが家の庭先へ引いて來た。敵軍の馬匹三頭も同時に捷利者の手に卤獲された。ドゥブローフスキイは激昂の極に達した。元來無法者として通つてゐたトロエクーロフ領の百姓達だが、それまでは流石に主人と隣人の間の友好關係を知つてゐたから、假りにも彼の領内を掠めようなどとしたことはなかつたのである。ドゥブローフスキイは、彼等が隣人同志の仲違ひにつけ込んでそんな眞似をしたのだと見てとつたので、戰の掟に關する通念も何も踏み躙つて、自分の林で盗み集めたその樹の枝で捕虜どもを散々に叩き据ゑ、捕へた馬は自分の家畜に編入して野良へ出してしまつた。

この事件の評判は、その日のうちにキリーラ・ペトローヴィチの耳に達した。彼は忿怒のあまり吾を忘れ、その憤りの最初の瞬間には、一族郎黨のこらず引具してキステニョーフカ（隣人の

持村はさう呼ばれてゐた）へ押し寄せ、莖一本あまさず荒らし廻り、領主を屋敷へ籠城させてやらうかと思つた。かうした武勳を建てるのは、彼には珍らしいことではなかつたのである。しかし間もなく、彼の考へは風向きが變つた。づしりづしりと廣間を行きつ戻りつしてゐた彼が、ふと窓の外へ眼をやると、ちようどそのとき一臺の三頭曳（トロイカ）が門ぎはにとまつたのが見えた。馬車から降り立つたのは、革帽子をかぶり粗羅紗の外套をきた小さな男で、そのまま用人のゐる離れの方へ行つてしまつた。トロエクーロフは、それが郡の陪席判事のシャベーシキンだと分かつたので、早速呼びに人をやつた。一分後にはもうシャベーシキンはキリーラ・ペトローヴィチの面前に立つて、ぺこぺことお辭儀をしながら、相手の言ひだすことを恭々しく待つてゐた。

「いや御機嫌よう……ええと君の名は何といつたつけな？」とトロエクーロフは言つた、「何用で來られたかな？」

「町へ參りますところでございます。はい」とシャベーシキンは答へた、「で、何か御前（ごぜん）よりの御申附けもないかと存じ、イヴァン・デミヤーノフの所へ伺ひに立ち寄りました次第で。」

「實にいい時に來られたものぢや……ええと、お名は何といはれたかな？　實は君に頼みたい事がある。まあヴォトカでも一杯やつて聽いて貰ふか。」

このやうな歡待振りは、陪席判事にとつて快くもあり薄氣味惡くもあつた。彼はヴォトカは辭

退に及んで、耳を凝らしてキリーラ・ペトローヴィチの言葉を聽きはじめた。

「わしの隣村にさる地主がをる」とトロエクーロフは言つた、「小身者で、しかも無禮な奴ぢや。わしは其奴の領地を取りあげてやらうと思ふが……君はどう思はれるかな？」

「それは御前、もし證文か何かがございますなら……」

「馬鹿をいひ給ふな、何の證文がいるものか？　ちやんと法文といふものがあるぢやないか。問題はつまり、何の權利もなしに奴の領地を取りあげて、奴を裸にしてやらうといふことだ。だが待てよ！　あの領地は元來がわしの家のものだつたが、それをスピーツィンとかいふ者が買ひとつて、やがてドゥブローフスキイの親父に賣り渡したものだ。ここに文句をつける譯には行かんものかな？」

「むづかしうございますな、御前。恐らくその賣却は法律の手續を踏んでをりませうから。」

「そこを考へて呉れ、君。よくつついて見て呉れ。」

「假りにでございますな、御前。その隣村の地主が領地を支配するについては、その據り所となる證書がある筈でございますな。それを何とかして捲き上げることが出來ますなら、さうなれば勿論……」

「いかにも尤もぢや、だがそれは困つたな、奴のところの書類は一切、火事で燒けてしまつてをるでな。」

「何と仰せられます、御前、書類は燒け失せてをりますのですか？　それほど有難いことがありませうか？　さういふ次第なら、裁判におかけになるが宜しう御座います。十分御滿足のゆく結果の得られることは、毛頭疑ひございません。」

「さう思ふかね？　では一つ宜しく賴んだぞ。わしの感謝のことは安心してをつて貰はう。」

シャベーシキンは床にお額をぶつけんばかりの御辭儀をして御前を退いたが、その日のうちからこの目論見のために東奔西走しはじめ、彼の機敏な計らひによつて、丁度二週間のうちには、ドゥブローフスキイが、町の裁判所から呼出狀を受取ることになつたのである。彼のキステニョーフカ村領有の件を不正なりとする訴へが、陸軍大將トロエクーロフより提起せられたるにより、即刻然るべき辯明をなすべし、といふ文面であつた。

アンドレイ・ガヴリーロヴィチは思ひもよらぬ喚問に仰天して、即日かなり語氣の荒い返事を認め、キステニョーフカ村は亡父の逝去とともに彼の所有となつたもので、彼は相續權によつて同村を領してゐること、トロエクーロフなどはこの村に何等の關係もないこと、そしてこの彼の財産に對する外部よりの請求權の主張は、誣告であり詐欺である旨を表明した。

この返書を一見した陪席判事シャベーシキンは、ひそかに會心の笑みを漏らした。彼はこの手

紙から、先づ第一にドゥブローフスキイが裁判沙汰にかけてはまるで素人であること、また第二には相手がかうした短氣で向ふ見ずな男なら、最も不利な立場に陷れてやるのも難事ではあるまいことを、見てとつたのである。

やがてアンドレイ・ガヴリーロヴィチは、その受けた訊問を冷靜に吟味して、じつくりと考へて見た結果、これはもつと委曲を盡くした返事を出さなければいけないと氣づいた。そこでかなり適切な書面を認めて提出したが、暫くするとそれでも不充分なことが分かつた。一體ドゥブローフスキイは訴訟沙汰にはまるで經驗がなく、大抵は常識で濟まして來たのである。この常識といふものが、滅多に信用の置けぬ、殆んど常に不完全な道案内であることは、あらためて言ふまでもない。

事件は長びいて來た。自分の方が正しいことを信じて疑はぬアンドレイ・ガヴリーロヴィチは、訴訟の成行についてはあまり心配せず、金をばらまく氣持もなく、またばら撒かうにも出來なかつた。そして平生、鼻藥の利く小役人根性を嘲笑ふことにかけては第一人者だつたにも拘はらず、この自分が誣告の犠牲者になるなどといふ考へは浮かんでも來なかつた。一方トロエクーロフも、この揑ち上げた訴訟に勝つことには、大して氣を遣はなかつた。シャベーシキンが彼の名で行動して、裁判官を脅しつけたり、買收したり、あらん限りの法文を勝手氣儘に解釋した

り、萬事宜しく奔走してくれたからである。

さうかうしてゐる内に一八＊＊年の二月九日、ドゥブローフスキイは町の警察の手を通じて、＊＊區裁判所へ出頭すべしといふ召喚狀を受けとつた。彼等兩名、すなはち陸軍中尉ドゥブローフスキイと陸軍大將トロエクーロフとの間の領地係爭の件に關する判決を聽取し、滿足あるひは不滿の旨を自署せよといふのである。その日直ちに、ドゥブローフスキイは町へ出向いたが、途中でトロエクーロフが彼の車を追ひ越した。二人は傲然と眼を見交はし、ドゥブローフスキイはその敵手の面上に毒々しい微笑の泛んでゐるのを認めた。

町に着いたアンドレイ・ガヴリーロヴィチは知合の商人の家に宿をとつて一泊し、翌る朝になると區裁判所の法廷へ出頭した。誰一人として彼に注意を拂ふ者はなかつた。ついでキリーラ・ペトローヴィチも到着した。書記達は席を起つてペンを耳にはさんだ。法官連は卑屈極まる物腰で彼を迎へ、その官等と年齢と肥大とに敬意を表して、肘掛椅子をすすめた。彼は腰をおろした。一方アンドレイ・ガヴリーロヴィチは開けつ放しの扉口に佇んで、壁に凭れかかつてゐた。深い靜寂があたりを罩めた。すると祕書が起ち上がつて、よく徹る聲で判決文を讀み上げはじめた。われわれがロシヤに於いて、爭ふべからざる所有權を有するにも拘はらず、財產を喪失し得る幾つかの方法のうちの一つを、親しく眼のあたりにすることは恐らく誰にとつても愉快なこと

であらうから、次にその全文を掲げることにしよう。

一八＊＊年十月＊日コズロヴォ郡裁判所は、陸軍大將キリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフの所有に係る、T＊＊縣K＊＊區キステニョーフカ小村所在、男子人口百八十六名、その地積、草地及び農場附屬地を合して一千二十五町二段なる領地を、近衞中尉アンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドブローフスキイが不法領有せる件に關し審理すること次の如し。

一

按ずるに、前記陸軍大將トロエクーロフが昨一八＊＊年六月九日本裁判所に提起したる請願に依れば、その亡父、當時T＊＊總督府に地方書記官として勤務中なりし八等文官・帶勳者ピョートル・エフィーモフ・トロエクーロフは、一七五九年八月十四日を以て官房書記官貴族ファデェイ・エゴーロフ・スピーツィンより、同人がその父、郡警察官吏貴族エゴール・テレンチエフ・スピーツィンの死後その住民の一人をも剩さずその地積の一段歩をも失はさずして相續且領有し來たれる、K區上記キステニョーフカ小村（因みに同村落は當時の人口調査によりてキステニョーフカ移民部落と稱せらる）よりなる領地、すなはち第四回人口調査による登錄人口男子百十三名及びその農民資產、農家及び諸建設物の一切、開墾地、未墾地、森林、草刈場、キステニョーフカ川と稱する川に於ける漁撈、同領地に屬する一切の附屬地及び領主の木造家屋、卽ち一物をも剩すことなき一切を含めて價格二千五百留を以て買ひ取り、卽日T＊＊民事裁判所に登記を了し、請願人の父は同日卽ち八月三十六日を以てK＊＊區裁判所より取得者たること及びその所有權を認知せられたるものとす。然るに遂に一七＊＊年九月六日その父は神意により死亡したるが、

その間彼すなはち請願人陸軍大將トロエクーロフは、一七八二年以來殆ど幼少の頃より軍務に服しをり、主として國外に出征し居たるを以て、父の死亡に關しても亦その遺產たる領地に關しても、消息を入手すること能はざりしものとす。今や前記軍務より全く退職して、T縣K郡及びR縣R郡の諸村落にまたがりて所在し、その農奴三千人を算する父の領地に歸還するに及び、それら諸領地のうち上記せるキステニョーフカ村の農奴百十三名（因みに最近の第七回人口調査による同小村の登錄農奴人口は總計百八十六名）及び土地附屬地の一切を、前記陸軍中尉アンドレイ・ドゥブローフスキイが何等の確定所有權なくして領有せることを發見し、茲に本請願書に添へて、賣渡人スピーツィンがその亡父に與へたる該土地賣買登記證書正本を提出し、上記領地をドゥブローフスキイの不法なる領有より脫せしめ、當然の歸屬として之を彼トロエクーロフの完全なる所有に歸せしむると同時に、この不法占有の結果として生じたる收入を享有し來たりたる廉に就きては然るべき詮議を行ひ、彼ドゥブローフスキイに法規により適當と認めらるる追徵金を課し、以て彼トロエクーロフを滿足せしめんことを願ひ出でたるものなり。

依つて本K＊＊郡裁判所は該請願に基き取調べを行ひたるところ、前記係爭地の現有人陸軍中尉ドゥブローフスキイが現地に於いて貴族陪席判事に向ひ次の如き辯明を與へたること判明せり。曰く、同人の現在領有しをる前記キステニョーフカ小村より成り農奴百八十六名及び土地附屬地を含む領地は、その父砲兵少尉ガヴリーラ・セルゲーエフ・ドゥブローフスキイの死後同人が相續したるものなるが、その父はまた之を、本請願人の父すなはち前には地方書記官たり後には八等文官たりしトロエクーロフの手より、同人が一七五九年八月三十日にK＊＊區裁判所の證明を經て九等文官グリゴーリイ・ヴァシーリエヴィチ・ソボレフに與へたる委任狀に基き買ひ取りたるものにして、同委任狀によれば、ソボレフにより該賣渡地に

對する土地賣買登記證書が彼の父に手交せられをらざるべからず。蓋し該委任狀面には、彼トロエクーロフは、官房書記官スピーツィンより買ひ取りたる領地を農奴百十三名及び土地を含めて彼ドゥブローフスキイの父に賣却し、契約による金員三千二百留を悉皆些かも返却することなく同人の父より領收し、該委任狀所有人ソボレフに依頼するに同人の父へ不動產權利證書を手交せんことを以てしたる旨を、明記しあるを以てなり。一方また同委任狀の記載によれば、同人の父は全額の支拂ひを了したる上は、該不動產權利證書の名義書換を了するに至るまでの期間、買受けたる領地をば眞正の領有者として領有し且つ管理することを得べく、また賣渡人トロエクーロフは向後何人に對しても該領地に關する權利の主張をなすことを得ざる旨記載せられをれり。然るに該土地賣買登記證書が何時いかなる役所に於いて、委任狀所有人ソボレフより同人の父に手交せられたるかに關しては、アンドレイ・ドゥブローフスキイは當時極めて幼少なりしを以て之を存知せず、且つ父の死後に於いても該不動產權利證書を發見するに至らず、恐らくは一七＊＊年にその屋敷が火災（因みにこの火災は該村落の住民も記憶しをれり）に罹りたる際、他の書類及び家財とともに燒失せるものならんと思惟しをれり。而してトロエクーロフの賣却したる日、或ひはソボレフに委任狀を交附したる日、すなはち一七＊＊年より今日に至るまで、彼等ドゥブローフスキイ父子が該領地を何等異議の申立てに逢ふことなく領有し來たりたることは、界隈の住民の言に徵して證明することを得べく、その住民中總計五十二名が訊問に對し宣誓の上陳述せる所によれば、彼等が記憶する限り事實前記ドゥブローフスキイ父子は今をさる約七十年以前より該係爭領地を領有し始めたるものにして、これに對し何人も異議の申立てをなしたることはなけれど、抑々如何なる證文または不動產證書によるものなりやは彼等も存知しをらずとのことなり。なほ本件に登場しをれる該領地の以前の買受人たる元地方書

記官ピョートル・トロエクーロフが、果たして該領地を領有したることありや否やは、彼等は之を記憶しをらず。ドゥブローフスキイ父子の屋敷は今をさる約三十年前にその領地に夜半起こりたる火災のため燒失せり。且つまた局外者の附言する所に據るに、該係爭領地より生ずる收入は當時よりの平均をとれば年額二千留を下らずといふ。

右の申立てに對し陸軍大將キリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフは本年正月五日更に本裁判所に請願を提起して曰く、よしんば前記陸軍中尉アンドレイ・ドゥブローフスキイが本件の審理中に於いて、曾て亡父ピョートル・トロエクーロフが九等文官ソボレフに交附したるところの前記賣却領地に對する委任狀を提出したりと雖も、その後當に土地賣買登記證書正本を提出せざるのみならず、果たして何時か該土地賣買登記證書の名義書換を了したりや否やに關してすら、法令取扱一般規定第十九條及び一七五二年十一月二十九日附勅令に該當する何等明確なる證據物件を提出しをらず。從つて該委任狀なるものは、その交附者たる同人の父の死亡したる今日にありては一八＊＊年五月＊＊日附勅令により全然無效たるべきものなり。しかのみならず法の命ずる所に據れば、係爭領地は不動產權利證書の有無によりて歸屬を決せらるべく、審理によりて決すべきものに非ずとあり、從つて同人がその父に屬する該領地に對して既に證據として買取契約證を提出したる以上は、前掲諸法規に基き、前記ドゥブローフスキイの不法なる領有より該領地をば脫せしめ、之を相續權者たる同人の有に歸せしむるは理の當然なりと謂へり。而して前記ドゥブローフスキイ父子は、己れに屬せざる領地を領有し且つ何等確定せる所有權なくして該領地より不法且つ彼等に屬せざる收入を享有したる者なるを以て、＊＊法に照らしてその追徵金額を査定し、之を地主ドゥブローフスキイより徵收して、以て彼トロエクーロフを滿足せしめんことを願ひ出でたり。

上述の如き件、及び該件並びに諸法令よりしたる要約を慎重審議したる結果、K＊＊郡裁判所は判決すること次の如し。

本件よりして明かなる如く、現に陸軍中尉アンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドゥブローフスキイが領有しをるキステニョーフカ小村所在、最近の第七回人口調査による男子人口總計百八十六名、並びに土地附屬地を含む上記係爭領地に對して、陸軍大將・帶勳者キリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフは、元地方書記官にしてその後八等官となれる同人の亡父が一七＊＊年に官房書記官貴族ファヂェイ・スピーツィンより買受けたる行爲に對する土地賣買登記證書正本を提出したるのみならず、該登記證書に傍書せられをる文言よりして、該買受人トロエクーロフが同年K＊＊區裁判所によりて、取得者たること及び該領地の所有權を認知せられたることは明かなりとす。而して之に對し陸軍中尉アンド レイ・ドゥブローフスキイは、該土地賣買登記證書を同人の父ドゥブローフスキイの名義に書換ふべき目的を以て買受人故トロエクーロフが九等官ソボレフに交附したる委任狀を提出したりと雖も、かかる契約を以てしては不動産賣買行爲を確認することを得ざるのみならず、一時的にもせよ該領地を領有することは勅令＊＊＊の禁ずる所にして、且つまた該委任狀なるものはその交附者の死亡によりて全く無效となれるものなり。しかのみならず、該委任狀に基き實際に何時いかなる役所に於いて前記係爭領地に對する土地賣買登記證書の名義書換を了したるやに關しては、本件の審理開始すなはち一八＊＊年より今日に至るまで、ドゥブローフスキイ側より何等明確なる證據物件をも提出し居らず。依つて本裁判所は該領地に對して提出せられたる土地賣買登記證書の示すところに基き、前記農奴人口百八十六名及び土地附屬地を含む領地は、その現狀の如何なるを問はず、陸軍大將トロエクーロフに歸屬すべきものたるを確認し、陸軍中尉ドゥブローフ

スキイの該領地使用を禁ずるの件、トロエクーロフ氏が當然該領地を領有すべきの件、及び同人が相續權によりて取得せる所有權認知の件につきて、K＊＊區裁判所に指令を發せんとす。なほそのうへ陸軍大將トロエクーロフは、その相續領地をば收入を享有しつつ不法領有したる廉により陸軍中尉ドゥブローフスキイより追徵金を取立つべきことを願ひ出でをるも、該領地が數年間に亘り外部よりの何等の異議申立てなくしてドゥブローフスキイ父子の領有する所たりしは同地古老の證言に徵するも明かにして、從つて今日に至るまでトロエクーロフ氏より該領地のドゥブローフスキイ父子による不法領有に關して何等請願の提起ありたりとも覺えず、且つ又＊＊＊法の命ずる所によれば、もし他人の地所に播種し又は屋敷園ひをなしたる者ありて、その不法領有に關する訴訟を生じ、審理の結果後者の正當なること判明したる場合は、該地所をその播種穀類、垣、建築物とともに正當なる者へ歸屬せしむ、と明記せらる。依つて陸軍大將トロエクーロフが陸軍中尉ドゥブローフスキイに對して提起せる要償訴訟は之を却下す。蓋し同人に所屬する領地は一物をも奪ふことなく同人の領有に返還せらるるを以てなり。また該領地取得に際して生ずることあるべき一切の事柄に關して就中陸軍大將トロエクーロフは異議の申立てをなす權利を保有すべく、該異議申立てに關する何等かの明確且つ合法的證據物件を有する時は、別にその筋へ訴願することを得るものとす。右判決は前以て之を法の定むる所に從ひ上告規定によりて原告人及び被告人に告示せらるべく、よつて右兩人を本裁判所に出頭せしめ、本判決を申聞け、その滿足又は不滿の旨を警察を通じて自署せしむるものなり。

祕書は口を噤んだ。陪席判事は席を起つと、トロエクーロフに恭々しく一禮して、自署するやうにと書類を差し出した。勝ち誇つたトロエクーロフは彼の手からペンをとると、判決文の下に全く滿足である旨を自署した。

次はドゥブローフスキイの番である。祕書が書類を差し出したが、ドゥブローフスキイは頭を垂れて立つたまま、身じろぎもしなかつた。祕書は、『自分が完全に滿足である旨を自署するか、それともさうでなくて、正は自分の方にあると思つて、法定期間内に然るべき筋へ控訴をする心算なら、はつきりと不滿の旨を自署すればよい』といふ意味を、もう一度繰り返し述べた。

ドゥブローフスキイはやはり默つてゐた。……と不意に彼は顏を上げると、ぎらぎらと兩眼を輝かし、づしんと足踏みをするなり、力一ぱい祕書を突きとばした。相手は倒れた。そのひまにインキ壺をつかむと、陪席判事めがけて投げつけた。みんな顏へあがつてしまつた。ドゥブローフスキイは聲を荒らげて喚きはじめた。

「何だと！　神の教會を敬はないのか！　去せをれ、下郎ども！」それからキリーラ・ペトロヴィチへ向かつて、「こいつは前代未聞だな、閣下」と言葉をつづけた、「てつきりあの犬番どもが、神の教會へ犬を連れ込んだんだ！　だから犬が教會を駈けずり廻つてゐるんだ！　ようし、覺えてゐろよ！」

只ならぬ騒ぎに守衛達が駈けつけて、やつとのことで彼を押へつけると、そのまま引きずり出して檻へ乘せてしまつた。つづいてトロエクーロフも、法官一同に見送られながら退出した。思ひまうけぬドゥブローフスキイの狂亂沙汰が、彼の氣持に烈しく響いて、今までの得意な氣持は臺なしになつてしまつた。彼の感謝を當てにしてゐた法官連は、一言の愛想のいい言葉も掛けては貰へなかつた。彼は心ひそかに良心の苛責を感じながら、自己の憎念の滿足だけでは何か滿たされぬものを抱きながら、その日のうちにポクローフスコエへ歸つて行つた。一方ドゥブローフスキイは床についてゐた。那醫は幸ひにして全くの箍ではなかつたので、蛭と發泡膏をはつて瀉血療法をやつた。夕方になると大分樂になつた。その翌日彼は、今では殆んど自分のものとはいへないキステニョーフカへ運ばれて行つた。

三

それから暫くたつたが、哀れなドゥブローフスキイの健康は依然として面白くなかつた。尤も狂亂の發作はもう二度と起こりはしなかつたけれど、その氣力は目だつて衰へを見せて來た。それまで日課にしてゐた事は忘れられて、滅多に居間から出て來ず、幾日もぶつ通しに考へ込んで

ゐた。その昔彼の息子の世話をしたエゴーロヴナといふ氣立のよい婆さんが、今度は彼の乳母になつた。彼女は主人をまるで赤ん坊のやうに守をして、食事や就眠の時間の注意をしたり、自分で匙をとつて養ひ、或ひは寢かしつけなどした。アンドレイ・ガヴリーロヴィチは彼女のいふことをよく聽き、その他の誰とも交渉を持たなかつた。彼にはもう、その家政のことや領地の管理のことを考へる力がなかつたので、エゴーロヴナは一部始終を若旦那へ報らせなくてはならないと思つた。このドゥブローフスキイの息子はある近衛歩兵聯隊に勤めて、當時はペテルブルグにゐたのである。そこで彼女は出金簿の紙を一枚破りとつて、キステニョーフカ村で唯ひとり讀み書きのできる料理番のハリトンに手紙を口受して、その日のうちに町の郵便局へ出しにやつた。

ところでもうそろそろ、讀者にこの物語の本當の主人公をお引き合はせしてよい時分である。ヴラヂーミル・ドゥブローフスキイは幼年學校を卒業して、近衛聯隊へ少尉補として入隊したのだつた。息子に恥づかしくない生活をさせるためには、父親は全く金に糸目をつけなかつたので、この青年が家から受ける仕送りは豫期すべき金額以上にのぼつてゐた。向ふ見ずで功名心に燃えた彼は、金使ひの荒い放縱な生活に耽つて、骨牌はうつ借金はするで、先々のことは一向頓着しなかつた。尤も時々何かの拍子に、その内に持參金のどつさりある嫁を貰はなければと、そんなことを考へてはゐたが。

ある晩のこと、彼の宿に四五人の將校が集まつて、そこらぢゆうのソファにごろごろしながら彼の琥珀のパイプを燻らしてゐたとき、從僕のグリーシャがはいつて來て彼に一通の手紙を渡したが、その上書と封印を一目みると、忽ち青年は胸騒ぎを覺えた。彼は急いで開封して、次のやうな文言を讀んだ。

『ヴラヂーミル・アンドレーヴィチ様參る。若様、長れながらこの年寄りの乳母より、御嚴父様のお加減のことを申上げさせて頂きます。大そう御容態が惡しく、ときどき取り留めもないことを口走られますし、日がな一日子供のやうにほかんと坐つておいでなさります。生き死には授かり物とやら、お懐かしい若様、どうぞ歸つておいでなさりませ。ペソーチノエ村までお迎への車を差し立てます。人の噂によりますと、區裁判所のお役人が見えて私どもをキリーラ・ペトロヴィチ・トロエクーロフの家來に致すつもりとか、それは私どもがあの家の者だからださうで御座います。けれども私どもは大昔よりあなた様の家來でございますし、生まれてこのかたそのやうなことは聞いたことも御座りません。若様はペテルブルグにお住まひのことゆゑ、天子さまにお訴へ遊ばしませ。すれば天子さまは、私どもを恥づかしめよりお救ひ下さりますで御座りませう。當地は雨のみ降りつづき、はや二週間目になります。牛飼ひのローヂャは取入祭のころ亡くなりました。グリーシャ奴には老母より宜しく申したとお傳へ下さりませ。伜は落度なくお仕へ

申してをりませうか。あなた様の忠僕なるしもべ、乳母マリーナ・エゴーロヴナ・ブズイリョーヴァより。』

ヴラヂーミル・ドゥブロフスキイは異様な心の波立ちを覺えながら、このごたごたと筋の通らぬ手紙を、幾度も幾度も讀み返した。彼は幼少のころ母親を喪ひ、まだ父親の顏もろくろく知らぬ八歳の年に、ペテルブルグへ出されたのである。にもかかはらず、彼は父親に何か傳奇的な愛着を感じ、家庭生活の靜かなよろこびを味ふ折が少なかつただけに、人いちばい家庭の生活に憧れをもつてゐた。

父親を喪ふと考へてみただけでも、彼の胸は搔きむしられるばかりに傷んだが、かてて加へて乳母の手紙から察せられる哀れな病父の境遇に、彼は身の毛もよだつ思ひがした。人里離れた侘しい村に、無智な老母や召使たちの手に一人殘されて、何か自分には事情のわからぬ災難に脅やかされ、心身ともの苦痛のうちに、救ひもなしに息を引きとらうとしてゐる父の姿が、彼の思ひに描かれた。ヴラヂーミルは、自分のこれまでの赦しがたい怠慢を責めるのだつた。もう久しく父親から何の消息にも接しなかつたが、相變らず領地の見廻りや農事の世話で忙しいのだらうと思つて、近況を尋ねようなどとは考へても見なかつたのである。

彼は父親を見舞はうと決心した。そしてもし父親の容態が彼の附添ひを必要とするやうなら、

退職しようとまで覺悟を決めた。同僚達は彼の心配さうな樣子を見て歸つて行つた。一人になると、ヴラヂーミルは賜暇願をしたため、パイプに火をつけて深い物思ひに沈んだ。その夜のうちに彼は賜暇の手續にとりかかり、二日ののちには忠僕グリーシャを伴につれて、驛馬車に乘つて出發した。

やがてヴラヂーミル・アンドレーヴィチは、キステニョーフカへ行く道の岐れる宿場に近づいた。彼の胸は不吉な豫感で一ぱいだつた。もう父親の死に目に逢へないのではないかと思ひ、また行手に彼を待つてゐる村の憂鬱な暮らしぶり——片田舍の侘しさ、人氣なさ、貧しさ、彼にはさつぱり心得のない事務上の煩勞などを、心に描くのだつた。その宿場に着くと、彼は驛長の家へはひつて、自前の馭者を傭つてくれと賴んだ。驛長は彼の行先を尋ね、それならキステニョーカから迎へに來てゐる馬車が、これでもう四日も待つてゐると告げた。ほどなくアントンといふ老馭者が、ヴラヂーミルの前に出て來た。これはその昔彼を厩へ連れて行つて見せて呉れたり、彼の仔馬の世話をして呉れたりした男である。アントンは彼の姿を見ると涙を流して、地べたにとどかんばかりのお辭儀をし、大旦那樣はまだ御存命ですと告げ、馬を附けるために駈け出して行つた。ヴラヂーミルは驛長の家の者のすすめる朝飯を斷わつて、出發を急いだ。アントンはでこぼこした村道を走らせ、二人のあひだに話がはじまつた。

「ねえ、アントン、話して呉れないか。一體親父とトロエクーロフの間に何が持ち上がつたんだね。」

「それが何が何やらさつぱり分からないんで、若旦那。何でも人の噂ぢや、旦那がキリーラ・ペトローヴィチと仲違ひをなすつた、そこで向ふが裁判へ持ち出したと、かうで御座いますよ。向ふの旦那と來ちや、自分でよく裁判官みたいな横道をやるくせにね。そりや手前ども下々の者に、旦那樣がたのお考へを彼是申せたものぢやありませんが、とにかくうちの旦那があのキリーラ・ペトローヴィチの相手になりなすつたのは、何としてもつまらん事でしたよ。長い物にや卷かれろつて言ひますからね。」

「ぢやつまり、そのキリーラ・ペトローヴィチといふ奴が、お前達に勝手な眞似をしてゐるんだね？」

「さうで御座いますとも、若旦那。何しろ向ふの旦那と來ちや、知事が御機嫌伺ひにやつて來るといふ豪勢さでして、陪席判事なんか物の數ともしちやゐませんし、署長なんぞはまるで走り使ひの小僧も同然なんですからねえ。地主の旦那達だつて、みんなして御機嫌伺ひにやつて來る始末でさ。槽がありや豚が集まるつて、まつたくその通りですよ。」

「その男がうちの領地を取り上げるつて云ふのは本當かね？」

「それでございますよ、若旦那、わし等もやつぱりさう聞きましたんで。二三日前のことだが、ポクローフスコエの寺男がわし等の名主んとこの洗禮祝ひにやつて來て、こんなことを申しましたつけ。お前らももうさんざ遊び呆けたからな、今度はキリーラ・ペトローヴィチの手下になる番だぞ、つてね。すると鍛冶屋のミキータがこんな風にやり返しましたつけ。もうやめな、サヴェーリイチ、さうみんなの氣を落とさせるやうなことを言ふもんぢやないよ。トロエクーロフの旦那はトロエクーロフの旦那、ドゥブローフスキイの旦那はドゥブローフスキイの旦那なんだ。してわし等は一人のこらず、神樣と天子樣のしもべなんぢやないか、つてね。人の口にや戸は閉てられないつて、全くその通りで御座いますよ。」

「するとお前達は、トロエクーロフのものになるのが厭なんだね？」

「キリーラ・ペトローヴィチのものになるつて！　飛んでもないこつた！　あの旦那のとこぢや居つきの百姓だつて碌な暮らしはしてないのに、そこへ他所者がはいつた日にや、身の皮だけでなく、それこそ肉までこそぎ取られてしまひますよ。いやいや、アンドレイ・ガヴリーロヴィチの旦那がいつまでも達者でおいでなさるやうに！　また假りに大旦那を神樣がお召しになるとしても、わしらは若旦那のほかに、誰に養つて貰ふ氣があるもんですかね。ねえ若旦那、このわし等を見捨てないで下さいましよ、わしらも及ばずながらお味方をしますから。」

さう言ひながらアントンはひと振り鞭を當てて、手綱をさばいた。馬は跑をふむ足をはやめた。

馭者の老人の忠義な氣だてに感動して、ドゥブローフスキイはそのまま口を噤み、物思ひに沈んでしまつた。一時間あまりもすると、不意にグリーシャが聲を立てたので、彼の思ひは破れた。——

「そら、あれがそのボクローフスコエでさ！」

ドゥブローフスキイは顏を上げた。馬車は廣々とした湖のほとりを走つてゐる。湖から一條の小川が流れ出て、丘の間をうねりながら遙か彼方に消えてゐる。その丘の一つには、鬱蒼とした林の翠のうへに、宏壯な石造家屋が綠いろの甍と望樓を聳えさせ、また別の丘のうへには教會の五つの圓蓋（ドーム）と古風な鐘樓がそそり立つてゐる。その周りには百姓家がばら撒かれて、それぞれ菜園や井戸をもつてゐる。この土地はドゥブローフスキイに見覺えがあつた。彼はその丘のうへで、幼ないマーシャ・トロエクーロヴァと遊んだ昔を思ひ出した。マーシャは彼よりも二つ年下で、その頃からもう美人になる兆しが見えてゐた。彼はアントンに彼女のことを尋ねて見たかつた。しかし何だか氣恥づかしくて口に出せなかつた。

地主屋敷の間近かに差しかかつたとき、庭の樹立のあひだにちらちらする白い着物が彼の眼に

はいつた。けれどもそのとき、アントンは馬に鞭をくれ、辻馬車の馭者にも田舍の抱へ馭者にも共通な例の功名心に驅られて、まつしぐらに橋を渡り、庭のほとりを通り過ぎてしまつた。その村を出ると、道は爪先きあがりになり、やがてヴラヂーミルの眼には白樺の林がはいり、その左手のからりとひらけた場所には、赤屋根の、灰色がかつた小さな家が現はれた。胸が早鐘をつきはじめた。——遂に彼はキステニョーフカと、父親のみすぼらしい住家を眼前にしたのである。

十分ののちには、馬車はもう地主屋敷の門をくぐつてゐた。彼は何とも言へぬ感動を覺えて、つくづくとあたりを眺め廻した。二十年振りで見る故郷の姿である。まだ彼のゐたころ垣の傍に植ゑられたばかりだつた白樺の若木は、今ではもう大きくなつて、見上げるばかりの鬱蒼とした大樹になつてゐた。門内の廣場は、曾てはきちんと形のととのつた三つの花壇で飾られ、その間をきれいに掃き清められた廣い道が走つてゐたものだが、今では蓬々とした草地に變り果てて、脚を結（ゆは）かれた馬が一匹、草を食んでゐる。犬は吠えかかつて來たが、アントンのゐるのを見ると大人しくなつて、もじやもじやの尻尾を振りはじめた。僕婢たちが召使小屋からばらばらと走り出て、欣びのざわめきを立てながら若旦那をとりかこんだ。彼はやつとのことで熱心な歡迎の群をくぐり拔けて、長の年月に踏み耗らされた昇降口をのぼつた。玄關にはエゴーロヴナが出迎へて、泣く泣く自分の育て子に抱きついた。

「御機嫌よう、御機嫌よう、ばあや」と彼は、懐かしい老婆を胸に抱きしめながら繰り返した、「お父さんはどうだね、どこのお部屋かね？　お加減はどうかね？」

ちようどその時、やつとのことで足を引きずりながら、蒼ざめ痩せ衰へた背の高い老人が、部屋着に夜帽の姿で、廣間へはいつて來た。

「ヴォローヂカはどこかな？」と彼は力の無い聲で言つた。それを見るとヴラヂーミルは熱情を籠めて父親を抱擁した。この喜びはしかし、病人の心には餘りに烈しい衝動であつた。彼はぐつたりとなつて、足がすくんでしまひ、息子がすばやく支へなかつたら倒れるところだつた。

「なぜ起き出して來なさりました」とエゴーロヴナが咎めた、「足も立たないのに、みんなの眞似をしなさるなんて。」

老人は寢室へ連れ戻された。彼は息子と話をしようと力むのだつたが、頭がこんがらかつて、口に出す言葉はさつぱり脈絡がなかつた。やがて彼は口をつぐむと、うとうとと寢入つた。ヴラヂーミルは父親の容態を見て動顛してしまつた。彼は父親の病室にゐることにきめて、二人だけにさせてくれと皆に頼んだ。召使達は若主人の言附けに從つたが、今度はみんなでグリーシャへ鉢さきを轉じ、彼を召使部屋へ連れて行つて、さんざん質問や歡迎の言葉で苛めぬく一方、眞心を籠めた田舍料理をすすめるのだつた。

四

食事の卓のありしところ、いまは柩の座となれり。

到着してから三四日すると、息子は例の問題に取りかからうと思つた。ところが父親には必要な說明をして呉れるだけの氣力がないし、またアンドレイ・ガヴリーロヴィチは代理人も置いてゐない始末だつた。書類を引つくり返してゐるうちに彼の見出したのは、陪席判事の手紙と、それに對する返事の下書きだけだつた。何分それだけでは、今度の訴訟沙汰についてのはつきりしたことは摑めなかつた。で彼は、萬事は事件そのものの正義にまかせて、とにかく成行きを見ることに決めた。

一方アンドレイ・ガヴリーロヴィチの容態は刻一刻と惡くなつた。ヴラヂーミルは父の最後が愈〻近づいたのを見て、全く子供に歸つてしまつた老人の傍を離れずにゐた。

そのうちに法定期間は過ぎてしまつたが、控訴は提起されなかつた。キステニョーフカはもはやトロエクーロフのものであつた。シャベーシキンは彼のまへに挨拶に罷り出て、お祝ひを言上し、「御前はこの新附の領地を何時御支配の下にお移しになる御意向ですか、御自分でおやりに

なりますか、それとも誰かに委任せられますか」と、その指圖を仰いだ。キリーラ・ペトローヴィチはうろたへた。もともと貪慾に生まれついた男ではなかつたのだが、復讐慾に驅り立てられて、思はぬところまで來てしまつたのである。良心が疼いてゐた。曾て若い頃には同じ隊に勤めたことのある自分の敵手が、いまどんな狀態にあるかを知つてゐたので、彼は勝利をよろこぶ氣持にはなれなかつた。彼は怖ろしい眼付でシャベーシキンを睨みすゑ、何とかこの男を收鳴りつける文句のつけどころを搜したが、うまい口實が見附からなかつたので、腹立たしげな聲で、

「出て行け、お前の知つたことぢやない！」と言つた。

シャベーシキンは彼の御機嫌の斜めなのを見て、ぴよこんとお辭儀をすると、あたふたと出て行つた。一人になつたキリーラ・ペトローヴィチは、『ひびけ、勝利の鬨のこゑ』を口笛で吹きながら、部屋のなかを行きつ戻りつしはじめた。この歌が出るのはいつも、彼の考へが異常に亂れてゐるしるしであつた。

到頭しまひに、彼は競走用の馬車の用意を命じ、暖かに着込んで（それはもう九月の末であつた）、自分で手綱をとつて門を出て行つた。

間もなくアンドレイ・ガヴリーロヴィチの小さな家が、彼の眼にはいつて來た。二つの矛盾した感情が彼の胸をみたしはじめた。復讐の滿足感と征服慾とが、より崇高な感情の聲を或る程度

まで抑へつけてゐたが、やがてこの後の方が勝利を占めた。昔からの隣人と和解しよう、今までの爭ひはきれいに水に流してしまはう、彼の財産を返してやらう、と彼は決心した。この善い意圖のため心の重荷が下りて、キリーラ・ペトローヴィチは馬に跑を踏ませて隣人の屋敷へ近づき、眞直ぐに門内へ乘り入れた。

そのとき、病人は寢室の窓ぎはに坐つてゐたが、キリーラ・ペトローヴィチの姿を認めると、怖ろしい動搖の色を面にあらはした。いつもの蒼白さのうへにさつと紫色を流し、兩眼をぎらぎらと光らせ、何やら聽きとれぬ聲を立てた。息子は帳簿を繰りながらその場に居合はせたが、頭を上げて見て、只ならぬ父親の樣子に仰天した。病人は恐怖と忿怒の色を浮かべながら、庭先を指して見せた。ちやうどそこへ、エゴーロヴナの重い足どりと、かう叫ぶ聲が聞こえた。

「旦那樣、旦那樣！　キリーラ・ペトローヴィチが參りましたよ。キリーラ・ペトローヴィチが玄關先に參つてをりますよ！」さう言ふとエゴーロヴナは、天を仰いで嘆息した、「やれやれ、何といふことだらう？　あの人は一體どうしたのだらう？」

老人は椅子から起たうとして、急いで部屋着の裾をからげ、腰をもちあげたかと思ふと、急にそのまま倒れてしまつた。息子が驅け寄つて見ると、老人は氣を失つてゐるばかりか、息も通つてゐなかつた。麻痺の發作を起こしたのである。

「おい早く、大急ぎで町へ人をやれ、醫者を呼んで來るんだ！」とヴラヂーミルは呶鳴つた。
「キリーラ・ペトローヴィチがお目にかかりたいと仰しやいますが」と、そこへはいつて來た從僕が言つた。ヴラヂーミルは物凄い劍幕で彼を睨みつけた。
「一刻も早く退散しろとキリーラ・ペトローヴィチにさう言へ、俺の口から、奴を追ひ出せといふ命令の出ないうちにな。さあ行つて來い！」
從僕はいそいそと、若主人の命令を果たしに走り去つた。エゴーロヴナはびつくりして兩手をうち合はせた。
「まあ若樣」と彼女はきいきい聲で喚いた、「それぢやわが身の破滅といふものでございますよ！　キリーラ・ペトローヴィチが私どもを食ひ盡くしてしまひますよ。」
「お默り、ばあや」とヴラヂーミルは腹立たしげに言つた、「すぐさまアントンを町へやつて醫者を連れて來るんだ。」
エゴーロヴナは出て行つた。控室には誰もゐなかつた。みんなキリーラ・ペトローヴィチを見物に、庭へ駈け出して行つたのである。乳母が玄關先へ出たとき、ちやうど例の從僕が若主人の返事を傳へるのが聞こえた。キリーラ・ペトローヴィチは馬車に坐つたままそれを聽き終ると、みるみるその顏色は夜の闇よりも暗くなつた。そして嘲りの薄笑ひを浮かべ、怖ろしい眸を僕婢

達の上に投げると、そのまま緩くりと門内を廻りはじめた。彼はちらりと、今しがたまでアンドレイ・ガヴリーロヴィチの坐つてゐた窓を見上げたが、その姿はもうそこにはなかつた。乳母は若主人の言附けも忘れて、玄關先に棒立ちになつてゐた。僕婢達はがやがやとこの出來事を評定し合つてゐた。するとそこへ、不意にヴラヂーミルが出て來て、とぎれがちの聲でかう言つた。
「醫者はもういらなくなつた。――親父は亡くなつてしまつたよ。」
たちまち上を下への大騒動になつた。召使達は老主人の部屋へ駈け込んだ。老人は、肘掛椅子のうへに、ヴラヂーミルの手で移し寢かされてゐて、右腕は床まで垂れ下がり、頭はがくりと胸許に落ちてゐた。まだ冷たくはなつてゐないけれど、既に死相がありありと現はれて、もはやその身體には生の兆しは見えなかつた。エゴーロヴナはおろおろと泣き崩れ、僕婢達は最後の御世話をしなければならぬ遺骸を取り圍んだ。湯灌をして、一七九七年の仕立ての軍服を着せ、やがて食卓の上に安置した――永年のあひだ彼等がその傍に立つて主人の給仕を勤めて來た、その食卓のうへに。

五

葬儀は三日目に行はれた。哀れな老人の遺骸は、經帷子に包まれ、蠟燭に圍まれて、卓上に安置してあつた。食堂は召使で一杯で、もうみんな出棺の身仕度をととのへてゐる。ヴラヂーミルと三人の從僕が棺を昇きあげると、司祭が先頭に立ち、番僧がそれに續いて、埋葬の禱りを誦しながら進んだ。キステニョーフカの主人は、これを最後に吾が家の閾をまたぎ、やがて棺は林の道を進んだ。敎會はその向ふ側にあるのである。晴れ渡つた寒い日で、秋の葉がしきりに散りしいた。林を出ると、キステニョーフカの木造の敎會と、老いた菩提樹に翳らされた墓地が見えて來た。そこにはヴラヂーミルの母親の亡骸が眠つてゐるのだ。その墓の隣りに、前の日に新らしい穴が掘られてゐた。主人に最後の別かれをするために押しかけたキステニョーフカの百姓達で、敎會は一杯であつた。ヴラヂーミルは唱歌隊の傍に立つてゐたが、泣きもせず、祈りもしなかつた。その形相は物凄かつた。やがて葬ひの儀式が濟むと、ヴラヂーミルが先づ遺骸に別かれを告げ、僕婢一同がそれにつづいた。棺の蓋が運び込まれて、釘をうつ音が響いた。女房達は聲をあげて哭き、百姓達は時たま拳で涙を拭つた。ヴラヂーミルと例の三人の從僕は棺を墓場へ運

び、村ぢゆうの者がその後に從つた。棺が塚穴へおろされると、會葬の者はみんなてんでに一握りづつ砂を投げ入れた。間もなく穴は埋められ、人々は最後の禮拜をして散つて行つた。ヴラヂーミルは急ぎ足でその場を遠ざかり、一同を追ひ越して、キステニョーフカの林に姿を消した。

エゴーロヴナは、若主人は出席いたし兼ねますがと前置きして、彼の名代として司祭をはじめ敎會の一同をお齋に招待した。そこで神父アニーシムと梵妻フェドートヴナと番僧とは、徒歩で地主屋敷へ向かひながら、途々エゴーロヴナを相手に故人の美德を讃へたり、お見受けするところ後嗣の方はこの先なかなか御難儀なことぢや、などと評定し合つた。トロエクーロフの訪問や、その受けた待遇のことは、もうすつかり界隈に知れ渡つてゐて、土地の政談家連中はこりや容易ならん結果になるぞと豫言してゐたのである。

「なるやうにしかなりませんわ」と梵妻が言つた、「けれどね、ヴラヂーミル・アンドレーヴィチに御主人になつて頂けないとすると、そりや本當に殘念なことですわ。申し分のない立派な若樣なのにね。」

「けど、もし若樣でないとすると、誰が私どもの御主人におなりですかね？」とエゴーロヴナが遮つた、「あのキリーラ・ペトローヴィチがいくらいきり立つたつて駄目なこつてすわ——相手はどうして意氣地なしぢやありませんからね。うちの若樣は御自分でもちやんと陣構へをなさ

るだらうし、神様もお助け下さいますよ。それに世間は鬼ばかりぢやあるまいし、情をかけて下さる方がお見棄てぢやありますまいよ。あのキリーラ・ペトローヴィチの横柄さ加減といつたらねえ！　でも流石のあの人も、うちのグリーシカが、出てけ、毒碌犬め！　さつさと御門内を退散しろ！　つて呶鳴りつけた時には、おほかた尻尾を卷いたでせうよ。」

「やれやれ、エゴーロヴナさん」と番僧が言つた、「だがよくもグリゴーリイはそんなことが言へたもんだね。私なんぞは、あのキリーラ・ペトローヴィチをちよいと横目で見るよりや、まあ御無禮ながら大僧正のお前へでも出た方が、まだしも氣が樂だね。あの人を一目みると、途端にぞオつ、どきどきッと來る。そして脊骨がへなへなッと、かう曲がつちまふね……」

「空の空なる哉ですわい」と司祭が言つた、「キリーラ・ペトローヴィチにせよ矢張り、今日のアンドレイ・ガヴリーロヴィチと同樣、いつかは『永遠の記憶』の歌聲をお棺の中で聞かなければやならんのぢや。お葬式が少々立派だとて、お齋の客が少々多からうとて、神樣の眼には同じことではないかな？」

「まあ、神父樣！　私どもだつて近所の方々をみんなお招びしようと思つたのでしたよ。けどヴラヂーミル・アンドレーヴィチの御承知がなかつたのです。まあ御安心下さいまし、私どもにも御馳走いたす位のものは揃つてをりますよ。……それとも何か御所望がおありでせうか？　と

にもかくにも、お客が少なけりや少ないだけに、貴方さま方に十分のおもてなしが出來るといふものですよ。」

この愛想のいい約束と、美味しい揚饅頭にありつける望みが、知らず知らずこの連中の足を早めた。やがて恙なく地主屋敷に着いた時には、もう食卓の用意ができ、ヴォトカも出てゐた。

一方ヴラヂーミルは、からだの運動と疲勞とで胸の歎きを消さうと、林の茂みへずんずんと分け入つた。道も擇ばずに行く彼を、枝がのべつに引掛かり引掻き、足はのべつに泥濘にとられるのだつたが、彼は何にも氣がつかなかつた。やがて彼は、ぐるりを森に圍まれた小さな窪地に出た。細い流れが音も立てずに半ば衣をぬいだ秋の樹の間を縫つてゐる。ヴラヂーミルは立ちどまると、冷めたい芝生に腰をおろした。次第に暗くなりまさる思ひが、交る交る彼の胸をしめつけるのだつた。……ひしひしと孤獨が感じられ、行手は暗澹たる雨雲にとざされてゐる思ひだつた。みすみすトロエクーロフを敵に廻したことは、新らしい不幸を豫言するものに違ひなかつた。なけなしの遺産は、人手に渡るかも知れない、さうなると彼を待つものは無一文の境涯だ。長いあひだ彼は身じろぎもせずにそこに坐つたまま、幾枚かのわくら葉を運んで行く靜かな小流れに見入つてゐた。すると、まざまざと人生の縮圖を見る思ひがした——眞に迫つた、あまりにもありきたりの縮圖を。やがて彼は、黄昏れて來たのに氣がついた。彼は起ちあがつて、歸り途

を探しはじめたが、やつとのことで眞直ぐに家の門へ通じる小徑に出たのは、さんざ見知らぬ森の中を迷ひ歩いた末だつた。

すると向ふから、司祭が教會の總勢をつれてやつて來るのに出くはした。不吉な前兆といふ考へが胸をかすめた。彼は澁々に傍道へそれて、樹の間に姿をかくした。向ふでは彼に氣づかずに、何やら一所懸命に喋り合つてゐた。

「惡をはなれて善を積めよぢや」と司祭が細君に言つた、「わし等は何もここに居殘ることはないさ。今度のことがどうならうと、お前の知つたことぢやないからな。」

細君がそれに何か答へたが、ヴラヂーミルにはよく聞きとれなかつた。

やがて屋敷に近づくと、山のやうな人だかりが眼にはいつた。百姓や僕婢達が、門内の廣場に群がつてゐるのである。只ならぬざわめきや人聲が、ヴラヂーミルの耳に傳はつて來た。納屋の傍にはトロイカが二臺とまつてゐる。玄關の昇段には、役人のフロックを着た見知らぬ人影が幾つか立つて、何か談判してゐるらしかつた。

「一體これは何事だ?」と彼は、迎へに走つて來たアントンに向かつて腹立たしげに訊いた、「あの連中は何者だ、何の用で來たんだ?」

「ああ、若旦那」と老人は息を切らして答へた、「その裁判所からやつて來ましたんで。わし

等をトロエクーロフへ渡さうつていふんでございます、若旦那のお情け深い手から引き離さうつていふんでございます!……」

ヴラヂーミルはうなだれた。村の人々が不仕合はせな主人をとり圍んだ。

「お慈悲でございます、旦那樣」と口々に喚きながら、彼の手に接吻した、「わしどもの御主人はあなた樣のほかにはございません。ただやれと一言おつしやつて下さりさへすれば、役人どもはわし等が片附けてしまひます。死んだつて渡すことぢやありません。」

ヴラヂーミルは彼等を見つめてゐた。すると怖るべき感情が湧きあがつて來るのだつた。

「靜かにしてゐろ」と彼はたしなめた、「俺が小役人どもに談判してやる。」

「さうだ、談判して下さいまし、旦那」と群衆の中から聲が飛んだ、「あの惡黨どもによく言つて聽かせなさいまし。」

ヴラヂーミルは役人の方へ歩み寄つた。シャベーシキンは緣無し帽子をかぶり、兩手を腰に當てがつて、傲然とあたりを睥睨しながら立つてゐる。署長は五十がらみの、脊が高くてでつぷりして、赭ら顏に口髭を生やした男だつたが、ドゥブロフスキイの近づいて來るのを見ると咳拂ひをして、嗄れ聲で述べ立てはじめた。

「といふ譯であるから、我輩は今まで述べたことをもう一度繰返して言ふ。區裁判所の判決に

よつて、お前達はキリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフのものになつたのだ。その代表者としてここにシャベーシキン氏がをられる。ぢやからお前達は、この人の言はれることには何によらず從はなければならない。また女どもは萬事につけこの人を愛し敬ふやうにしなければならん。この人はお前らが大好物ぢやと仰しやる。」

そんな辛辣な冗談口を叩くと、署長は大口をあいて笑ひだした。シャベーシキンや他の役人連もそれについて笑ひだした。ヴラヂーミルは赫となつた。

「失敬ですが、この騒ぎは一體何ごとですか?」と彼は冷靜を裝ひながら、その陽氣な署長に訊いた。

「つまりだね」とわる達者な署長が答へた、「われわれはこの領地を、キリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフの所有に移すために來たのだ。同時にまた、ほかの或る者等には無事なうちに立退いて貰ひたいと思つてな。……」

「だがあなた方は、うちの百姓達を相手にされる前に、まづ私に向かつて、地主の權利を剝奪する旨を宣告なさるべき筈では……」

「これまで地主であつたアンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドゥブローフスキイは、神意によつて死亡したのだ。ところで、お前は何者かね?」とシャベーシキンは、横柄に相手を見下ろしな

がら言つた、「われわれは君を知らんし、また知らうとも思はん。」

「お役人衆に申し上げますがね、この方はうちの若旦那のヴラヂーミル・アンドレーヴィチでさ」と群衆の中から聲が飛んだ。

「誰だ、今そこで口出しした奴は!」と物凄い劍幕で署長が言つた、「そりやどこの旦那の話か? どこのヴラヂーミル・アンドレーヴィチの話か? お前たちの旦那はキリーラ・ペトローヴィチ・トロエクーロフぢや。……分かつたか、阿呆めが!」

「馬鹿いつてらあ!」と例の聲が應じた。

「いや、これは暴動ぢや!」と署長は喚いた、「こら、名主これへ出ろ!」

名主は進み出た。

「いま我輩に口を利いた不埒者を即刻搜し出せ。奴め、只では置かんぞ!……」

名主は群衆に向かつて、口をきいたのは誰だと訊ねた。けれどみんな默つてゐた。間もなく後列の方で呟き聲が起こつたかと思ふと、それが次第に高まつて、忽ちのうちに物凄い慟哭に變つてしまつた。署長は聲を落として、一同を賺しにかかつた。……

「何だつて奴をぼかんと見てゐるんだ」と下男達が喚きだした、「さあ皆、やつつけろ!」

群衆はぢりぢりと前へ出た。シャベーシキンと役人達は急いで玄關へ駈込んで、扉をしめた。

「みんな、進むんだ！」と例の聲が叫ぶと、群衆はどつと押し出して行つた。

「とまらんか！」とドゥブローフスキイは叫んだ、「馬鹿めが！　何をするんだ？　そんなことをすると、自分の身も俺の身も破滅だぞ。さあみんなうちへ歸つて、俺には構はんで呉れ。心配することはない、陛下は御仁慈でいらせられる。俺は陛下にお願ひしよう。陛下はきつと惡いやうにはなさるまい、われわれはみんな陛下の赤子だからな。だが、お前らが一揆を起こしたり追剝を働いたりしたら、どうして陛下がお前らの味方になつて下さるだらうか？」

若いドゥブローフスキイの演説は、そのよく徹る聲と堂々たる態度と相俟つて、望みどほりの效果を生んだ。群衆は鳴りをひそめて散つて行つた。やがて門内は空つぽになつたが、役人達はまだ家の中に坐り込んでゐた。ヴラヂーミルは悄然として玄關先へはいつた。シャベーシキンが扉をあけて、卑屈な態度で頭を下げながら、ドゥブローフスキイの厚意ある執り成しに禮を言ひはじめた。

ヴラヂーミルは見下げ果てた奴といはんばかりの顏で聞き流し、一言も返事をしなかつた。

「實は私どもは」と陪席判事が言葉を續けた、「あなたのお許しを得て此處で一泊させて頂かうと決めましたのですが。何分もう暗くなりまして、お宅の百姓達が途中で襲ひかからんとも限りませんから。ついては甚だ恐縮ですが、私どものために乾草でも結構ですから、何か客間に敷

くやうに仰しやつて頂けますまいか。夜が明けましたら直ぐ退散することに致しますから。」

「お好きになすつたらいいでせう」とドゥブローフスキイは素氣なく答へた、「私はもうここの主人ではありませんから。」

さう言ひ棄てると、彼は父親の部屋へ引きとつて、扉に錠をおろしてしまつた。

六

「これで、何もかもお仕舞ひだ！」とヴラヂーミルは獨りごちた、「朝のうちはまだ、これでも雨露を凌ぐ場所と一片のパンがあつた。明日になると俺は、自分の生まれた家を出て行かなければならない。親父の亡骸も、また親父が安らかに眠つてゐる土地も、あの憎んでも憎みきれぬ男、親父を殺し俺を無一文にした奴の持物になつてしまふのだ！……」

ヴラヂーミルは齒をくひしばつて、じつと眸を母親の肖像に注いだ。畫家は、白い朝着をまとひ、髪には一輪の薔薇の花を挿して、欄干に凭れてゐる母親を描いてゐた。

「この肖像畫も、俺達一族の敵の手に落ちてしまふのだ」とヴラヂーミルは思つた、「壞れ椅子と一緒に物置へ抛り込まれるか、それとも控室に掛けられて、あの犬畜どもの嘲笑と批評の的

にされるのだらう。母の寢室や、親父が息を引きとつた部屋は、用人の居間になるか、それとも女部屋にされてしまふのだらう。いやいや、俺が追ひ出されて行くこの哀しい家は、奴の手にだつて渡してはやらんぞ。」

ヴラヂーミルは齒がみをした。怖るべき考へが胸に湧いたのである。三百代言どもの聲は、彼の部屋にも傳はつて來た。すつかり主人顏をして、あれを持つて來い、これを持つて來いと命じる聲が、悲しい物思ひに沈んでゐる彼の耳に障つて不愉快だつた。やがて家の中はしんとしてしまつた。

ヴラヂーミルは用箪笥や文庫をあけて、亡父の遺した書類の整理にとりかかつた。その大部分は農事上の帳簿と、色々の事務の往復文書であつた。ヴラヂーミルは讀まずにそれを引裂いた。そのうちに、『わが妻の手紙』と上書きのある一束がひよつこり出てきた。烈しい感動を覺えながら、ヴラヂーミルはその整理にかかつた。手紙はみなトルコ出征の時に書かれたもので、キステニョーフカから軍隊へ宛ててあつた。母親は自分の侘しい生活や農事の有樣などを報じ、優しい言葉で別離を怨じ、一刻も早く最愛の妻の腕のなかへ歸るやうに呼びかけてゐた。またその一通には、幼いヴラヂーミルの健康を案じた文言が見え、また別の一通には、彼の智慧づきの早いのを喜び、幸福な輝かしい彼の將來を豫言してゐた。ヴラヂーミルは思はず讀み耽り、しん底から

ら家庭の幸福の世界にひたつて、時のたつのも忘れてゐた。と、柱時計が十一時を報じた。ヴラヂーミルは手紙の束をかくしに入れると、蠟燭を手にとつて書齋を出て行つた。廣間には小役人どもが床に寢てゐた。卓上には彼等の空にしたコップが散らかつて、ラム酒の強い香りが部屋ぢゆうに籠つてゐた。ヴラヂーミルはむかむかする思ひで彼等の傍を通り拔けて、控室に出た。そこは眞暗だつた。誰か蠟燭の光を見て、隅の方へ逃げ込んだものがあつた。ヴラヂーミルはその方へ灯を向けて、それが鍛冶屋のアルヒープであることを認めた。

「何だつてこんな所にゐるんだ？」と彼は驚いて訊ねた。

「わしはその……みんな家にゐるかどうかと思つて、見に來たんで」と、アルヒープは口籠りながら小聲で答へた。

「ぢやなぜ斧なんか持つてるんだ？」

「この斧ですかい？　だつて今どき斧を持たずに歩けるもんですかね？　何しろあの小役人どもと來たら、仕樣のない奴等ですからね。何をおつ始めるか知れたもんぢや……」

「お前は醉つてるんだ。斧なんかうつちやつて、向ふへ行つてお寢。」

「わしが醉つてるつて？　若且那、そりやあんまりです。一滴だつて頂いちやゐませんよ……それに第一、酒なんてことを思つてをられる時ですかい？　一體全體こんなことが、あつた例し

がありますかね。裁判所の奴等がわし等をわが物にしようと企らんでるんだ、奴等がわし等の御主人を屋敷から追ん出さうとしてるんだ。……どうだい、悪黨どものあの斬のかきやうは！　いつそひと思ひにばらしちまつて、跡も形もなくしちまふがいいんだ。」

ドゥブローフスキイは眉をひそめた。

「まあ聽け、アルヒープ」と彼はちよつと思案してから言つた、「お前の考へは拙いぞ、悪いのはあの小役人どもぢやないんだ。提灯をつけて俺についておいで。」

アルヒープは主人の手から蠟燭を受けとると、煖爐の蔭から提灯を探しだしてそれに灯を入れ、二人はこつそりと玄關口の段を降りて、庭先を歩いて行つた。夜番が鐵板を打ちはじめ、犬が吠えだした。

「夜番をしてゐるのは誰だ？」とドゥブローフスキイは訊いた。

「わたくしどもで、若旦那」と甲高い聲が答へた、「ヴァシリーサとルケーリヤです。」

「家へ歸つていいよ」とドゥブローフスキイは女達に言つた、「お前達には用はないから。」

「休暇を下さるんだ」とアルヒープは言ひ足した。

「有難うございます、旦那様」と女房達は答へて、すぐ歸つて行つた。

ドゥブローフスキイが先へ進んで行くと、二人の男が近寄つて來て聲をかけた。ドゥブローフ

スキイはその聲で、彼等がアントンとグリーシャであることを知つた。

「なぜお前達は起きてるんだ？」と彼は二人に訊いた。

「寢るどころの騒ぎですかい」とアントンが答へた、「ほんにこんな事にならうとは、誰しも思ひもしなかつたのに……」

「靜かに」とドゥブローフスキイは遮つた、「エゴーロヴナは何處にゐる？」

「お屋敷の居間にをりますよ」とグリーシャが答へた。

「お前行つて、ここへ連れといで。それから家のなかにゐる連中はみんな外へ出すんだ、小役人どものほかには人つ子一人殘らないやうにな。それからアントン、お前は馬車の用意をしろ。」

グリーシャは立ち去つたが、間もなく母親を連れて出て來た。老婆はその晩、着物をきたままでゐたのである。役人達のほかには、家中で目蓋を合はせた者は一人もなかつた。

「これでみんなか？」とドゥブローフスキイは訊いた、「誰かまだ家の中に殘つてゐる者はないか？」

「役人どものほかには鼠一匹をりません」とグリーシャが答へた。

「乾草か藁を持つて來い」とドゥブローフスキイは言つた。下男たちは厩へ走つて行つて、てんでに乾草を抱へて戻つて來た。

「玄關口の下へ積むんだ、さう、それでよし。さあみんな、火だ！」
アルヒーブが提灯を開くと、ドゥブローフスキイは木ぎれに火を移した。
「ちよつと待つた」と彼はアルヒーブに言つた、「あわてた拍子にどうやら俺は、玄關の扉をしめて來たらしいぞ。急いで行つて掛金を外して來い。」
アルヒーブは昇降口へ駈けつけた。見ると掛金は外れてゐる。アルヒーブは、『外して來いなんて、飛んでもねえこつた』と呟きながら、錠をおろしてしまつた。そしてドゥブローフスキイの所へ戻つた。
ドゥブローフスキイが木ぎれを近づけると、乾草はぱつと燃え立ち、焰がめらめらと舞ひ上がつて、門内は隅から隅まで明るく照らし出された。
「まあ、若様！」とエゴローヴナは悲しげに叫んだ、「あなたは何をなさるのです！」
「默つといで！」とドゥブローフスキイは言つた、「さあみんな、これでお別かれだ。俺は神様の御手にまかせて出かけるぞ。新らしい主人の下で仕合はせに暮らして呉れ。」
「旦那様、惠みぶかい旦那様」と召使達が喚いた、「死んだつて旦那様とお別かれするのは厭です。私どもも御一緒に參ります。」
馬の用意は出來てゐた。ドゥブローフスキイはグリーシャと一緒に馬車に乘り込んだ。アント

ンが一鞭當てると、彼等は門を出て行つた。
見る見るうちに焰は屋敷を包んでしまつた。床板ははじけ散り、燃えさかる梁が崩れ落ちた。眞紅の煙が屋根のうへに渦を卷き、慘ましい慟哭や悲鳴が聞こえて來た。
「助けてくれ、助けてくれよお！」
「さうは行かねえ」と毒々しい笑みを浮かべて火事を眺めてゐたアルヒーブが言つた。
「ねえ、アルヒーブや」とエゴーロヴナが言つた、「あの惡黨たちを助けておやりよ。神様の御褒美があるよ。」
「どうしてなるもんかよ」と鍛冶屋は答へた。
そのとき窓のなかに、二重枠を一所懸命に壞さうとしてゐる役人の姿が見えた。と、そこへ、屋根が凄まじい音響とともに崩れ落ちたので、號泣はやんでしまつた。
間もなく方々の僕婢小屋から、みんな駈け出して來た。女房達はけたたましい叫びを上げて、家財道具を運び出さうと焦り、子供等は火事を珍らしがつて躍り廻つた。火の粉は赤い吹雪をなして舞ひ狂つて、やがてそこここの小屋も燃えはじめた。
「さあこれで萬事よしだ！」とアルヒーブが言つた、「どうだい、よく燃えるぢやないか？ ポクローフスコエからの眺めは、また一段だらうなあ。」

ちやうどこの時、新らしい物が現はれて彼の注意をひいた。猫が一匹、燃えあがつた納屋の屋根を走り惑つて、跳びおりる場所が見附からないのである。ぐるりは火の海だつた。哀れな動物は、情けない鳴聲を立てながら救ひを求めてゐる。その絶望のさまを見て、腕白連中は笑ひころけた。

「何がをかしい、この餓鬼ども」と鍛冶屋は呶鳴りつけた、「手前等は神様が怖くないんだな。神様のお創りなすつたものが死にかけてゐるのに、けらけら笑つてやがる。」

さう言つて、火のついてゐる屋根に梯子をかけると、猫を助けに登つて行つた。猫は彼の氣持をさとつて、すばやく感謝の様子を見せながら、彼の袖にしがみついた。鍛冶屋は半焦けの態で、獲物を抱へて降りて來た。

「ぢやみんな、これでお別かれだ」と彼は、ごつた返してゐる一同に言ひかけた、「俺はもうここに用はないんだ。ぢや仕合はせにな、俺のことを悪く思ふなよ。」

鍛冶屋は立ち去つた。火の手はまだ暫く猛り狂つてゐたが、やがて鎮まつた。焰をたてぬ餘燼の山が夜闇の中に鮮かに燃えつづけ、そのまはりを焼け出されたキステニョーフカの村人達がうろついてゐた。

七

翌る日、火事のことは近在隈なく知れ渡つた。人々はてんでに、色んな當て推量や臆測を交へて噂をし合つた。ドゥブローフスキイの召使達が葬ひ酒に醉つ拂つて、全くの不注意から火を出したのだと言ひ張る者があるかと思へば、新宅祝ひの酒をやり過ぎた小役人達のせゐにする者もある。なかに或る者は事の眞相を察して、この慘事の下手人は、忿怒と絶望に驅られたドゥブローフスキイ自身にきまつてゐると言ひ切つた。そして彼自身も、法官たちや僕婢一同とともに焼け死んでゐると主張する人が多かつた。トロエクーロフは翌る日焼跡へやつて來て、自分で取調べを行つた。その結果、署長と陪席判事と代言人と書記の四名は、ヴラヂーミル・ドゥブローフスキイ、乳母エゴーロヴナ、從僕グリゴーリイ、馭者アントン、鍛冶職アルヒープも共々、行方不明なことが判明した。僕婢一同は、役人達が屋根の焼け落ちるとともに焼死したと申し立てた。果たして彼等の遺骨は掘り出された。農婦のヴァシリーサとルケーリヤは、火事の起きる五六分前にドゥブローフスキイと鍛冶屋アルヒープの姿を見掛けたと述べた。一同の申立てによると、鍛冶屋アルヒープは生存してをり、よし彼一人だけではないにせよ、少くもこの火事の主な

下手人に違ひなかつた。ドゥブローフスキイには強い嫌疑がかかつた。キリーラ・ペトローヴィチは知事に宛てて、この出來事の一部始終を報告し、かうして第二の訴訟事件がもち上がつた。

ところが間もなく新たな報らせが、人々の好奇心と噂話に糧を與へることになつた。一團の強盗が現はれて、近隣一帶に恐怖の影をひろげたのである。當局は早速對策を講じたが、それでは間に合はぬことが分かつた。掠奪沙汰は頻々として起こり、一回ごとに大仕掛になつて行つた。道路を行く者も村にゐる者も、ひとしく安心がならなかつた。強盗で鈴なりの幾臺かのトロイカが、白晝縣下あまねく横行して、旅行者や驛遞馬車をとめる。また村へ乘り込んで來て地主屋敷を掠め、それに火をかける。この一團の首領は、その才智と剛毅さと、また一種の寛大を以て鳴つてゐた。彼については色々と不思議な話が喧傳された。ドゥブローフスキイの名は誰の口にものぼつて、この大膽不敵な惡漢の一味を率ゐてゐるのは他ならぬ彼だと、誰しもさう思ひ込んでゐた。ただここに怪訝なのは、トロエクーロフの領地に被害のないことだつた。彼の納屋は一つとして强盗の掠奪を蒙らず、彼の荷馬車は一臺として停められたことがなかつた。トロエクーロフはいつもの增長慢から、この例外は自分の名が普ねく縣下に吹き込んだ長怖の念によるものとし、旁々彼の手でその持村に布かれた特に優秀な警察力によるものと考へてゐた。はじめのうち隣人達は、トロエクーロフのかうした尊大な考へ方を嘲笑ひ、はやくあの招かれざる客達が收穫

のどつさりあるはずのポクローブスコエを襲へばよいと、てんでに首を長くしてゐたけれど、たうとう仕舞ひには兜をぬいで、强盗團が彼にだけは得知れざる敬意を拂つてゐることを容認しなければならぬ羽目になつた。トロエクーロフは得意の鼻をうごめかして、またもドゥブローフスキイの掠奪があつたといふ報らせがはいる度毎に、いつもこの首魁をまんまと取り逃がしてゐる縣知事や、署長連や、中隊長連に對する當てこすりをふり撒くのであつた。

そのうちに、トロエクーロフの持村の祭禮日にあたる十月一日になつた。だが、この先の出來事について筆を進めるまへに私達は、讀者にとつて全く新らしい人物ではないまでも、この物語の冒頭で僅かにその名に觸れるにとどめて置いた二三の人物を、改めてお引合はせしなければならない。

八

恐らく讀者は、私達がまだ數言を費したに過ぎぬキリーラ・ペトローヴィチの娘がこの物語の女主人公であることを、既に推察されたことと思ふ。私達が叙述してゐる時代には、彼女はあたかも十七歳で、その容色は今を盛りと咲き匂つてゐた。父親は眼に入れても痛くない程の可愛が

りやうだつたが、しかも持ち前の我儘さはここにも現はれて、娘の言ひ出すことならどんな些細な氣紛れでもほいほいと聽き入れるかと思へば、がらりと態度を變へて嚴格になり、時には苛酷な仕打ちをさへして、娘を顫へ上がらせるのだつた。娘が自分に懐いてゐて呉れると自惚れてはゐたものの、この父親はついぞ娘の信頼をかち得た例しがなかつた。彼女はその感情や考へを父親に匿す癖がついてゐた。何しろそれを言ひ出しても果たしてどんなあしらひを受けるものやら、さつぱり見當がつかなかつたからである。彼女は心を許し合つた友達もなく、孤獨のうちに生長した。近隣の地主達の妻や娘は、滅多にキリーラ・ペトローヴィチの屋敷を訪れなかつた。彼のいつもの座談や亂痴氣遊びは、男の相手を要しこそすれ、婦人の仲間入りを要しなかつたからである。したがつてこの美少女が、キリーラ・ペトローヴィチの酒宴に招かれた客のあひだに、姿を現はすことは稀だつた。佛蘭西の十八世紀作品を主とする厖大な藏書は全く彼女の支配に委ねてあつた。『料理大全』のほか本といふものは一切讀んだことのない父親は、娘の讀む本の選擇を指導するわけには行かず、從つてマーシャが色んな種類の作品を片つ端から引繰り返して見たするに、結局小説に落ち着いたのは當然のことで、つまり曾てマドモワゼル・ミミの指導のもとに始められた自分の教育を、彼女はこんな工合に完成したのである。因みにこのミミ嬢といふのは、キリーラ・ペトローヴィチの絶大な信任と愛顧を蒙つた擧句に、この親しい間柄の結

實があまりにも明らかになるに及んで、彼がひそかに他の領地へ送るの餘儀なきに至つた人物である。

ミミ嬢がこの一家にのこしていつた印象は、かなり良好なものであつた。氣立てのいい娘で、のべつにキリーラ・ペトローヴィチが取り替へてゐた他のお氣に入り娘とは事かはり、彼に對して明らかに絶大な勢力を振るつてゐたにも拘はらず、決してその權勢を濫用するやうなことはなかつた。キリーラ・ペトローヴィチにしても彼女が一番氣に入つてゐたと見え、瓜二つといつてもよいくらゐ彼に似た跣足の子供たちが、うぢやうぢやと窓先を駈けずり廻つて、みんな僕婢の身分に算入されてゐたにも拘はらず、ミミ嬢の南國的な顔立ちを傳へてゐる黑い眼をした九歳の腕白小僧だけは、彼の手許で養はれて、正式の息子と認められてゐた。さてキリーラ・ペトローヴィチはこの幼いサーシャのため、モスクヴァから佛蘭西人の家庭教師を招聘したが、その男がちやうど今われわれが描きつつある出來事の最中に、ボクローフスコエへ到着したのである。

この教師は、その人好きのする容貌やさつぱりした態度とで、キリーラ・ペトローヴィチの氣に入つた。新着の教師はキリーラ・ペトローヴィチの前に、數通の證明書に添へてトロエクーロフの親戚からの添書を差出した。この親戚の家に彼は、四年も家庭教師として住み込んでゐたのである。キリーラ・ペトローヴィチはそれを殘らず點檢して見たが、結局のこる不滿はこのフラ

ンス人が若いといふことだつた。と云つてもそれは、年齢の不足といふことが、教師といふ不幸な職業になくては叶はぬ忍耐や經驗と兩立しないと考へた譯ではなくて、彼には彼でまた自ら別の懸念があつたのである。で、早速それを言ひ聞かせて置かうと決めて、マーシャを呼べと召使に命じた。キリーラ・ペトローヴィチはフランス語が喋れないので彼女に通譯をさせたのだ。

「ここへお出で、マーシャ。このムッシュになんか言つておくれ。まあ仕方がないから雇つてやらうが、但しだな、俺の女達の尻でも追つかけやがつたら最後、この犬つころめ只ぢや置かんぞと……さう通辯して呉れ、マーシャ。」

マーシャは顏を紅らめたが、やがて教師に向かつてフランス語で、父はあなたの謙抑と品行の方正とを希望してをりますと告げた。

フランス人は彼女に一禮して、よし御一家の愛顧を得られませぬまでも、尊敬だけは頂けるやうに努めるつもりであります、と答へた。

マーシャはこの答へを逐字譯して聽かせた。

「よろしい、よろしい！」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「この男には愛顧も尊敬も要りはせんのだ。奴の仕事はサーシャのお守をしてさ、文法と地理を教へりやいいんだ……さう通辯してくれ。」

マリヤ・キリーロヴナは父親の粗暴な言ひかたを和らげて通譯し、そこでキリーラ・ペトローヴィチはこのフランス人を、彼の居間に充てられた離れへさがらせた。

マーシャはこの若いフランス人に少しの注意も拂はなかつた。貴族的な偏見にとり圍まれて教育された彼女にとつては、家庭教師は下男か職人の一種に過ぎず、下男や職人は彼女には男性とは思へなかつたのである。彼女はまた、自分がどんな感銘をムッシュ・デフォルジュに與へたかも氣づかず、彼のどぎまぎした樣子にも、彼の不安さうな樣子にも、聲があやしく顫へてゐたのにも、さつぱり氣がつかなかつた。その後も數日のあひだ引き續いて、かなり頻繁に彼と顏を合はせたけれど、やはり大して注意を拂はなかつた。そのうち全く思ひがけないことから、彼女はこの男に對して全く新らしい見方をするやうになつたのである。

キリーラ・ペトローヴィチの邸内には大抵三四匹の仔熊が飼つてあつて、ポクローフスコエの領主の主な慰みの一つをなしてゐた。なかでも極く幼ない仔熊は毎日客間へ上げて、キリーラ・ペトローヴィチはそれに猫や仔犬を嗾しかけたりして、何時間もぶつ續けに遊び相手にした。やがて大きくなると、彼等は鎖につながれて、今度は本式に犬を嗾しかけて窘められるのであつた。時によると彼等を地主屋敷の窓さきへ引つ張り出して、釘を一ぱい植ゑた空の酒樽を轉がしてやる。熊ははじめは臭ひをかいでゐるが、やがてそつと觸つて見る。と掌にちくりと來る。怒

つて今度は力を出して樽を小突き廻す、それにつれて痛みは段々はげしくなる。すると熊はすつかり怒り狂つて、吼え立てながら樽へ突つかかつて行き、無益な怒りの種をこの哀れな動物の手から取り上げぬ限りは、どうしてもやめようとはしない。また時には馬車へ熊を二匹つけて、否應なしに客達を乘り込ませ、そこで熊をやたらむしやに駈けさせる。がしかし、キリーラ・ペトローヴィチの最も得意とする悪戯は、次のやうなものであつた。

それは腹を空かせた熊を、空つぽの部屋に閉ぢ籠めて、壁にねぢ込んだ環に綱でつないで置くのである。その綱の長さは殆んど部屋一杯に届くほどで、反對側の一隅だけが、僅かにこの怖るべき獣の襲撃を免かれるやうにしてある。そこで大抵は新顔の客を、この部屋の口まで連れて來、いきなりその部屋へ突き入れて、扉の錠をおろしてしまふ。そして不幸な犠牲者は、毛もくぢやらな隠者と二人きりにされるのである。哀れな客は、服の裾を引つ裂かれ、手を引つ掻かれた擧句に、間もなく安全な隅を見つけるのだつたが、時によるとまる三時間も壁にへたばりついたまま、眼前二歩のところでいきりたつた獣が、とび跳ね後脚でつつ立ち、吼え猛り身もがきし、彼を爪先に引つ掛けようと焦る有様を眺めてゐなければならなかつた。このロシヤ貴族の打興ぜらるる遊樂とは、このやうなものだつたのである！

さて例の教師が到着して四五日たつと、トロエクーロフは彼のことを思ひ出して、ひとつ熊の

部屋で御馳走をしてやらうと思ひ立つた。そこである朝彼を呼びつけ、自分で薄暗い廊下を案内して行つたが、遽かに傍の扉があいて、二人の從僕がフランス人をその中へ突き入れて、錠をおろしてしまつた。吾に返つた家庭教師は、綱に繋いである熊を認めた。獣は遠方から自分の客人を嗅ぎながら、鼻を鳴らしはじめたが、急に後脚で突つ立ちあがると、ぢりぢりと進んで來た。……フランス人はちつとも騒がず、逃腰にもならず、相手の襲ひかかるのを待ち受けた。熊が近づくと、デフォルジュはかくしから小型のピストルを取り出し、飢ゑた獣の耳へつつ込んでぶつ放した。熊はどさりと倒れた。その物音にみんなが駈けつけ、扉は開けられた。キリーラ・ペトローヴィチは一足跳み込むなり、自分の悪戯の意外な結果に呆れ返つてしまつた。

キリーラ・ペトローヴィチは、この出來事の一部始終は是非とも問ひ糺さなければならんと思つた。一體誰が、自分の目論んだ悪戯を前以てデフォルジュの耳に入れたのか、でなければなぜこの男は、裝塡したピストルをかくしに入れてゐたのか？　彼はマーシャを呼びにやつた。マーシャは駈けつけて來て、父親の訊問をフランス人に通譯した。

「熊のことなど聞いてゐた譯ではありません」とデフォルジュは答へた、「しかし私は常々ピストルは持つてをります。それはつまり、私がかうした身分であるため償ひを要求できないやうな侮蔑を受けた場合、そのまま泣き寢入りをしようとは思はないからです。」

マーシャは呆れたやうに彼の顔を見つめてゐたが、そのまま彼の言葉をキリーラ・ペトローヴィチに通譯して聽かせた。キリーラ・ペトローヴィチはそれには返事をせず、熊を引き出して皮を剝けと命じた。それから下男達に向かつてかう言つたものである。

「何たる剛膽な奴だ、びくともしなかつたぞ。斷じてびくともしなかつたぞ。」

この時以來、彼はデフォルジュが好きになつて、二度と彼を試さうなどとはしなかつた。

だがこの出來事のため、父親以上の感銘を受けたのはマリヤ・キリーロヴナであつた。彼女の乙女心はひどく搔き亂されてしまつた。何しろ彼女は、斃れてゐる熊と、その傍に平然と佇立して、泰然と彼女と言葉を交へてゐるデフォルジュを、眼のあたりにしたのである。勇敢と誇りかな矜持とが、何も貴族階級だけに屬するものではないことを、彼女は眼のあたりにしたのである。で彼女は、この時以來若い家庭教師に敬意を拂ふやうになり、しかもそれは時を追うて濃やかになつて行つた。ある種の交渉が二人のあひだに始まつたのである。マーシャは美しい聲音と豐かな音樂的天分を持つてゐたので、デフォルジュは稽古をつけて上げようと申し出た。さてその後は、マーシャが自分にはまだそれと氣づかぬながらも、彼に思ひを寄せるに至つたことは、既に讀者の容易に推察せられる所であらう。

九

祭禮の前夜になると、客は續々と乘り込んで來た。地主屋敷の母屋に泊るもの、その離れに泊るもの、用人の家に宿をとるもの、司祭の家に泊るもの、裕福な百姓の家に宿をとるもの、色々樣々であつた。既といふ既は客の馬で滿員になり、庭先や車置場は大小さまざまの馬車でぎつしりになつた。その夜は明けて朝の九時に、ミサの鐘が鳴り渡りはじめ、一同は長蛇の列をなして、キリーラ・ペトローヴィチが新たに造營した石造の敎會へ向かつた。この寺は毎年、彼の供物で飾られるのが例である。身分の高い信心家があんまり大勢集まつたため、平百姓は會堂の中へはいれず、上り口や柵のなかに立つてゐる始末だつた。ミサはキリーラ・ペトローヴィチが來ないので、まだ始まらなかつた。やがて彼は六頭立ての半幌馬車を乘りつけて、意氣揚々とマリヤ・キリーロヴナを伴つて自分の席へとほつた。男の視線も女の眸も一齊に彼女に注がれ、前者はその美貌に愕き、後者はしけしけとその裝ひを點檢するのだつた。間もなくミサがはじまつた。屋敷の僕婢をすぐつた歌手連が唱歌隊席にうたひ、キリーラ・ペトローヴィチはそれに和し、傍目もふらずに祈りを捧げ、やがて補祭が聲を張りあげて「この御堂の建立者は」云々と說

き及ぼすと、誇りかな卑下を示して地べたに達かんばかりの禮をした。

ミサが濟むと、まづキリーラ・ペトローヴィチが進み出て十字架に接吻し、他は一團をなしてそれに續いた。近隣の地主達は主人に敬意を表しに集まり、婦人達はマーシャを取り卷いた。キリーラ・ペトローヴィチは會堂を出しなに、一同を正餐に招待し、馬車に乘り込んで歸路についた。一同はそれに續いた。

客は屋敷の部屋部屋に滿ちた。しつきりなしに新顔がはいつて來るけれど、人波を掻き分けて主人のところへ行くまでがまた一苦勞だつた。夫人連は取り澄まして半圓形に坐を占め、流行遲れの服裝——といふのはつまり、時代のついた高價な衣裳をまとつて、てんでに眞珠やダイヤモンドを燦めかしてゐる。男連中は筋子(イクラ)やヴォトカのまはりに群がり寄つて、騷々しい調子外れの聲をあげて喋り合つてゐる。廣間では八十人前の食卓の用意の最中で、給仕は酒壜や蓋つき玻璃壜を配つたり、卓布を直したり、大童の態だつた。やがて家令が、食事の用意のととのつた旨を披露すると、キリーラ・ペトローヴィチが先づ着席し、婦人連はぞろぞろとそれに續いて、ある程度の年長順を守りながら、勿體ぶつてその席を占めた。令孃たちはまるで仔山羊の群のやうに遠慮し合つて、お互ひに隣あはせに席を占めた。その向ひ側に男連中が居並び、家庭教師と幼いサーシャは末席に列つた。

給仕が皿を配りはじめた。官等順に配るのであるが、はつきりしない場合には勘でやつて、しかも殆んど間違はないのだつた。皿の音やスプーンの響が、客の騷がしい話聲と入れまじつた。キリーラ・ペトローヴィチは頗る上機嫌で、一座をぐるりと見廻して、客好きの者のみが知る幸福をしみじみと味ふのだつた。とそのとき、六頭立ての半幌馬車が門内へはいつて來た。

「あれは誰だね」と主人は訊ねた。

「アントン・パフヌーチイチでございます」と數人の給仕が一齊に答へた。

扉があいて、そのアントン・パフヌーチイチ・スピーツィン——五十がらみの、痘痕だらけの眞ん圓な顏に、三重頤が飾りにくつついてゐる肥つちよが、ぴよこぴよこ頭を下げ、相好を崩し、早くも言譯に取りかからうとしながら、食堂へ轉け込んで來た。

「皿をもう一人前だ！」とキリーラ・ペトローヴィチは叫んだ、「さあどうぞお掛けなすつて、アントン・パフヌーチイチ。ところでこれは一體どうした譯ですかな、うちのミサにはお出でなさらん、食事には遲參なさるといふのは？　あんたにも似合はんことですな、信心も好き食事も好きといふあんたにな。」

「いや申譯ありません」とアントン・パフヌーチイチは、羊羹色の長上衣(カフタシ)のボタン孔にナプキンを結びつけながら答へた、「全く申譯ありませんよ、キリーラ・ペトローヴィチさん。實は早

くから出掛けたんでしたがね、十露里も來ないうちに急に前の車輪の箍が眞二つになつちまつたんですよ、全くいやはやですよ。仕合はせなことに村が近かつたものでね、そこまで引張つて行く、さて鍛冶屋を探しだす、やがてまあどうやらかうやらすつかり直るまで、きつかり三時間かかつたといふ始末で、どうにも仕方がなかつた譯ですよ。おまけにキステニョーフカの林を抜けりや近道なんですが、どうもそれが厭でね、ぐるりと遠廻りをして來たもんでね。」

「おやおや！」とキリーラ・ペトローヴィチが遮つた、「ぢやあんたは、十勇士の仲間ぢやない譯ですな。何が怖いんですね？」

「何が怖いつて、キリーラ・ペトローヴィチさん。きまつてるぢあやりませんか、ドゥブローフスキイですよ。いつ何どき、奴さんにとつ捕まらんとも限りませんからな。どうもひどく達者な男でね、狙つたら最後逃がしつこはありませんよ。おまけにこの私が捕まつた日にや、一枚ぢや濟みませんね、てつきり皮の二枚ぐらゐは剝がれちまひますね。」

「それはまた、なぜさう特別に睨まれてるんだね。」

「何故つて、キリーラ・ペトローヴィチさん、あの亡くなつたアンドレイ・ガヴリーロヴィチの訴訟の一件ですよ。あんたの滿足の行くやう——いやその、良心と正義の聲に從つてですな、ドゥブローフスキイ一家は何等の權限なしに、遍へにあんたの寛容によつてキステニョーフカを

領してゐると證言したのは、この私だつたぢやありませんか。すると故人は（天國に安らはんことを！）、この恨みは思ふ存分晴らしてやるぞと神かけて誓つたんですよ。あの息子はきつと親父の言葉を守るに相違ありません。尤も今のところは神樣のお惠みで、たかだか穀倉を一つ掠られたきりですが、いつ何どき屋敷まで手を伸ばして來ないとも限りませんからね。」

「屋敷へ推參すりや、奴等にやしこたま仕事があるからな」とキリーラ・ペトローヴィチが一本釘をさした、「どうやら赤い金箱にぎつしり詰まつてるらしいぜ。」

「どう致しまして、キリーラ・ペトローヴィチさん。ぎつしりだつたこともありますが、當今ぢやまるで空つぽですよ！」

「嘘も大抵にし給へ、アントン・パフヌーチイチ。われわれみんな、君のことは知つてゐるよ。一體何の金の使ひ途があるのかね？　內の暮らしは豚も同然だしさ、お客一人招ぶぢやなし、百姓どもは搾り上げるしさ、それぢや溜まる一方ぢやないか。」

「いや御冗談ばつかり、キリーラ・ペトローヴィチさん」とアントン・パフヌーチイチは、にやりとして言つた、「それどころか、本當に身代限りしちまつたんですよ。」

さう言ふとアントン・パフヌーチイチは、脂つこい酢揚饅頭の一片れで、主人の鷹揚な冗談の口直しにかかつた。そこでキリーラ・ペトローヴィチは彼を見棄てて、今度は新任の署長へ鉾を

轉じた。これははじめてこの邸に招ばれて來た男で、遙か末席の家庭教師の隣に坐つてゐた。

「ところで署長さん、どうですな。間もなくドゥブローフスキイを捕まへて頂けますかな。」

署長は恐れ入つて、ぴよこんと頭を下げ、泣き出しさうな笑ひを浮かべ、何か言ひさうにしてやめ、とどのつまりかう言つた。

「努力いたします、閣下。」

「ふむ！　努力いたしますか。大分長いこと努力してをられるが、さつぱり利目がありませんな。だが尤も、奴さんをとつ捕まへちや元も子もない譯ですなあ。ドゥブローフスキイの掠奪は、署長さんにとつちや謂はば天惠だからな。やれ出張だ、やれ調査だ、やれ追跡だ、といふ譯でポケットがそのたんびに膨れる。こんな大恩人をどうして取り除いていいものかね！　さうぢやありませんかね署長さん？」

「全くその通りであります、閣下。」とすつかりあがつてしまつた署長が答へた。

一座はどつと笑ひ崩れた。

「若い者は正直だから好きだよ」とキリーラ・ペトローヴィチは言つた、「してみるとつまり、私はここのお役人衆の援助を待たずに、仕事にかからんけりやならんことになる。それにつけてもあの亡くなつた署長のタラス・アレクセーヴィチは惜しいことをしましたなあ。もしあれが燒

け死んでゐなけりや、この界隈はもつと安穩だつたでせうにな。ところで何かドゥブローフスキイの噂はありませんかな？　最近奴が姿を見せたのは何處ですかな？」

「わたくしどもの宅でございますよ、キリーラ・ペトローヴィチ」と肥つた婦人が笛のやうな聲を出した、「この前の火曜日に、わたくしどもで食事をして參りましたの。」

一座の視線はアンナ・サヴィーシナ・グローボヴァに注がれた。これは頗る氣さくな未亡人で、親切で陽氣なところが皆に好かれてゐた。一同は興味に驅られて、彼女の話に聽き耳をたてた。

「まづ御承知おき願ひたいのは、三週間ほど前わたくしが、うちのヴァニューシャへやる手紙を用人に持たせて、郵便局へ出しにやつたのですの。伜を甘やかす氣はございませんし、また甘やかしたいと思つたところで、何分うちの身代ではどうにもなりませんわ。けど皆様も御存じの通り、近衛士官と申すものは、やはりそれ相應の暮らしをしなければなりませんもので、なけなしの收入をはたいて出來るだけのことはしてやつてをりますの。といふ譯で二千ルーブリだけ送つてやりましたのです。ドゥブローフスキイといふことは思はないぢやありませんでしたけど、なに町まではたつた七露里だし、きつと神樣が送り屆けて下さるだらう、とかう思ひ返しましたのよ。ところがどうでせう皆樣、日が暮れてから用人が眞蒼になつて着物をぼろぼろにして、

歩いて歸つて參つたぢやありませんか。わたくし思はず聲を上げてしまひましたのよ。『どうしたの、一體何ごとがあつたの』つて訊きますと、『あの奥様、强盜にやられました、すんでのことで殺されるところでございました。當のドゥブローフスキイがをりましてね、縊め殺せと言ひましたつけが、やがて可哀さうになつたのでせう、放して呉れましたんです。その代り、すつかり剝ぎとられちまつて、馬から車まで奪り上げられました。』わたくしはもうぼおつとして仕舞ひましたの。やれやれ情ない、うちのヴァニュシャはどうするだらう？　でも仕様がありません。そこでまた手紙を書きましてね、一部始終をすつかりぶちまけて、一文も入れずにあの子に祝福だけを送つてやりましたの。

「それから一週間たち二週間たちますと、ある日だし抜けに半幌馬車が門内へはひつて參るぢやありませんか。何でもさる將官の方が、わたくしに面會したいと仰しやるのです。さあどうぞと申させますとね、上がつて見えたその方は三十五ほどのお年恰好、淺黑いお顏で眞黑な髪の毛、それに口髭や頰髭をお生やしになつて、クーリネフ將軍[3]に生き寫しの方でした。亡くなつた夫のイヴァン・アンドレーヴィチとは同じ隊に勤めた親友でしたと名乘られましてね、ちやうど近くを通りすがつて、わたくしがそこに住んでゐると知りながら、みすみす亡友の未亡人を見舞はずに立ち去る譯には參りませんでしたと仰しやるのです。そこで何はなくとも御馳走をいたしまし

てね、あれやこれやとお話をするうちに、やがてドゥブローフスキイの話が出ましたの。わたくしが先日の災難のお話をしますと、將軍は眉をお顰めになつて、『それはをかしい』と仰しやるのです、『私の聞き及んだところでは、ドゥブローフスキイは相手構はず襲ひかかるわけではなく、名の知れた物持ちを選んで襲つて、それも根こそぎ奪ひとるやうなことはせず、幾分殘して置くといふ話です。それにあの男が人殺しをやるといふ話は誰からも聞いたことがありませんな。どうもそのお話には怪しい節があるやうです。その用人をここへお呼び下さいませんか。』そこで用人を呼びにやりましたの。

「支配人は客間へはいつて參りましたが、將軍の姿を一目みるなり、その場に立ち竦んでしまひましたの。『君、ひとつ話して呉れんかね、ドゥブローフスキイは一體どんな工合に君の持物を剝ぎとつたのかね、それから君を縊り殺さうとしたさうだが、どんな様子だつたかね？』すると用人はぶるぶる顫へだしましてね、將軍の足もとに跪いてしまひました。『將軍さま、惡うございました。つい出來心で……嘘を申しました。』『さういふ次第なら』と將軍は答へて、『その一部始終を奥様に申し上げなさい。わしもここで聽かせて貰はう。』けれども用人はまだ人心地がつきませんの。『で、どうなのかね』と將軍は言葉をお續けになつて、『一體どこでドゥブローフスキイに出會つたのだね？』『二本松の所で、將軍さま、あの二本松のところでございました。』

『で、あの男は何て君に言つたのかね？』『あの人は、お前の主人は誰か、何處へ何しに行くのか、と訊ねました。』『すると？』『するとあの人は、手紙と金を出せと申しました。で私は、手紙とお金を渡しました。』『で、あの男はどうしたかね？』『さうしますとあの人は……將軍さま、悪うございました。』『であの男はどうしたのかね？』『あの人は、お金も手紙も返して呉れまして、ぢや氣をつけて行くがよい。郵便局へ出すんだぞ、と申しました。』『それから？』『將軍さま、本當に悪いことを致しました！』すると將軍は怖ろしい聲で、『よし、お前はわしが處分してやるぞ』と仰しやいましてね、わたくしに向かひ、『では奥様、この騙り者の行李をよく搔き廻して見るやうにお申しつけなさい。それからこの男は一先づ私にお預け願ひます、ひとつ懲らしめてやりませう。奥様はお聞き及びでないかも知れませんが、一體あのドゥブローフスキイといふ男は曾ては近衛士官だつたものです。ですから同僚に損害を與へるやうな眞似はしない筈ですよ。』そこでわたくしはこの將軍が誰方なのか、だんだんと分かつて參りましたの。語るに落ちたとはこの事でございますものね。そこで馭者達が用人をその方の馬車の馭者臺へ縛りつける、そのあひだにお金が見附かるといふ譯でしてね、一方將軍は夕食を召上がると、すぐさまその用人を連れて發つて行かれましたの。ええ、その用人は翌る日になつて森の中で見つかりましたけれど、樫の木に縛りつけられて、すつかり裸かにされてをりましたわ。」

一座は鳴りをひそめてアンナ・サヴィーシナの物語に耳を澄ました。なかでも令嬢達が最も熱心であつた。その令嬢達の多くは、ドゥブローフスキイに小説の主人公の面影をみとめて、ひそかに彼に好意を寄せたが、特にラドクリフ[4]の神秘的な恐怖があたまの髄まで滲みこんでゐる火のやうな夢想家のマリヤ・キリーロヴナは、なかでも一ばん夢中になつてしまつた。

「ではアンナ・サヴィーシナ、あんたはその將軍といふのがドゥブローフスキイその人だと思はれるのかな？」とキリーラ・ペトローヴィチが訊ねた、「それは見當違ひも甚だしいといはねばならん。そりや私もその客人が誰だつたかは知らんが、とにかくドゥブローフスキイぢやないですな。」

「何でドゥブローフスキイでないことがありませう？　ぢや、もしあの人でないとしたら、一體誰が大道へ乘り出して、通行人を停めたり、持物を調べたり致しませう？」

「さあ、それは知らんが、とにかくドゥブローフスキイでないことは確かですな。私はあの男の幼い頃を知つてゐるが、勿論、その後あの男の髪の毛が黒くなつたのならいざ知らず、少くも當時は薄色の捲毛をした子供でしたな。おまけにこれは確かに知つてゐるが、ドゥブローフスキイはうちのマーシャより五つ上だつたから、從つて三十五ぢやなくつて二十三ぐらゐの筈ですよ。」

「仰せの通りでございます、閣下」と、署長が聲明した、「私はヴラヂーミル・ドゥブローフスキイの人相書を懐中致してをりますが、それには生年二十三歳と明記してございます。」

「ほう」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「いい序でだ、それを讀み上げて見給へ、謹聽しようぢやないか。奴さんの人相書を心得ておくのも悪くはあるまい。萬一眼の前に現はれやうものなら、もう逃がしつこはないからね。」

署長はかくしから大分手垢のついた一葉の紙をとり出し、勿體ぶつてそれを擴げると、緩りと節をつけて讀みだした。

『元僕婢の口供に基づきて作成せるドゥブローフスキイの人相書。——生年二十三歳、中背にして眉目秀麗、鬚は剃り、眼は嵩色、頭髪は亞麻色、鼻筋とほれり、特徴——とり分けて言ふべきものなし。』

「それつきりか！」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた。

「これだけであります」と紙を疊みながら署長は言つた。

「いやお目出度う、署長さん。素晴らしい書類だな！ その人相書さへありや、苦もなくドゥブローフスキイなんか搜し出せるだらうさ！ 實際、中背で、亞麻色の毛で、鼻筋がとほつて、嵩色の眼をしてゐない奴がありますかな？ いや賭をしてもいいよ、それぢや三時間ぶつ通しに

當のドゥブローフスキイを相手に喋つたところで、相手が何者やらとても氣がつきつこはないね。何ともはや、お役人頭のといふものは見上げたもんだな。」

署長はおとなしく書附をかくしに納めると、默つてキャベツつき鵝鳥料理にナイフを入れた。さうかうするうちに給仕は、すでに四五回も客の杯を滿たして巡り、數本のコーカサス産やドン地方産の葡萄酒が響きたかく栓を飛ばし、三鞭酒として客の寵遇を忝うした。居ならぶ顏は次第に紅くなり、會話は益〻聲高に、亂調子に浮き浮きしていつた。

「いや、全くですな」とキリーラ・ペトローヴィチは言葉をつづけた、「あの死んだタラス・アレクセーヴィチのやうな署長は、もう二度と見られんですなあ！ がつちりした拔目のない男でしたからな。あの好漢を燒け死なしたのは實に惜しかつたよ。生きてさへゐたら、一味徒黨のこらず珠數つなぎにしたでせうにな。殘る一人までですつかり縛り上げて、當のドゥブローフスキイだつて逃がしはしなかつたらうになあ。そりやタラス・アレクセーヴィチだつて奴から金はとつたかも知れんが、だとて當人をおめおめ逃がすやうな男ぢやなかつた。それが故人の遺り口だつたですよ。だがまあ仕方がない。かうなつた以上、愈〻この私が乘り出して、うちの下男どもを引具して强盗どもに當たらんけりや、收まりがつかんらしい。まあ手始めには二十人も繰り出せば、それで奴等の巢喰つてゐる森の掃除は出來るだらうて。何しろ臆病者は一人もをらんし、

みんな一人で熊に向かはうといふ奴等だから、強盗どもを見たつて後へ退くことぢやないからな。」

「ときに例の熊は達者ですかね、キリーラ・ペトローヴィチさん」とアントン・パフヌーチイチが訊ねた。彼は今の言葉で、この毛むくぢやらな知人のことや、曾て自分もその槍玉にあがつたことのある主人の悪戯を思ひ出したのである。

「いや、あのミーシャはこの世にいとまを告げましたよ」とキリーラ・ペトローヴィチが答へた、「敵の手にかかつて天晴れ討死を遂げたのさ。それ、あの男がその勝利者ですて！」キリーラ・ペトローヴィチはデフォルジュを指さして、「うちの家庭教師を、これからは尊敬するんだね。あの男は君の……いはばまあ遺恨をだね、晴らして呉れたのさ。……覚えてますかな？」

「いや忘れる段ぢやありませんよ」とアントン・パフヌーチイチは頭を搔き搔き答へた、「よく覚えてゐますよ。ぢやミーシャは死んだんですね。可哀さうなことをしましたなあ、ミーシャは！　實に面白い奴でしたな、それに利口な奴でね！　あんな熊はほかには見つかりませんね。だがあのムッシュはなぜ殺しなんぞしたんですね？」

キリーラ・ペトローヴィチは何しろ、自分の身の周りにあるものは何によらず、自慢せずにはをられない幸福な才能に惠まれた男だから、そこで得々としてお抱へのフランス人の偉業を辯じ

たてはじめた。一座の者が、ミーシャの死についての一場の物語にじつと聽き入つて、驚嘆の眼をデフォルジュに投けてゐるのに、こちらは自分の勇敢さが話題になつてゐるようなどとは一向氣づかず、平氣の平左でその席に坐つたまま、やんちやな教へ子に訓戒を與へてゐた。

三時間ほども續いた夕食が終つた。主人がナプキンを卓におくと、一同は立つて客間へ出て行つたが、そこには珈琲や骨牌のみならず、すでに食堂で盛大に開始された酒宴の續きが、彼等を待ち受けてゐた。

十

日が暮れて七時ごろになると、客のなかには歸らうとする者が出てきた。ところがポンス酒でいい機嫌になつた主人は、門を締めてしまへと命じ、翌る朝までは誰一人屋敷からは出さないと宣告した。間もなく音樂の調べが響き、廣間の扉がひらいて、舞踏會がはじまつた。主人は懇意な人達に圍まれて一隅に陣どり、立てつづけに茶を飲み乾しながら、若い者の打興じる有様を眼を細めて眺めてゐた。老人連は骨牌の卓を圍んでゐる。舞踏の騎士（カヴァリエ）は、槍騎兵旅團の駐屯してゐない土地では何處も同じであるが、相手の婦人（ダーム）の數よりも少なかつた。いやしくも舞踏に用にた

つ限りの男たちは、のこらず引つ張り出されてしまつた。なかでも一きは目だつたのは家庭教師で、踊る度數も一ばん多かつたし、令嬢連は我がちに彼を相手に選んで、彼となら實に上手にワルツが踊れることを發見するのであつた。彼はまたマリヤ・キリーロヴナと組んで廣間を三四周したが、すると令嬢たちは岡燒き半分にじつと眼を離さないのだつた。やがて十二時近くになると、ぐつたり疲れてしまつた主人は舞踏をやめさせて、客に夜食を出すやうに命じ、自分は寢間へ引き取つた。

キリーラ・ペトローヴィチがゐなくなると、一座は一段と寛ろぎ活氣づいた。騎士は作法もそつちのけで婦人連の傍に席を占めるし、少女たちは笑ひさざめき、隣同志でひそひそ話をするのだつた。夫人連は卓子ごしに大聲で喋り合ひ、男連中は杯を傾けながら、議論をし、高笑ひをした。一口でいへば實に浮き浮きした夜食で、めいめいの胸に愉しい思ひ出を殘したわけである。

ところが一人だけ、一座の歡樂の仲間入りをしない男があつた。それはアントン・パフヌーチイチで、陰氣な顏で默りこくつてその席に坐り、うはの空で口を動かし、何かひどく不安さうな樣子であつた。先刻の强盜の話のおかげで、すつかり氣持が亂れてしまつたのである。この男が强盜を怖れるのには、それ相當の理由のあることを、私達は間もなく覺るであらう。

アントン・パフヌーチイチが例の赤い金箱が全く空つぽなことを、たとへ神かけて誓つたとしても、嘘でもないし、罪惡でもないのである。曾てその箱には仕舞つてあつた金は、今では革囊に移されて、胸のルバーシカの下にちやんと納まつてゐるのである。かうした用心をしてはじめて、人を見たら泥棒と思つてしよつちゆう苦勞の絶えない彼は、僅かに安心が行つたのである。

ところが今、どうしても他人の家に泊つて行かなければならぬ羽目になつて見ると、今度は泥棒の侵入し易いどこか淋しい部屋にでも案内されたら事だと、それが心配になつて來た。彼は頼りになる相手を眼で探してゐたが、とどのつまりデフォルジュを選び出した。腕力のありさうなその外貌と、いや寧ろアントン・パフヌーチイチが可哀さうに思ひだす度に身顫ひせずにはをられないあの熊に出喰はした際に、彼の示した勇氣が、この選擇を決定したのである。やがて一同が食卓を離れると、アントン・パフヌーチイチは若いフランス人のまはりをぐるぐる廻つて、咽喉を鳴らしたり、咳拂ひをしたりしてゐたが、やがての果てに彼に向かつて、その意中を打明けた。

「おほん、おつほん！　いかがでせう、貴方、今夜あんたの部屋に泊めて頂けませんかな。といふのはつまりですな、御存じの通り……」

「何か御用でいらつしやいますか？」とデフォルジュは、慇懃に一禮して訊ねた。

「さあ弱つたぞ！　貴方、君はまだロシヤ語は覺えてないんですかい。私はあんたのところに泊りたくある、分かつたかね？」

「あなた(ムッシュ)お安い御用でございます(トレ・グオロンチエ)」とデフォルジュは答へた、「ではそのやうにお指圖おき下さい(ヴーイエ・ドンネ・デ・ゾルドル・アン・コンセカンス)。」

アントン・パフヌーチイチは自分のフランス語の知識に大いに滿足して、直ちにさう取計つて貰ひに廣間を出て行つた。

客は互ひに別かれを告げて、それぞれ宛てがはれた部屋へ引き取つていつた。アントン・パフヌーチイチは教師と連れだつて離れへ通つた。闇夜だつた。デフォルジュは提燈で足もとを照らし、アントン・パフヌーチイチはそのあとから、時々胸もとに祕めた革嚢を手で抑へて金が無事なのを確かめながら、かなり威勢よく歩いていつた。

離れに着くと、教師は蠟燭をともし、二人は着物を脱ぎはじめた。アントン・パフヌーチイチは部屋を歩き廻つて、錠や窓の工合を調べ、檢査の結果が面白くないと見えてしきりに首を振つた。扉は閂一本きりで閉めてあるし、窓にはまだ二重枠が取りつけてない。彼はデフォルジュに苦情を言はうとして見たが、何分彼の貧弱なフランス語の知識では、とてもそんな複雜な説明はできなかつた。相手には彼の言ふことが通ぜず、アントン・パフヌーチイチは苦情を諦めるほかはなかつた。二人の寢臺は向かひ合はせに置いてあつた。二人が横になると、教師は蠟燭を吹き消した。

「何故あんたは(ブルクファ・ヴー・トゥシエ、何故あんたは(ブルクファ・ヴー・トゥシエ?」とアントン・パフヌーチイチは、消すといふロシヤ語の動詞の尻尾だけをいい加減にフランス風に變へながら、叫び立てた、「俺は暗闇ぢや睡むれ(ドルミール)ないんだよ。」

デフォルジュは彼の絶叫の意味を解さず、お寢みなさいを言つた。

「ええ忌々しい邪教徒め!」とスピーツィンは毛布にくるまりながら呟いた、「一體蠟燭を消す必要はないんだ。奴さんにだつていい事はないんだ。それに俺は灯がないと眠れないのだ。——モッスー、モッスー」と彼は續けた、「私は(ジエ・ヴ)あんたと話したいことがある(ア・ヴー・パルレ)。」

だが佛蘭西人はうんともすんとも答へず、間もなく鼾をかきはじめた。

「鼾をかいてやがる、このフランスの人でなしめが」とアントン・パフヌーチイチは思つた、「これぢや俺は睡氣もさして來やせん。泥棒が開け放しの扉口から、それともあの窓から這入つて來まいものでもなし、この人でなしと來たら大砲をぶつ放したつて起きやせん。モッスー、ねえモッスー! 畜生、勝手にしろ。」

アントン・パフヌーチイチはそれなり默つてしまつたが、そのうちに疲れと酒氣とがだんだん彼の臆病さに打ち克つて、うとうとし出したと思ふと、間もなく前後も知らぬ深い睡りに落ちてしまつた。

やがて彼は妙な目覺めを味ふことになつた。夢うつつの境で、彼は何者かの手がそつと自分のルベーシカの襟を引つぱるのを感じた。アントン・パフヌーチイチは眼をあけた。すると秋の朝の白々とした光のなかに、デフォルジュの姿を眼前に見出した。フランス人は片手に懐中用のピストルを握り、殘る片手で例の虎の子の財布を外さうとしてゐる。アントン・パフヌーチイチは卒倒せんばかりに驚いた。「どうしたことだ、モッスー、どうしたことだ?」と彼は聲を顫はせて言つた。

「しッ! 靜かにしろ!」と教師は生粋のロシヤ語で答へた、「靜かにしろ! さもないと殺しちまふぞ。俺はドゥブローフスキイだ。」

十一

さてここで讀者のお許しを願つて、この物語に今しがた起こつた事件の説明のために、わたしたちがまだ話す機會のなかつた既往の事情に遡ることにしよう。

＊＊＊といふ宿場の、既に私達が觸れたことのある驛長の家の片隅に、一目で平民か外國人と分かる内氣な辛抱づよい様子をした旅人が――言ひ換へれば驛遞路では肩身の狭い男が、腰をお

ろしてゐた。彼の馬車は油を注すため、庭先に乘り棄ててあつた。その中には小さなトランクが轉がつてゐるだけで、持主があまり裕福ならぬことを雄辯に物語つてゐた。旅人は茶を頼むではなし珈琲を誂へるではなし、窓の外を折々眺めては口笛ばかり吹いてゐた。これが仕切りの向ふに坐つてゐる驛長夫人の癇にさはつた。

「とんだ口笛屋が舞ひ込んだもんだよ」と、彼女が小聲で言つた、「まあまあ、吹くこと吹くこと! いつそ吹き裂けちまへばいいに、忌々しい毛唐だね。」

「それがどうした?」と驛長が言つた、「別に困らんぢやないか。勝手に吹かしとくさ。」

「別に困らんですつて?」とお神が腹を立ててやり返した、「あんた縁起つていふことを知らないの?」

「どんな縁起かね? 口笛は金を追ひ出すつてことかね? 馬鹿だな、パホーモヴナ、俺達んとこぢや口笛を吹かうが吹くまいが、元々ない金が無くなりつこはないぢやないか。」

「だけどね、とにかくあの人を發たしちまひなさいよ。シードルィチ。なんだつてあんな人を引留めときたいのさ? さつさと馬をつけてやつて、どこへなりとおつ放しちまひなさいよ。」

「なあにあの男は待つてるさ、パホーモヴナ。厩にや三頭番ひが三揃ひしかない、もう一番ひは休ませたるんだ。今に見てろ、いいお客が舞ひ込むから。俺はあんなフランスつぽのお蔭で、

この頸根つこを折られるなんざ眞平だよ。そうれ見ろ、俺のいふ通りだ、向ふから飛ばして來るぢやないか!! えッへッへ、どうだいあの速いことは！ てつきり將軍樣と睨んだぞ。」

馬車は入口に横づけになつた。從僕が馭者臺からとび下りて扉をあけると、やがて軍人マントに白い軍帽をかぶつた青年が、驛長の家へはいつて來た。そのあとから從僕が手文庫を運んで來て、窓の上にそれを置いた。

「馬だ！」と士官が權柄づくな聲で言つた。

「只今すぐ！」と驛長は答へて、「驛馬券をどうぞ。」

「驛馬券は持つとらん。俺は傍道へ折れるんだ。……一たいお前はこの俺が分からんのか？」

驛長はそはそはしだして、馭者を急かしに飛んで行つた。青年は部屋の中を行きつ戻りつしはじめたが、やがて仕切りの蔭へはいると驛長の細君にそつと訊ねた。

「あの旅の男は誰かね？」

「さつぱり存じませんですよ」と細君は答へた、「どつかのフランス人ですわ。もうこれで五時間も、ああして口笛を吹いちや馬を待つてをりますですよ。もう厭きあきしましたわ、あの毛唐にや。」

すると青年はフランス語でその旅行者に話しかけた。

「失敬ですが、どちらへ行かれますか？」と彼は訊ねた。

「ついそこの町へ行きます」とフランス人は答へた、「その町から今度はある地主の屋敷へ行くのです。その人がまだ一面識もない僕を家庭教師に傭つてくれたもんでね。僕は今日のうちにその屋敷に着けることと思つてたんですが、どうやら驛長先生の考へは違ふらしいんでね。どうもこの國ぢやなかなか馬が手に入らんですな、士官さん。」

「でその君が契約をされたここの地主といふのは、一體誰ですか？」と士官が訊ねた。

「トロエクーロフです」とフランス人は答へた。

「トロエクーロフですと？ そのトロエクーロフといふのはどういふ人です？」

「實をいふと、貴方、あんまり芳ばしいことは聞いてないんです。人の噂ぢや、何でも傲慢不遜な貴族で、召使達の扱ひぶりは苛酷だし、誰一人その人の家には長く居ついた例しがない、その名を聞いて顫へあがらぬ者はないし、また家庭教師を見ること奴僕も同然だとかで、今まで二人も鞭で打たれて死んださうです。」

「そいつは大變だ！ で君はその怪物の屋敷へ住み込まうつていふんですか？」

「だつて仕方がないぢやありませんか、士官さん。その人はとてもいい報酬を呉れるんですよ。年に三千ルーブリで、一切の掛かりは向ふ持ちなんですからね。これでも僕は運のいい方で

せうよ。僕には年をとつた母親があります。給料の半分は母の生活費に送つてやり、あとの殘りから五年のうちには、將來の獨立を保證するに足る小さな資本を蓄めるつもりです。さうなつたら、左樣ならをして、パリへ行つて、何か商賣に手を出して見るつもりなんです。」

「誰かトロエクーロフの屋敷の者で、君を知つてゐる者がありますか？」と士官は訊ねた。

「誰もゐませんよ」と教師は答へた、「あの人はモスクヴァにゐる知人を介して私を招聘したのです。その知人の邸にちやうど同國人が料理番をしてましてね、その男が紹介して呉れたんですよ。お斷わりしときますが、僕は何も教師になるつもりはなく、菓子屋になるつもりだつたんですよ。だがお國ぢや教師をやるのが一ばん割がいいつて友達が勸めるもんでね……」

士官はじつと考へてゐたが、やがて「ねぇ君」と相手を遮つた、「假りにですね、そんな氣長な話の代りに、今すぐこの場から君が巴里へ歸つてしまふといふ條件づきで、誰か君に現金で一萬ルーブリ出すといつたら、君はどうしますか？」

フランス人は呆れたやうに士官を見たが、やがて微笑すると首を横に振つた。

「馬が出來ました！」とはいつて來た驛長がいつた。從僕も同じことを繰り返した。

「今すぐ行く」と士官は答へた、「ちよつと外へ出てゐてくれ。」

そこで驛長と從僕が出て行くと、彼はフランス語で先をつづけた。

「僕は冗談を云つてゐるんぢやありません。一萬ルーブリは即座にお渡しできるのです。そして僕の欲しいのは、君の歸國と君の書類だけです。」さう言ひながら彼は手文庫をあけて、幾束かの紙幣をとり出した。フランス人は眼を圓くした。さつぱり譯が分からなくなつたのである。

「僕の歸國……僕の書類」と彼は呆れて繰り返した、「書類はこれですが……あんたは擔ぐんでせう？　何だつて僕の書類なんかが要るんです？」

「それは君の知つたことぢやない。聞きたいのは、否か應かですよ。」

フランス人はまだ自分の耳が信じられずに、書類を若い士官に差し出した。士官は素早くそれに眼を通した。

「これは君の旅券と……宜しい。これは紹介狀……ふむ、これもよし。出生證明書と……結構だな。ぢやこれがお約束の金です。すぐ引き返して下さい。さようなら。」

フランス人は釘づけにされたやうに立つてゐた。と士官が戻つて來て、「一ばん大事なことを忘れる所でした。このことは一切ここだけの話にすると固く約束して下さい……固く約束を。」

「固く約束します」とフランス人は答へた、「ですが僕の書類は？　それがないと僕はどうすればいいんです？」

「最初に着いた町で、ドゥブローフスキイに强奪されたと申し立てるんです。向ふは信用し

て、必要な證明書を吳れます。ぢや左樣なら。君が一刻も早くパリに着いて、お母さんの無事な顏が見られるやうに祈つてゐますよ。」

ドゥブロースキイは部屋を出ると、馬車に跳び乘つて走り去つた。

窓からそれを眺めてゐた驛長は、やがて馬車の影が遠のくと、細君に向かつて頓狂な聲をあげた。

「パホーモヴナ！　お前知つてゐるかい？　ありやドゥブローフスキイだつたんだぜ。」

細君はあわてて窓へ駈け寄つたが、なむさん後の祭りだつた。ドゥブローフスキイはもう遙かに遠ざかつてゐた。そこで彼女は亭主を罵りはじめた。

「お前さん神樣が怖くはないんだね、シードルィチ、なぜもつと早くあたしに言つて吳れなかつたんだよ。一目なりとドゥブローフスキイの顏を拜むんだつたのに！　今になつちや、またいつ來るものやら分かりやしないぢやないか。お前さん何ほ何でもあんまりだよ、あんまり手前勝手といふものだよ！」

フランス人は化石したやうにつつ立つてゐた。士官との契約、大枚の金――何もかもが夢のやうだつた。しかし札束はちやんとかくしに納まつてゐて、この驚くべき事件が現實に起こつたことを雄辯に證據だててゐるのである。

たうとう彼は町まで馬を傭ふことに決心した。馭者は並足で馬を歩かせて、町に着いたのはもう夜中だつた。

關門には番人の姿は見えず、崩れかけた番小屋が立つてゐるだけだつたが、そこまで乘りつけぬうちにフランス人は停めろと命じて、馬車を降りた。そして馭者に向かつて手眞似で、馬車もトランクも酒手にやると說明してから、てくてくと歩きだした。馭者はこの客の氣前のよさ加減に、さつきフランス人がドゥブローフスキイの申出でに驚いたくらゐ吃驚りしてしまつた。しかし毛唐め氣が違つたのだらうと獨り合點した馭者は、馬鹿丁寧なお辭儀で感謝を表すると、町へはいつた所で始まらないと考へて、仲間の經營してゐる馴染の居酒屋をめざして行つた。その家で彼は一晩飲み明かして、翌る朝にはむくんだ顏と眞赤な眼をして、例の馬車もトランクも失くなして、空つぽのトロイカに乘つて家路についた。

さてドゥブローフスキイは、フランス人の書類を手に入れるや、大膽至極にもトロエクーロフの家に現はれて、まんまと住み込むことになつたのは、既に私達の見た通りである。その下心はたとへどんなものだつたにせよ（それは後で分かつて來るが）、彼の行狀には一點の非難すべき點もなかつた。なるほど彼は幼ないサーシャの教育にはあまり力を入れず、腕白の仕放題にさせて置き、ほんの形式にやつてゐるに過ぎぬ課業の方も喧ましいことは言はなかつたが、その代り

17633

女生徒の音樂修業の方には大變な力瘤の入れ方で、何時間もぶつ通しに彼女と一緒にピアノに向かつてゐることも珍らしくはなかつた。家内ぢゆうの者は皆この若い教師を愛した。キリーラ・ペトローヴィチは狩獵の際に見せる彼の果斷な敏捷さを愛したし、マリヤ・キリーロヴナは彼の示す際限のない熱誠と獻身的な心遣ひを、サーシャは自分の腕白に對する彼の寛大を、また僕婢は一見身分不相應とも見える彼の氣前のよさと親切さを、それぞれ愛したわけである。一方彼自身も、この一家の者に愛着を感じて、既に自分もその一員のつもりになつてゐるらしかつた。

彼が家庭教師に就職した日から數へて、例の記念すべき祝宴の夜までは、約一と月の時が流れてゐたが、この控へ目な若いフランス人の正體が、近隣の地主連がその名を聞いても慄へあがる怖ろしい强盜であらうとは、誰一人思つて見たこともなかつた。そのあひだドゥブローフスキイは、一歩もボクローフスコエ村を離れなかつたけれど、掠奪の噂は村人達の創意ある想像力のお蔭で、依然として絶えなかつたし、また彼の一味の者が、首領の不在中でもその行動を續けたといふことも、確かにあり得ることである。

その夜ドゥブローフスキイは、自分の私敵ともまた自分の不幸を惹き起こした張本人の一人とも、見れば見られる男と同じ部屋に寢ながら、遂に誘惑に打ち克つことができず、革囊のあることを知つてゐた彼は、それを奪はうと決心したのである。教師から强盜への早變りを見せられ

て、可哀さうなアントン・パフヌーチイチがどんなに仰天したかは、私達のすでに見たところである。

十二

翌る朝の九時になると、ボクローフスコエに泊り込んだ客は、次第に客間に集まつて來た。客間にはもうサモヴァルが沸り、その前には朝着姿のマリヤ・キリーロヴナが坐つてゐた。キリーラ・ペトローヴィチはと見れば粗羅紗のフロックにスリッパをつつかけて、洗指盤（フィンガー・ボール）みたいな恰好の大茶碗で盛んに茶を飲んでゐた。一ばん仕舞ひにアントン・パフヌーチイチが姿を現はしたが、眞蒼な顏をしてひどく落ち着かぬ樣子なので、一同はその姿を見ると喫驚りした。キリーラ・ペトローヴィチは身體の工合を尋ねた程であつた。スピーツィンは何やら有耶無耶な返事をして、怖ろしさうに教師の方をちらと見た。教師はどこを風が吹くといつた顏で、やはりその場に坐つてゐたのである。二三分すると從僕がはいつて來て、馬車の用意のととのつた旨をスピーツィンに告げた。アントン・パフヌーチイチは急いで別かれの挨拶をすると、あたふたと部屋を出て行つたが、つづいて馬車は門を走り出た。客も主人も狐につままれたやうな態たらくだつた

が、やがてキリーラ・ペトローヴィチは、彼が食過ぎをやつたことに決めてしまつた。お茶と別かれの朝餐が濟むと、殘る客達も家路につきはじめ、間もなくボクローフスコエは空つぽになつて、ふだんの姿に返つてしまつた。

それから數日は流れたが、別に注目すべき事件も起こらなかつた。ボクローフスコエの住み手の生活の單調であつた。キリーラ・ペトローヴィチは毎日獵へ出掛けるし、マリヤ・キリーロヴナは讀書と散歩と音樂の稽古に忙がしかつた。なかでも音樂の稽古は一ばん熱心で、そろそろ彼女は自分の氣持の何かを覺りはじめ、若いフランス人の美點に無關心ではをられぬわれと吾が心をそれと知つて、我にもなく何か口惜しい氣がするのであつた。一方教師はといへば、主人の娘に對する敬意と嚴しい禮儀の埒を一歩も踰えず、それで彼女の氣位の高さと臆病な疑惑とを鎭めてゐた。彼女は教師とともに過ごす日々の魅力に、次第次第に吾を忘れて溺れ込んで行くのだつた。デフォルジュがゐないと彼女は淋しかつた。彼と同席すると、彼女はのべつに彼を相手にして、何から何まで彼の意見を聽きたがり、その一々に同感するのだつた。ひよつとしたら彼女はまだ戀に落ちてはゐないのかも知れないが、しかし少くも、何か偶然の障礙か思ひがけない運命の迫害が起こりでもしたら、彼女の胸の炎は一時に燃えたつに相違ない。

ある日のこと、教師の待つてゐる筈の廣間へはいつたとき、マリヤ・キリーロヴナは彼の蒼ざ

めた顏に只ならぬ困惑の色を認めて、小さな胸を騷がせた。彼女がピアノの蓋をあけて、幾齣かを歌ひ進んだとき、ドゥブローフスキイは頭痛がするといひ出して赦しを乞ひ、稽古をうち切つた。そして譜本を閉ぢる折を見はからつて、そつと彼女の掌に手紙を滑り込ませた。マリヤ・キリーロヴナは考へるひまもなく受取つてしまつたものの、すぐ自分の輕はづみを後悔した。がその時はもう、廣間にドゥブローフスキイの影はなかつた。マリヤ・キリーロヴナは居間に引きとると、手紙をひろげて次の文言を讀んだ。

『今夜七時に小川の畔の四阿(あづまや)までおいで下さい。ぜひともお話したいことがあります。』

彼女はひどく好奇心をそそられた。彼女はもう長いこと、且つは望み且つは怖れながら、男の告白を待つてゐたのだ。今まで朧ろげに心に察してゐたことを、はつきりとこの耳で聽くのは、いかにも愉しいことには違ひない。けれどもまた彼女は、その身分に引き比べて、彼女の結婚の承諾を得ることなど到底望めない男の口から、そのやうな告白を聽くのが、何かそぐはぬやうな氣がするのだつた。結局逢ひに行くことに決めはしたけれど、ただ一つ思ひ迷つたのは、教師の告白にどういふ態度で接しようかといふことだつた。貴族の娘としての忿怒を見せたものか、友情的な忠告を與へたものか、陽氣な冗談に紛らしてしまふか、それとも無言の同感を表したものか。あれやこれやと思ひ惑ひながらも、彼女はのべつに時計を覗いてゐた。やがて夕闇どきにな

つて、蠟燭がともされた。キリーラ・ペトローヴィチは訪れて來た近所の人達と骨牌(ボストン)の卓を圍んでゐる。置時計が六時四十五分を報ずると、マリヤ・キリーロヴナはこつそりと玄關へ拔けて、よくあたりを見廻してから、一散に庭へ走り出た。

暗い夜で、空は雨雲にとざされ、二歩ほど隔てたものは何一つ見えなかつた。がその暗がりを、マリヤ・キリーロヴナは通ひ馴れた小徑を辿つて、ほどなく四阿のほとりに出た。そこで彼女は歩をとめて、暫らく息をついて、デフォルジュの前に冷靜な悠揚迫らぬ態度で出ようと思ふひまもなく、もうデフォルジュは眼の前に立つてゐた。

「有難うございました」と彼は悲しげな低い聲で彼女に言つた、「よく私の願ひを叶へて下さいました。もしお聽き屆けがなかつたなら、私は恐らく絶望の淵に沈んだことでせう。」

マリヤ・キリーロヴナは用意の文句でそれに答へた。

「お望みを叶へて差し上げたことを、わたくしに後悔させないやうにお願ひいたしますわ。」

彼は無言のまま、どうやら氣持を鎭めようとしてゐるらしかつた。

「實は餘儀ない事情のため……お別かれしなければならなくなりました」と、やがて彼は口を切つた、「いづれそのうちお耳にはいる筈と思ひますが……お別かれに臨んでぜひとも聽いて置いて頂きたいことがあるのです。」

マリヤ・キリーロヴナは何とも答へなかつた。男のいまの言葉を、彼女はやがて來るべき優しい告白の前置きと見たのである。

「私は、あなたが考へてをられるやうな男ではないのです、」と彼は、うなだれながら言葉をついだ、「私はフランス人デフォルジュではありません——私はドゥブローフスキイなのです。」

マリヤ・キリーロヴナは思はず聲を立てた。

「お願ひです、怖がらないで下さい。あなたは何も私の名を怖がることは要らないのです。いかにも私は、あなたのお父様に、最後のパンの一かけらまで奪はれて、先祖代々の家を追ひ出され、大道で追剝の眞似をするやうになつた不運な男に違ひありません。しかしあなたは、御自分のことでもお父様のことでも、私を怖がることはないのです。もうすつかり濟んでしまひました……私はお父様を赦して差し上げたのです。あなたがお父様を救はれたのです。私の首途の血祭りには、あなたのお父様になつて頂く筈でした。私はお屋敷のまはりをうろつき廻つて、どこへ火を掛けようか、どこからお父様の寢室へはいらうか、どうしたら逃げ道を殘らず遮ることが出來ようかと、當てをつけて見ました。ちやうどその時あなたが、まるで天上の幻のやうに通りかかられたので、私の心は和いでしまつたのです。あなたの住んでをられる家は聖所だ、あなたと血の絆に結ばれた人には唯の一人にも私の呪ひをかけてはならぬ、さう私は悟つたのです。さう

思ふと、復讐などといふことは狂氣の沙汰に見えはじめ、私はきつぱりと思ひ切つてしまつたのです。私は來る日も來る日もボクローフスコエの庭の畔りをさまよつて、遠目にあなたの眞白なお着物を眺めたいと願ふのでした。あなたが不用心な獨り歩きをなさる時には、私は茂みから茂みへ忍びながらこつそり後をつけて、私が蔭ながらお守りしてゐる限りはあなたの身には何の心配もないことを、せめても幸福に思つたものでした。やがてふとした機會に惠まれて……私はお宅に住み込むことになりました。この三週間は私にとつて幸福の日々でした。その思ひ出は、この先々私の哀しい生涯の慰めになることでせう。……今日私は、この上ここにとどまる譯には參らぬ報らせを受けました。今日かぎり、いや今すぐに、あなたとお別かれするのです。……がこれから先あなたの呪ひを着たり、お蔑みを受けたりするのは堪へがたい思ひがするので、お別かれする前にかうして打明けさせて頂いたのです。一時折りはドゥブローフスキイのことを思ひ出して下さい。そしてこれだけは忘れずにゐて下さい、私といふ男は別の約束を持つて生まれて來たことを、魂の底からあなたを愛し得た男だといふことを、そして決して……」

そのとき烈しい口笛が聞こえて、ドゥブローフスキイははたと口を噤んだ。彼は女の手をとつて、燃えるやうな唇を押し當てた。また口笛が聞こえた。

「さよなら」とドゥブローフスキイは言つた、「呼んでゐます。一刻の猶豫も、私の身の破滅

になるのです。」

彼は離れて行つた。マリヤ・キリーロヴナはじつと立ちすくんでゐた。ドゥブローフスキイは戻つて來て、ふたたび彼女の手をとつた。

「萬一そのうちに」と彼は優しい痛々しい聲で言つた、「萬一そのうちに何かあなたの身に不幸が起きて、誰一人あなたを助け庇ふ人のないやうな時には、あなたは私を頼りにして下さいますか。その時にはあなたを救ひ出す一切のことを、この私にお求めになると約束して下さいますか？　私の獻身をこばむまいと約束して下さいますか？」

マリヤ・キリーロヴナは聲をひそめて泣いてゐた。三度目の口笛が響いた。

「あなたは私を破滅させるのですね！」とドゥブローフスキイは叫んだ、「お返事がないうちは私はお別かれできません。約束して下さるのですか、それともお厭ですか？」

「お約束いたします！」と泣き濡れた少女は囁いた。

この逢曳のため思ひ亂れたマリヤ・キリーロヴナは、庭から家へ歸つて行つた。近づくにつれて庭先には大ぜいの人影が見え、車寄せには一臺のトロイカがついてゐて、下僕は走り廻り、家の中はごつた返してゐるのが見てとられた。彼女は遠くからキリーラ・ペトローヴィチの聲を聞きつけ、自分のゐないことが分かつては大變だと、大急ぎで家へ駈け込んだ。ちようど廣間で彼

女は父親に出會つた。客は例の署長を取り卷いて、何やら質問攻めにしてゐる。旅行服裝で、頭の頂邊から足の先まで武裝を固めた署長は、何か物々しけな、氣が氣でないやうな顏で、客の問ひに答へてゐる。

「お前どこにゐたのだね、マーシャ？」とキリーラ・ペトローヴィチが訊ねた、「ムッシュ・デフォルジュを見掛けはせんかつたか？」

マーシャはやつとの事で、見掛けなかつたと答へた。

「大變なことになつたのさ」とキリーラ・ペトローヴィチが言葉をつづけた、「署長さんが奴さんを逮捕に乘り込んで來てな、あれこそドゥブローフスキイに違ひないとわしに斷言する始末だ。」

「人相書に寸分相違ございません、閣下」と、署長は恭ゝしく言つた。

「やれやれ、署長さん」とキリーラ・ペトローヴィチは遮つた、「まあその人相書を抱へて、どこへなりと退散して貰はうぢやないか。わしは自分で詮議して見ん限りは、斷じてあのフランス人を引渡すことはならん。あの臆病者で嘘つきのアントン・パフヌーチイチの言ふことなんか、てんから本當に出來るもんぢやないよ。あの男は敎師に財布を奪られる夢を見たんだよ。でなくてあの朝この俺に一言も言はん筈がないぢやないか……」

「フランス人が威しつけたのであります、閣下」と署長は答へた、「そして他言はしないと誓はせたのであります。」

「でたらめさ」とキリーラ・ペトローヴィチは決めつけて、「今わしが何もかも明るみに出して見せる。敎師はどこにゐる？」と丁度はいつて來た從僕に訊いた。

「どこにもをりませんです」と從僕は答へた。

「ぢや搜し出すんだ！」と、漸く疑念を抱きはじめたトロエクーロフは呶鳴つて、「君のその自慢の人相書を見せたまへ」と署長に言つた。

署長は早速その紙片を手渡した。

「ふむ、ふむ！　二十三歳しかじかか。それはその通りだ。だがこれだけぢや何の證據にもなりはせん。敎師はどうした？」

「見つかりませんです」と同じ返事だつた。

キリーラ・ペトローヴィチは不安になつて來た。マリヤ・キリーロヴナは生きた色もなかつた。

「お前、眞蒼ぢやないか、マーシャ」と父親は注意を與へた、「さぞびつくりしたらうな？」

「いいえ、パパ」とマーシャは答へた、「あたし頭痛がしますの。」

「ぢや居間へ行つておいで、マーシャ。そして心配するぢやないよ。」

マーシャは父親の手に接吻して、急ぎ足で居間へ引きとつた。そしていきなり寢臺に身を投げると、異樣な興奮の發作に襲はれて咽び泣きはじめた。小間使たちが駈けつけて、無理やりに着物を脱がせ、冷水や色々の酒精を使つて、やつとのことで彼女を落ち着かせた。やがて寢床に入れられた彼女は、すやすやと睡りに落ちた。

一方フランス人は見つからなかつた。キリーラ・ペトローヴィチは廣間を行きつ戻りつしながら、威すやうな調子で『ひびけ、勝利の閧のこゑ』の口笛を吹いてゐる。客はひそひそ聲で囁き交はし、署長はまんまと一杯喰つたやうなほかんとした顏をしてゐる。やはりフランス人は見つからない。恐らく前以て報らせを受けて姿を匿したものであらう。だが何者がどんな手段で報らせたのか？　それは解けぬ謎として殘つた。十一時になつたが、誰も寢ようと思ふものはなかつた。やがての果てにキリーラ・ペトローヴィチは烈しい語氣で署長に言つた。

「どうしたね？　まさかここで夜明かしをするつもりぢやなからうね。わしの家は居酒屋ぢやないんだ。とても君のその敏捷さぢや、假りにあれがドゥブローフスキイだつたにしたつて、奴は捕まりつこはないよ。さあもう家へ歸りたまへ、そして今後はもう少ししやんしやんやるんだね。それからあんた方も歸られる時刻ですよ」と彼は客を顧みて言葉をついだ、「馬車の用意を

言ひつけなさい。わしはもう睡くなつた。」

さうした不愛想な言葉でトロエクーロフは客と別かれたのである。

十三

それから半年あまりは、何一つ目につくこともなく過ぎた。ところが翌る年のはじめになると、キリーラ・ペトローヴィチの家庭生活に少なからぬ變化が生じた。

彼の村から三十露里ほどのところに、ヴェレイスキイ公爵の豐かな領地があつた。公爵は久しく外國へ行つたまま歸らず、その領地は退職陸軍少佐が管理してゐたので、ポクローフスコエとアルバートヴォの間には何の交渉もなかつた。その年の五月の末、公爵は歸朝すると、生まれてこの方まだ見たことのない持村へやつて來た。永年の派手な生活に慣れた彼には、孤獨な田舍暮らしが耐へきれず、到着して三日目には、その昔知り合ひだつたトロエクーロフの屋敷へ食事に出向いたのである。

公爵はまだ五十前後であつたが、遙かに老けて見えた。放恣の限りを盡くした生活は、彼の健康を衰へさせて、その身に消しがたい烙印を押したのである。彼は絶えず逸樂を追ひ求めて、絶

えず無聊をかこつてゐた。とはいへ彼は、氣持のよい水際だつた男振りで、そのうへ常々社交界に身を置き馴れたお蔭で一種の愛嬌があり、とりわけ婦人に對する場合にそれが目立つた。

キリーラ・ペトローヴィチは彼の訪問を受けて頗る滿悅した。この訪問を、上流社會に明るい人間が自分に拂ふ敬意のあらはれと思つたからである。彼は例によつて、何よりの御馳走として自分の施設を客に見物させようと、まづ犬小舍へ案内するのだつた。ところが公爵は犬の臭氣に窒息せんばかりになつて、香水を振りかけたハンカチで鼻をつまみながら、急いで飛び出してしまつた。きれいに刈り揃へた菩提樹や、四角形の池や、規則正しい並木道のある古風な庭園も、やはり公爵の氣に入らなかつた。彼は英國風の庭園や、いはゆる自然趣味の愛好者だつたのだが、やむをえず褒めそやし、且つ感嘆の聲を惜しまなかつた。そこへ從僕が現はれて、食事の用意のととのつた旨を告げた。二人は食堂へとつて返した。公爵は長い散歩に疲れ果てて、びつこを引きながら、早くもこの訪問を後悔してゐた。

ところが廣間で二人を迎へたのは、ほかならぬマリヤ・キリーロヴナだつたので、この浮氣な老人は忽ち彼女の美しさに打たれてしまつた。トロエクーロフは彼女の隣席に客をつかせた。公爵は令嬢の出現のためすつかり活氣づき、頗る愉快さうになつて、その興味ある座談で幾度となく彼女の注意を惹くことができた。食事が濟むとキリーラ・ペトローヴィチは乘馬の散歩を勸め

たけれど、公爵は穿いてゐる天鵞絨の長靴を指さし、足痛風ですからなどと冗談に紛らして辭退して、可愛らしい隣席の婦人と別かれずにゐるため、馬車の散歩を申し出た。馬車の用意ができると、老人連と美少女は三人でそれに乘つて、散歩に出て行つた。途々話は盡きなかつた。マリヤ・キリーロヴナはこの社交人のお愛想や陽氣なお世辭に、快く耳をくすぐらせてゐた。と不意にヴェレイスキイはキリーラ・ペトローヴィチを顧みて、あの燒跡はどうしたのか、やはり貴方のものなのかと訊ねた。キリーラ・ペトローヴィチは苦がい顏をした。この燒け失せた屋敷が呼び起こす思ひ出は、彼には不愉快なものだつたのである。彼は、地所は現在自分のものだが、もとはドゥブローフスキイの領地だつたと答へた。

「ドゥブローフスキイですと？」とヴェレイスキイは鸚鵡返しに、「なぜまた、あの有名な強盜の領地だつたのですか？」

「いやあれの父親のものだつたのです」とトロエクーロフは答へた、「だが父親の方も立派な強盜だつたのですよ。」

「でそのリナルド[5]はどうしてゐるのです？　捕まりましたか、まだ生きてゐるのですか？」

「生きてぴんぴんしてゐますよ。まあ泥棒と結托した惡黨署長どもがのさばつてゐる間は、とても捕まりつこはありますまいよ。ときに公爵！　ドゥブローフスキイといへば、あなたの村に

も現はれたぢやありませんか？」

「左様、去年のことでしたな。たしか納屋か何かを燒くか、掠奪するかした筈です。ですがマリヤ・キリーロヴナ、この傳奇的（ロマネスク）な人物と親交を結んでみるのも面白いぢやありませんか。」

「面白いどころですか！」とトロエクーロフが言つた、「この子は奴とは知り合ひですよ。あの男は三週間もこの子に音樂を教へて呉れましてな、しかも有難いことに一切月謝をとらなかつたのです。」

そしてキリーラ・ペトローヴィチは佛フランス人教師の物語をはじめた。マリヤ・キリーロヴナは針の山に坐つてゐる思ひだつた。ヴェレイスキイは耳を凝らしてその話を聽き終つて、何から何までいかにも腑に落ちぬ氣持がしたが、それなり話頭を轉じてしまつた。散歩から戻ると、彼は自分の馬車を曳き出すやうに命じ、泊つて行くやうにとのキリーラ・ペトローヴィチの懇請をことわつて、お茶が濟むとそこそこに辭し去つた。しかし歸りしなに、御令嬢とお二人伴れでぜひとも遊びに來て頂きたいと、キリーラ・ペトローヴィチに言ひ殘した。そして傲慢なトロエクーロフがそれを約束したのは、公爵といふ地位や、二つの勳章や、三千人の農奴のゐる先祖代代の領地やを考慮に入れて、ある程度までヴェレイスキイ公爵の身分を己れと同等と認めたからである。

十四

この訪問ののち二日すると、キリーラ・ペトローヴィチは娘を伴つて、ヴェレイスキイ公爵の邸へお客に行つた。アルベートヴォに近づくにつれて、彼は小ぎれいな、いかにも愉しげな農民小屋や、また英國の古城に模して建てられた石造りの地主屋敷に、感嘆の眼を瞠らずにはをられなかつた。屋敷の前面には、濃綠の草地が楕圓をなしてひろがり、瑞西產の牝牛の群が、頸の鈴を鳴らしながら草を食んでゐる。ひろびろした庭園が四方から屋敷をかこんでゐる。主人は車寄せまで客を出迎へて、美しい令嬢に腕を借した。彼女が莊麗な廣間へはいつて見ると、そこにはもう三人前の食事の支度ができてゐた。やがて公爵に導かれて窓際に立つた二人の眼前には、うつとりするやうな眺めがひらけた。ヴォルガは窓のすぐ前を悠々と流れ、川面には荷を積んだ小舟が風に帆を孕ませて行きかひ、亡魂舟といふ印象的な名をもつ漁舟が、見えがくれしてゐる。河向ふには丘陵や耕地が連なり、幾つかの村落の姿が一帶の風景に生氣を添へてゐる。

やがて、彼等は畫廊の見物に導かれた。いづれも公爵が外國で買ひ集めたもので、彼はマリヤ・キリーロヴナにそれぞれの主題を說明し、畫家の傳記を物語り、またそれらの畫の長所や短

所を指摘するのだつた。畫についての彼の話は、衒學的な鑑識家流の術語を振りまはすのではなく、感動と豐かな想像力から出た言葉であつた。マリヤ・キリーロヴナは彼の說明を嬉しく聽いた。

三人は食卓を圍んだ。トロエクーロフはこの館のアンフィトリオン[6]の貯へる酒と、その料理人の腕前とに、心から感嘆の聲を惜しまず、またマリヤ・キリーロヴナは、生まれてからこれで二度目の近づきにしか過ぎぬ男と言葉を交はしながら、少しの氣まづさも窮屈さも感じなかつた。食事がすむと、主人は庭を御案內しませうと申し出た。點々と小島を散らした廣い湖の岸にある四阿で、三人が珈琲をとつてゐると、遽かに吹奏樂の響きが湧いて、六本櫂のボートが四阿のすぐ下に着いた。彼等は小島のあひだを縫ひながら、湖のおもてをめぐり、幾つかの小島に上がつてみた。第一の島には大理石の彫像が立ち、次の島には物淋しい洞窟があり、第三の島には神祕な銘を彫りつけた碑があつて、マリヤ・キリーロヴナの胸に少女らしい好奇心を喚びさますのだつたが、殘念なことには公爵の慇懃な故意の言ひ殘しのお蔭で、その好奇心はつひに充分の滿足が得られなかつた。

知らぬ間に時が移つて、あたりは薄暗くなつて來た。公爵は冷え冷えして、露がおりはじめたといつて、二人をせきたてて屋敷へ歸つた。サモヴァルの用意ができてゐて、公爵はマリヤ・キ

リーロヴナに、何分獨身者の家のことゆゑ一つ主婦役をお願ひしますと言ふのだつた。彼女はこの愛想のいい話し手の盡きることのない座談に聽き入りながら、茶を注ぐ役目を引受けた。と突然轟然たる響きが聞こえて、火箭が空を照らした。……公爵はマリヤ・キリーロヴナにショールを與へて、父娘をバルコンへ誘つた。庭前の闇のなかには、色とりどりの火が燃え立ち、くるめき、穗のやうにするすると伸びるかと思へば、噴泉をなして注ぎ、雨と降りかかり、星と碎け散つて、消えてはまた燃え立つた。マリヤ・キリーロヴナは子供のやうにはしやいだ。ヴェレイスキイ公爵は彼女の狂喜する有樣に滿足を感じた。一方またトロエクーロフも、公爵のもてなしに頗る滿悅してゐた。つまり彼は、かうした公爵の一切の散財を、自分に對する敬意のあらはれ、また自分の機嫌をとり結ばうとする願望のあらはれと見たのである。

つづいて出た夜食も、夕食に劣らず贅を盡くしたものであつた。客はそれぞれ當てがはれた部屋に引きとり、やがて翌る朝になると、互ひに近い再會を約しながら、この親切な主人に別かれを告げた。

十五

マリヤ・キリーロヴナは自分の居間の、開けはなした窓際に坐つて、刺繍臺に針を運ばせてゐた。戀の思ひにうはの空になつて、薔薇の花を綠の絲で縫ひとつたといふコンラドの愛人とは違ひ、彼女は絹絲をもつらせもしなかつた。彼女の運ぶ針の下からは、下繪と寸分違はぬ模樣が麻布の上に現はれて行く。がしかし、彼女の思ひは手仕事の上にはなくて、遙か遠方を馳せてゐた。

と不意に、一本の手がそつと窓からさし入れられて、何者かが刺繍臺のうへに手紙を載せたかと思ふと、マリヤ・キリーロヴナが氣づかぬさきに姿を消してしまつた。ちやうどそのとき、小間使がはいつて來て、お父樣がお召しですと彼女に告げた。彼女は胸をとどろかせながら手紙を頸飾布(キヅカヂリ)のなかへ匿し、父親の書齋へ急いだ。

キリーラ・ペトローヴィチは一人ではなく、ヴェレイスキイ公爵と對坐してゐた。マリヤ・キリーロヴナの姿を見ると、公爵は席を立つて、いつになく混亂の態で無言のまま挨拶をした。

「ここへおいで、マーシャ」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「ちよつとお前に聽かせたいことがあるんだがな、お前が喜んで呉れるといいと思ふが、ここにをられるのがお前の花婿

さんだ。公爵はお前を貰ひたいと仰しやるのだ。」

マーシャは立ち竦んでしまつた。その顏は死のやうに蒼ざめ、彼女は口を開かなかつた。公爵は彼女に近づくとその手をとつて、感動の面持ちで、私を幸福にして下さることに御同意ですか、と訊ねた。マーシャは無言のままだつた。

「同意ですよ、もちろん同意ですとも」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「ただね、公爵、娘といふものはそれがなかなか口に出せないまでですよ。さあ二人とも接吻をなさい。そして幸福になりなさい。」

マーシャは身じろぎもせずに立つてゐた。老公爵がその手に接吻すると、にはかに涙が彼女の蒼ざめた頰をつたはつた。公爵はかすかに眉をひそめた。

「お行き、お行き、向ふへお行き!」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「その涙を乾かして、機嫌を直してまたここへお出で。いや娘といふものは、緣談がきまる時にやみんな泣くものですよ。」と、ヴェレイスキイに向つて言葉を續けて、「つまり、さうした極まりなんでしてな。では公爵、次は事務上のお話をしようぢやありませんか。他でもない持參金のことですが。」

一方マリヤ・キリーロヴナは、その場をはづす許しの出たのを、願つてもない幸ひと受け入れた。そして居間へ駈け込んで錠をおろすと、老公爵の妻になつた自分の姿を思ひ描いて、さめざ

めと泣き崩れた。急にこの公爵が、厭はしい憎らしい人間に見えて來たのである。……結婚といふものが、斷頭臺か墓穴のやうに、彼女を怯えあがらせたのである。……

「厭だわ、厭だわ！」と彼女は身も世もあらず繰り返した、「死んだ方がましだわ、尼寺へ行つた方がましだわ、ドゥブローフスキイのところへ嫁つた方がましだわ……」

そこでふと手紙のことを思ひ出して、飛びつくやうに披いて讀んだ。彼から來たやうな豫感がしたのである。案の定それは彼の筆蹟で、わづか次の數語が綴つてあつた。『今夜十時、例の場所で。』

月影は明るく、村の夜は靜まつてゐた。時をりそよ風がたつて、ひそやかな樹の葉のさやぎが庭をわたつた。

輕やかな物影のやうに、美しい少女の姿は約束の場所へ近づいた。まだ人影はない。と不意に四阿のかげからドゥブローフスキイが現はれて、彼女の前に立つた。

「僕はすつかり知つてゐます」と、彼は悲しげな聲で囁くやうに言つた、「あの時の約束を思ひ出して下さい。」

「わたくしを庇つてやらうと仰しやるの？」とマーシャは言つた、「お怒りにならないで頂戴。でもわたくし、あなたに庇つて頂くのが怖いのです。どんな風にしてわたくしを助けてやらうと

仰しやいますの？」

「あなたを厭な男の手から救つて上げられるはずです。」

「後生ですから、あの人には觸らないで。もし私を愛して下さるなら、あの人に觸らうとはなさらないで。わたくしのことが因で何か怖ろしいことが起こると困りますもの……」

「ぢやあの男には手を觸れますまい、あなたの氣持は僕にとつて神聖なんですから。あなたのお蔭で奴も命拾ひをした譯です。あなたのために惡いことをするなどは、僕は決してしないつもりです。たとへ僕が罪を犯したにしても、あなたには清淨潔白でゐて頂かなければなりません。けれどどうしたら、あなたをあの殘酷なお父さんの手から救ひ出せるでせう？」

「まだ望みはありますわ。私が泣いて、絶望の涙に暮れるのを見たら、父だつて心を動かすだらうと思ひますわ。父は頑固な人間ですけど、とても私を大事にして呉れますもの。」

「空しい望みをつなぐものぢやありません。お父さんはあなたの涙を、世の中の若い娘が戀愛結婚ぢやなく、打算的な分別からお嫁に行くときにきまつて見せる、あり來たりの臆病や嫌惡のせゐだとお思ひになるのが落ちでせう。けれどもしお父さんが、あなたの意志にはお構ひなしに、是が非でもあなたを結婚させようといふ氣におなりだつたら？　もし無理やりに式場へ連れ出して、あなたのこれからの運命を、永遠にあの年寄りの夫の手に委ねようとなすつたら？」

「さうなつたら、もしさうなつたら仕方がありませんわ。救ひにいらして下さいまし。――わたくしあなたの妻になりますわ。」

ドゥブローフスキイはわなわなと身を顫はした。蒼白い顔にさつと燃えるやうな紅が流れたが、すぐさま前よりも蒼ざめてしまつた。彼はうなだれたまま長いあひだ默つてゐた。

「ありつたけの勇氣を出すんですよ。そしてお父さんに一所懸命お願ひするんです、足もとに身を投げ伏せてね。あなたの將來の怖ろしさ、あのよほよほの身持ちの悪い老人の傍で空しく凋んでゆくあなたの青春のことを、よく訴へて御覽なさい。お金だの富だのといふものは、ただの一分間の幸福をも齎らすものでないことを、また贅澤といふものはただ貧者の慰めになるだけで、それも馴れないうちの唯一瞬だけに過ぎぬものなことを、よくお話しなさい。希望の片影でも殘つてゐるうちは、お父さんがいくらお怒りにならうとお脅かしにならうと、決してぴくぴくしたり負けたりしてはいけません。お願ひだから負けないで下さい。そして萬一もうどうにも手立てがなくなつたら、その時こそ覺悟をきめて、はつきりお打ち明けなさい。つまり、もしお父様がどうしても聽いて下さらないのなら……もしさうなら怖ろしい人間に助けて貰ふつもりだと、さうきつぱりお言ひなさい。……」

そこでドゥブローフスキイは兩手で顏を蔽つた。一時に胸がこみあげて來たものらしい。マーシャは泣いてゐた。……

「僕の運命は慘めだ、實に慘めだ！」と彼は痛ましい吐息をして言つた、「あなたのためなら、僕はこの命を投げ出せるのに。あなたの姿を遠方から眺め、あなたのお手に何氣なく觸れて、幸福に醉つて來た僕なのです。ところが今、あなたをこの波だつ胸に抱きしめて、二人で一緒に死にませう！　と言へる今になつて、慘めな僕はその幸福を遠ざけなければならないのです。力一ぱいその幸福を押し返さなければならないのです。僕には、あなたの足もとに身を投げて、この得知らぬ、身にあまる賜物を天に感謝することもできないのです。ああ、僕はあの男を憎んでも憎みきれない筈なのに……だのに今ではもう、僕の心には憎惡のはいり込む餘地もないやうな氣がするのです。」

彼は物靜かに兩手を彼女のすらりとしたからだに廻して、やさしく自分の胸に引きよせた。彼女は素直に頭を若い强盜の肩に凭せ、そして二人は默つてゐた。

時は飛ぶやうに過ぎた。

「わたくし、もう行かなければ」とやがてマーシャが言つた。

ドゥブローフスキイははつと夢からさめたやうに顏を上げたが、彼女の手をとると、指環をはめてやつた。

「いよいよ僕を呼ばうと覺悟がついたら」と彼は言つた、「この指環をここへ持つて來て、この槲の木の洞へ入れて下さい。どうすればいいかは僕が考へます。」

ドゥブローフスキイは彼女の手に接吻して、樹の間がくれに姿を消した。

十六

ヴェレイスキイ公爵の求婚は、もう近隣に知れ渡つてゐた。キリーラ・ペトローヴィチは隣人たちの祝賀を受け、婚禮の仕度は捗つていつた。マーシャはきつぱりした打ち明けを、一日のばしに延ばしてゐたが、そのあひだ婚約の老人を素氣ないわざとらしい態度であしらひ續けた。公爵はそんな事は氣にかけなかつた。彼女の無言の承諾だけで滿足してゐた彼には、愛情の有無など問題ではなかつたのである。

が時は遠慮なしに過ぎてゆく。たうとうマーシャは行動をとることに覺悟をきめて、ヴェレイスキイ公爵に宛てて手紙を書いた。彼女は公爵の心に寛仁の情を喚びさまさうとつとめ、自分が彼に少しの愛着をも感じてゐないことを率直に打ち明け、どうぞこの求婚は取消して父親の横暴から彼女を護つてくれるやうに切願した。その手紙を彼女はそつとヴェレイスキイ公爵に手渡した。やがて一人になつてその手紙を讀んだ公爵は、許嫁の心からの打明けにも少しも感動を覺えなかつた。それどころか、彼は式をいそぐ必要を認め、そのためには彼女の手紙を未來の舅に見せなければならぬと考へた。

キリーラ・ペトローヴィチは激怒した。その手紙のことを知つてゐる素振りをマーシャに見せぬやう彼を說き伏せるまでには、流石の公爵もひと苦勞だつた。結局キリーラ・ペトローヴィチは、娘に手紙の話をせぬことに同意したけれど、もはや一刻も猶豫はならぬと考へて、その翌日に式を擧げることに決めてしまつた。公爵はこれを頗る分別のある考へだと思つて、すぐその足で許嫁のところへ戻つて來て、あの手紙は自分にとつては悲しい手紙であつたこと、しかし自分としては時とともに情愛の生まれるやうに祈つてゐること、彼女と別かれることは思つてさへ辛くてならぬこと、あの死刑の宣告のやうな彼女の言葉にはとても同意する力はないことを、彼女に告げた。この言葉を終へると、彼は恭々しく彼女の手に接吻して、キリーラ・ペトローヴィチの決心のことは一言もいはずに歸つて行つた。

ところが彼の馬車が門を出るか出ないのに、父親がはいつて來て、明日の日の仕度をするやうに頭ごなしに言ひつけた。今しがたの公爵の言葉で、すでに胸が一杯になつてゐたマリヤ・キリーロヴナは、わつとばかり父親の足もとに泣き伏した。

「パパ！」と彼女は痛ましい聲をふり搾つて、「パパ！　どうぞわたくしを見殺しになさらないで。わたくし公爵を愛してはをりません。あの人のところへ嫁くのは厭ですわ。」

「一體それは何ごとだ！」とキリーラ・ペトローヴィチは怖ろしい聲で言つた、「今の今まで默つてゐたぢやないか、承知してゐたぢやないか。それをすつかり話の決まつてしまつた時になつて、そんな我ままなことを言ひ出して、不同意を唱へることは何ごとか。馬鹿も大抵にしなさい。そんな眞似をしたつて、わしは一歩も後へは退かんぞ。」

「どうぞ見殺しにしないで！」と哀れなマーシャは繰り返した、「なぜわたくしを追ひ出して、好きでもない人のところへ行けと仰しやるの？　それともう私のゐるのがお厭ですの？　わたくしは今までのやうにパパのお傍にゐたいの。ねえパパ！　わたくしがゐなくなつたら、パパはお淋しいでせう。もし私が不仕合はせでゐるとお思ひになつたら、尙のことお淋しいでせう。パパ、お願ひだから無理を仰しやらないで。わたくしお嫁に行きたくありませんの。」

キリーラ・ペトローヴィチは動かされた。が心の亂れを包みかくして、娘を押しのけると、語氣を荒らげて言ひ放つた。

「愚にもつかんことを言ふ奴だな、お前は、お前の幸福に入り用なものは、お前よりこのわしの方がよく心得てゐる。いくら泣いたつて駄目だ。お前の婚禮は明後日に決まつたぞ。」

「明後日！」マーシャは叫んだ、「まあ、どうしませう！　いいえ、いいえ、いけません、それは駄目です！　パパ、では申し上げときますわ。――もしどうしても私を見殺しになさるおつもりなら、わたくしパパの思ひも寄らない人に助けて貰ひますわ。その時になつて、御自分で娘の一生をどんなになすつたかがお分かりになれば、さぞぞつとなさるでせう。」

「なに、何だと？」とトロエクーロフは言つた、「脅し文句か！　親父に向かつて脅し文句か？　呆れた娘つ子だ！　さういふことなら、わしの方でもお前の思ひも寄らない目に逢はせてやるぞ。よくも他人に助けて貰ふなどと脅し文句が並べられたな！　よしよし、誰が助けにやつて來るか、一つ見てやらう。」

「ヴラヂーミル・ドゥブロフスキイです」と、マーシャは無我夢中で答へた。

キリーラ、ペトローヴィチは、娘が氣が變になつたのだと思ひ、呆氣にとられて彼女を見守つてゐた。しばらく言葉がとだえた。

「よろしい！」と、やがて父親が言つた、「誰でも好きな奴に救ひ出して貰ふがいい。だがそれまではこの部屋にゐるんだぞ。婚禮の日までこの部屋を一歩も出ることはならんぞ。」

さう言ひ渡すと、キリーラ・ペトローヴィチはその部屋を出て、扉の掛金をおろしてしまつた。

哀れな少女は身の行末を思つて、長いこと泣いてゐた。しかし思ひ切つて本心を吐露したお蔭

で心の重荷は輕くなつて、今までよりは落ち着いた氣持で自分の運命のことや、とるべき行動のことが思ひ圖れるのだつた。何よりも大切なことは、厭な結婚から遁れることだつた。いまお膳立てのできてゐる運命に比べれば、強盜の妻になる宿命の方が、彼女には天國のやうに思はれた。彼女はドゥブローフスキイが遺して行つた指環を見やつた。彼と二人きりで會つて、いよいよ最後の瞬間の一歩手前でもう一度ゆつくりと相談をしたい——この願望が彼女の小さな胸を焦がすのだつた。今晩あの庭の四阿のほとりへ行けばドゥブローフスキイに會へる、そんな氣がしてならなかつた。そこで彼女は、夕闇どきになるが早いかそこへ行つて、彼を待つことにしようと心にきめた。

やがて薄暗くなつて來ると、マーシャはその仕度をはじめた。ところが入口には錠が下りてゐて、小間使が扉の向ふ側から、お出ししてはいけないとの旦那樣のお言附けですと答へた。彼女は監禁されてゐたのである。やる方ない恥辱を感じながら、彼女は夜の更けるまで着更へもせずに窓ぎはに坐りつくして、じつと暗い夜空に見入つてゐた。やつと夜が白みはじめた頃、彼女はうとうとしかけた。がその淺い眠りは絶えず悲しい夢におびやかされ、やがて登つた朝日の光に目が覺めてしまつた。

十七

目がさめると、頭にのぼつた第一の考へは、思つても怖ろしい自分の境涯であつた。ベルを鳴らすと小間使がはいつて來た。小間使は彼女の問ひに答へて、キリーラ・ペトローヴィチは前の晩アルベートヴォへ出かけて、夜更けて歸邸したことを告げ、また彼女をこの部屋から一歩も出してはならぬし、誰とも一切口をきかぬやうに見張りをせよとの、嚴重な達しが出てゐる旨を告げた。また小間使の話では、司祭がどんな譯があらうと村を出てはならぬといふお達しを受けたほかには、今のところこれと言つて式の準備が始まつたやうにも見受けられないといふことだつた。そんな報らせを述べると、小間使はマリヤ・キリーロヴナを部屋に殘したまま再び扉をとざしてしまつた。

小間使の話で、美しい囚人の心はますます怨恨を深めた。胸は煮えくり返り、血潮は湧きたち騷いで、遂に彼女は一部始終をドゥブローフスキイに報らせようと覺悟をきめ、例の指環を約束の樹の木の洞へ入れる手立てを考へはじめた。ちやうどその時、小石が窓へ飛んできて、硝子に當たつた。マリヤ・キリーロヴナが庭を見ると、そこには幼ないサーシャが立つてゐて、何かし

きりに手眞似をしてゐた。彼が自分になつついてゐるのを知つてゐた彼女は、その出現を喜んだ。

「お早う、サーシャ。どうして姉さんを呼んだの？」

「僕ね、姉さんが何か用事はないかと思つて來て見たんだよ。パパはおこつててね、家ぢゆう誰も姉さんのいふことを聽いちやいけないつて言つたよ。けどね、何か用があつたら僕にさうお言ひよ、僕なんでもしたけるから。」

「有難うよ、可愛いサーシェンカ。ぢやね、あんたあの洞のあいてる槲の木を知つてる？　四阿のそばの。」

「ぼく知つてるよ、姉さん。」

「ぢやあね、もし姉さんが好きなら、いそいであそこへ駈けだして行つて、この指環を洞の中へ入れて頂戴。誰にも見つからないやうによく氣をつけてね。」

さう言ふと彼女は指環を投げてやつて、窓をしめた。

少年は指環を拾つて一散に駈けだして、三分ほど後には約束の樹のところへ來てゐた。そこで立ちどまると、息をはずませながら四邊をうかがつて、指環を洞へ入れた。首尾よく役目を果たした彼は、すぐその足でマリヤ・キリーロヴナに報らせに歸らうとした途端に、きたならしい裝をした赤毛の男の子が四阿の陰から飛び出して來て、槲の木へ走り寄ると手を洞へ入れた。サーシャは栗鼠よりもすばしこくその子へ飛びかかつて、兩手で相手の着物をつかんだ。

「こら何をしてるんだ？」と彼は凄い劍幕でつめ寄つた。

「お前の知つたことぢやねえよ」と男の子は身を振りほどかうと焦りながら言つた。

「その指環を置いてけ、赤毛猿め」とサーシャは叫んだ、「さもないとこつちにも考へがあるぞ。」

返事の代りに、相手は拳固を彼の顏に喰らはした。がサーシャは敵を放さず、聲を限りに喚き立てた。

「泥棒、泥棒！　こつちだ、こつちだよ！」

男の子は逃がれようと身をもだえた。どうやらサーシャより二つぐらゐ年上で、力もずつと強かつたが、サーシャの方が素ばしこかつた。二人は暫く揉み合つてゐたが、やがて赤毛の方が勝つて、サーシャを組みふせて咽喉をしめ上げた。がそのとき、逞ましい手がその赤いごわごわの髪の毛をつかんだかと思ふと、庭男のステパンがその男の子を地面から一尺あまりも吊り上げてゐた。

「やい、この赤毛野郎め」と庭男は言つた、「うちの坊つちやまを打つとは何事だ？」

サーシャは跳ね起きて、埃を拂つた。

「僕を羽掻締めにしやがつたんだ」と彼は言つた、「さもなきや組み伏せられなんかしなかつたのにな。さつさと指環をよこして行つちまへ。」

「どうしてなるもんかい」と赤毛は答へると、くるりと身をよぢつたので、ステパンの手はごわごわの髪の毛から離れた。

そこでいきなり逃げ出したが、サーシャは忽ち追ひついてその背中をぐいと突いたので、赤毛はもんどり打つてぶつ倒れた。また庭男に捕まへられて、今度は革帶で縛られてしまつた。

「指環をよこせ！」とサーシャは叫んだ。

「まあお待ち、坊つちやま」とステパンは言つた、「用人のところへ引つ張つて行つて糺明してやりませう。」

庭男は捕虜を屋敷の方へ引きずつて行き、サーシャは鍵裂きになつて革の汁でよごれてしまつた半ズボンを氣にしながら、一緒について行つた。と出會ひがしらに三人とも、厩の見廻りに行くキリーラ・ペトローヴィチにぶつかつてしまつた。

「それは何事か？」と彼はステパンに訊いた。

ステパンは手短かに今の出來事を話した。キリーラ・ペトローヴィチはじつとその話を聽き終ると、

「この惡戯つ兒めが」とサーシャに向かつて言つた、「なぜこの子と喧嘩したんだ？」

「この子が木の洞の指環を盗つたんだよ、パパ。指環を返せと言つてよ。」

「指環とは何だ？　どこの木の洞のことか？」

「あのね、マリヤ姉さんが僕にね……指環を、そのう……」

サーシャはうろたへて、しどろもどろになつた。キリーラ・ペトローヴィチは苦がい顏をして、頭を振りながら言つた。

「ぢやマリヤ・キリーロヴナの差金だな。すつかり白狀するんだ、さもないと氣が遠くなるほど答で引つぱたくぞ。」

「本當ですよ、パパ。僕はね……パパ……ぼくマリヤ姉さんに、何にも頼まれやしなかつたんですよ。パパ。」

「ステパン！　向ふへ行つて、白樺のよく撓ふ答を切つて來い。」

「待つて、パパ。僕みんな言つちまひます。さつき中庭で遊んでたら、マリヤ姉さんが窓をあけたの。で僕が駈け寄つてくと、姉さんが指環を落つことしたの、わざとぢやないんだよ。で僕はそれを拾つて木の洞へ匿したの。さうしたら……さうしたらこの赤毛がその指環を盗つたんです。」

「落としたが、わざとぢやなかつた、ふむ。そこでお前が匿した、ふむ……ステパン、笞を切つて來い。」

「パパ、待つて下さい、僕みんな言つちまひます。マリヤ姉さんが、その桝の木のところへ駈けて行つて、指環を洞へ入れて來いつて言ひつけたんです。だから僕、駈けてつて指環を入れると、このきたない小僧が……」

キリーラ・ペトローヴィチはその小僧に向かつて、怖ろしい聲で、

「どこの村の者だ?」と訊ねた。

「ドゥブローフスキイのうちの者だい」と彼は答へた。

キリーラ・ペトローヴィチはさつと顏を曇らせた。

「貴樣はこのわしを主人とは思はんと見えるな。——よし。だがわしの庭で何をしてゐた?」

「木苺を盗んでたんだよ」と平氣の平左で男の子は答へた。

「ははあ! 下男までが主人と同じか。この僧にしてこの檀家ありぢやな。だがわしのうちの桝には木苺が生つとるかな? いやこいつは前代未聞だわい。」

男の子は默りこくつてゐた。

「パパ、指環を返せと云つてよ」とサーシャがせがんだ。

「默つてろ、アレクサンドル!」とキリーラ・ペトローヴィチは遮つて、「お前はもうぢき、うんと折檻してやるからさう思へ。さつさと部屋へ引つ込んでろ。おい、そこの藪睨み小僧、どうやら貴樣は一筋縄ぢや行かんらしいな。もしすつかり白狀するなら、笞も喰はさんし、褒美に五錢玉をやるがどうだ。指環を返して行つてしまへ。」男の子は何も握つてゐない證據に、拳をひらいて見せた。「さもなけりや、貴樣を飛んだ目に逢はしてやるぞ。どうだ!」

男の子は一言も答へず、頭を垂れたままつつ立つて、本物の阿呆のやうな振りをしてゐた。

「よおし!」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「この小僧をどつかへ叩き込んで置け。萬一逃がしでもしたら、屋敷ぢゆうの何奴も此奴も容赦はせんぞ。」

ステパンは男の子を鳩小舍へ引つ張つて行き、そこへ閉ぢ籠めると、鳥番のアガーフィヤといふ婆さんを見張りにつけた。

「いや今となつては疑ふ餘地もない。娘はやつぱりあのドゥブローフスキイの奴と交際をつづけてゐたのだ。だが實際本當に奴の助けを求めたのなら」とキリーラ・ペトローヴィチは腹立たしげに『ひひけ、勝利の鬨のこゑ』の口笛を吹きながら、部屋のなかを歩き廻つて思案した、「奴さん今度こそは俺に尻尾をつかまへられた譯だ、さうなつたらもう逃がしはせんぞ。この機會を利用することだ……や、鈴の音だ。有難いぞ、あれは署長だ。おい、あのとつ捕へた小僧を連れ

て來い。」

そのうちに馬車は門をくぐつて、やがて例の署長が埃だらけの姿ではいつて來た。

「吉報があるよ！」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「俺はドゥブローフスキイを捕まへたぞ。」

「それは、それは、閣下！」と相好を崩した署長が言つた、「して何處にをります？」

「但しだ、本當のドゥブローフスキイぢやない、奴の一味の者なんだ。今ここへ連れて來る。奴は頭目をとつ捕まへる手助けになるだらうよ。そら連れて來た。」

物凄い强盜が現はれることと思つてゐた署長は、ひどく羸弱さうな十三ほどの少年の姿を見ると、呆れてしまつた。彼は怪訝さうな眼をキリーラ・ペトローヴィチに向けて、その說明を待ち受けた。キリーラ・ペトローヴィチは促されるまでもなく、その朝の出來ごとを物語りはじめたが、マリヤ・キリーロヴナのことは曖氣にも出さなかつた。

署長は小つぽけな惡漢の方をじろじろ見やりながら、聽耳をたててゐたが、一方その男の子は阿呆を極めこんで、身の周りで何が始まつてゐるのか一向氣にもとめない樣子だつた。

「畏れ入りますが閣下、ちよつと別間でお話し申上げたいことが」と、やがて署長が言つた。

キリーラ・ペトローヴィチは彼を隣室へ連れて行き、扉の掛金をおろした。

半時間ほどして二人は、捕虜がその運命の手を待つてゐる廣間へ戻つて來た。

「旦那の思召しでは」と署長が彼に向かつて言つた、「お前を町の牢屋へ叩き込んで、笞をさんざん喰はしたうへ、流し者にするお心算だつたのだ。それをこの私がお前を庇つて、お赦しを願ふことにしてやつたのだぞ。この子を解いてやれ。」

少年は縛めを解かれた。

「旦那に御禮を申上げろ」と署長がいつた。

少年はキリーラ・ペトローヴィチの方へ歩み寄つて、その手に接吻した。

「とつとと家へ歸るんだ」とキリーラ・ペトローヴィチが言つた、「これからは木の洞の苺を盜むぢやないぞ。」

少年は部屋を出ると、嬉しさうに昇降口を飛びおりて、傍目もふらずに耕地を越えて、キステニョーフカの方へ駈けて行つた。村まで走つて來ると、とつつきの半ば崩れた百姓小屋のところで立ちどまり、小窓をとんとんと叩いた。上げ蓋があがつて、老婆の顏がのぞいた。

「お祖母さん、パンお呉れよ！」と少年が言つた、「おいら朝から何にも食はねえんだ、腹がへつて死にさうだよ。」

「おや！　ミーチャ、お前だつたのかい。一體今までどこをほつき廻つてゐたかね？」と老婆

が答へた。

「あとで話すよ、お祖母さん。後生だからパンお呉れよ！」

「ぢや上がつといでな。」

「おいら上がつちやゐられないんだ、お祖母さん。もう一走り行つて來なくちやならないんだ。パンだよ、お願ひだからパンをお呉れよお。」

「何といふ落ち着きのない子だらう」と老婆はぶつぶつ呟いて、「さあこれでも持つて行くがええ。」

そして黒パンの一かけらを窓から差し出した。少年はがつがつと嚙りついて、口を動かしながら再び歩みを續けた。

日が暮れて來た。ミーチャは乾穀場や野菜畠を通り抜けて、キステニョーフカの林をめざして行つた。林の前哨よろしくの恰好で立つてゐる二本松のところまで來ると、彼は立ちどまつて、あたりを窺ひ、鋭い口笛を切れ切れに吹いては耳を澄ましはじめた。すると柔らかな口笛の返事が聞こえて來て、誰やら林のなかから近づいて來る人影があつた。

十八

キリーラ・ペトローヴィチは例の口笛を平生より高調子で吹きながら、廣間を行きつ戻りつしてゐた。屋敷の中は上を下への騒動だつた。下男は馳せかひ、小間使は立ち働く。車小舎では馭者が馬車の用意をし、庭先には群衆が犇めいてゐる。令嬢の化粧部屋では、一人の婦人が女中達に圍まれて、姿見の前に蒼ざめて身じろぎもしないマリヤ・キリーロヴナの着附けをしてゐる。彼女の頭は、ダイヤモンドの重さで、懶げに傾いてゐる。ふと不注意な指さきが留針で刺したので、彼女は微かに身をふるはせたが、やはり無言のままで、うつろな眸を姿見に注いでゐる。

「そろそろいいか？」とキリーラ・ペトローヴィチの聲が、扉のところで聞こえた。

「はい、只今！」と婦人は答へた、「マリヤ・キリーロヴナ、さあお立ちになつて、いかがですか御覽遊ばせ。」

マリヤ・キリーロヴナは立ちあがつたが、何も答へなかつた。扉があいた。

「花嫁様のお仕度はととのひました」と婦人はキリーラ・ペトローヴィチに言つた、「馬車を曳き出すやうお申しつけ下さいまし。」

「では無事でな！」キリーラ・ペトローヴィチは答へて、卓上の聖像をとり上げると、「ここへおいで、マーシャ」と感動に顫へる聲で言つた、「お父さんが祝福してあげよう……」

哀れな少女は父親の足もとに跪いて、咽び泣きはじめた。

「パパ……パパ……」と彼女は涙のひまから言つたが、聲はとだえてしまつた。

キリーラ・ペトローヴィチが急いで祝福を濟ませると、寄つてたかつて抱き起こして、ほとんど運ばんばかりにして馬車へ乘せた。假母と女中が一人同乘して、馬車は教會をめざした。そこにはもう花婿が待つてゐて、花嫁を出迎へたが、その蒼ざめた顏色や只ならぬ樣子にはつと胸をつかれた。やがて二人が、冷めたいがらんとした會堂にはいると、うしろの扉は閉ざされてしまつた。司祭が祭壇の蔭から現はれて、すぐに式は始まつた。マリヤ・キリーロヴナには何一つ眼にも耳にもはいらなかつた。その朝めざめるとから只ひたすらに、ドゥブローフスキイの出現を待ち焦れてゐたのである。その望みをただの一瞬も失はずにゐたのである。がやがて、司祭が紋切型の問ひをかけるのを聞いたとき、彼女はわなわなと身を顫はせて、今にも氣が遠くなりさうだつたが、それでもまだ躊躇つて、彼を待つてゐた。司祭は彼女の答へを待たずに、取り返しのつかぬ言葉を唱へてしまつた。

式は終つた。彼女は厭はしい夫の冷めたい接吻を感じ、式に列つた人々の諛ひがましい祝辭を耳にしながら、いまだに自分の生涯が永遠に鎖につながれ、ドゥブローフスキイが救ひに來て呉れなかつたのだとは、とても信じられずにゐた。公爵が何か物優しい言葉をかけて呉れたが、彼女にはその意味が呑みこめなかつた。やがて二人が會堂を出ると、玄關先にはポクローフスコエ

の百姓達が人垣を作つてゐた。彼女の眸はちらと彼等の上を走つたが、またもとの虚ろに返つてしまつた。

新婚の二人は馬車に乘ると、すでにキリーラ・ペトローヴィチが新郎新婦を出迎へようと先に發つて行つたアルベートヴォをめざした。新婦と二人きりになつても、公爵は彼女の冷やかな樣子に少しも心を騷がさなかつた。彼は甘たるい愛の囁きや、噴き出すやうな感激の文句で彼女を煩さがらせようとはせず、返事もいらぬ簡單な言葉を口にするだけであつた。そんな風で十露里ほど過ぎた。馬は飛ぶやうに凸凹の多い村道を走り、馬車は英國製の發條のお蔭でほとんど搖れなかつた。不意に追手の喚聲が響いた。馬車は停まつて、武裝の一團がひしひしとまはりを取り圍んだ。半ば覆面した男が、若い公爵夫人の坐つてゐる側の扉を開けて、彼女に言つた。

「あなたはもう自由です。お出なさい。」

「一體これは何ごとだ」と公爵は叫んだ、「貴樣は何者か?……」

「この人はドゥブローフスキイです」と、公爵夫人は答へた。

公爵は沈着を失はずに、脇ポケットから旅行用ピストルを取り出すと、覆面の剽盜めがけて發射した。公爵夫人はきやつと叫んで、怖ろしさに兩手で顏を蔽うた。ドゥブローフスキイは肩を傷つけられた。血が流れた。公爵は矢つぎ早に別のピストルを取り出した。が射つ暇がなかつ

た。扉は開かれて、何本かの逞ましい腕が彼を馬車から引きずり下ろし、ピストルを掩ぎとつてしまつたのである。彼の頭上に閃々として短刀が光りはじめた。

「其奴には構ふな！」とドゥブローフスキイが叫ぶと、暗黒の一味達は身を退いた。

「あなたは自由なのです！」とドゥブローフスキイは、蒼ざめた公爵夫人に向かつて言葉をついだ。

「いいえ！」と彼女は答へた、「遲すぎました。婚禮はもう濟みました。わたくしはヴェレイスキイ公爵の妻でございます。」

「何を仰しやる！」とドゥブローフスキイは必死に叫んだ、「違ひます！　あなたは奴の妻ではありません、あなたは無理强ひにされたのだ、よもやあなたが承諾なすつた筈はない……」

「わたくしは承諾しました、誓ひを立てました」と彼女はきつぱりと言ひ返した、「公爵はわたくしの夫です。あの人を放すやうに仰しやつて下さいまし、そしてわたくしども二人をこのまま お見棄て下さいまし。わたくしは嘘は申しませんでした。最後の瞬間まであなたを待つてをりました……けれど今になつては、はつきり申し上げますわ、もう遲すぎます。わたくしどもを行かせて下さいまし。」

しかしドゥブローフスキイには、もはや彼女の聲は聞こえなかつた。傷の痛みと心の激動と

に、彼の氣力は盡きてしまつたのである。彼は車輪のもとに倒れ、一味の者がそれを取り圍んだ。彼がやつとのことで二た言三こと口を動かすと、彼等は首領を馬に乘せ、中の二人がその身を支へ、もう一人が轡をとつて、一同はその場を立ち去つた。馬車を道の眞中に置きざりにし、縛られた下僕や車から外した馬もそのままに殘して行つたが、しかも何一つ奪ひもせず、その首領の流した血の復讐に、ただ一滴の血も流さなかつた。

十九

畫なほ小暗い森のなかの細長い草地に、土壘と壕とで小さな土の砦が築いてある。その蔭には三つ四つ掘立小屋や泥小舍が立つてゐる。圍ひの中には、一目で剽盜と知れる雜多な服裝と物々しい武裝をした大勢の人々が、帽子をぬいで晝飯の鍋のまはりに車座になつてゐる。土壘のうへの小さな大砲の傍には、見張り番があぐらをかいてゐる。彼は自分の着物の一部に補布をあてててゐるが、その器用な針の運びを見ると、前身は老練な仕立屋であつたことが分かる。手仕事の合間合間に絶えずあたりに眼を配つてゐる。

何を盛つたものやら知れないが、酒柄杓が手から手へと幾めぐりしたけれど、不思議な沈默が

この一座を領してゐた。やがて剽盜たちは晝飯ををはると、次から次へと立ちあがつて神に祈つた。そして或るものは掘立小屋へ姿を消し、或るものは森のなかに散り、また或るものはロシヤ人の習慣で食後のごろ寢をはじめた。

見張り番は手仕事を終へると、その着物を振るひ、補布の當てぶりに我ながら感心し、針を袖口に刺し、さて大砲に馬乘りになつて、憂鬱な古い唄を咽喉も裂けよと歌ひはじめた。

騒ぐなよ、おまへ、母なるみどりの森よ
亂すなよ、若い俺らが思ふおもひを(8)

すると、とある掘立小屋の扉があいて、白い頭布をかぶり、小ざつぱりと洒落れた身裝(みなり)をした老婆が、闕のうへに現はれた。

「いい加減におし、スチョーブカ」と彼女は腹立たしげに言つた、「旦那樣がお寢(ね)みだといふのに、そんなきな聲を出してさ。本當に良心も思ひやりもない人達だよ。」

「濟まなかつた、ペトローヴナ」とスチョーブカは答へた、「よし俺らはもう唄はやらねぇ。旦那によくお寢(ね)つてはやく快(よ)くなつて貰つてお呉れよ。」

老婆は姿を消した。スチョーブカは土壘の上を歩き廻りはじめた。

いま老婆が出てきた小屋には、手負ひのドゥブローフスキイが、仕切りの蔭にある行軍用の寢臺に横たはつてゐた。眼のまへの脇机には、二三挺のピストルが置いてあり、枕もとには軍刀がかけてある。土小屋の四壁や床(ゆか)には、豪奢な絨毯が張りめぐらしてある。一隅には婦人用の銀製の化粧臺や姿見が据ゑてある。ドゥブローフスキイは開いた本を片手にしてゐるが、眼はとぢてゐる。仕切りの蔭からときどき顏を覗かせる例の老婆にも、主人が寢入つたのか、それともただ物思ひに耽つてゐるのかは分からない。

と遽かにドゥブローフスキイは、どきりと身を顫はした。砦の中がどよめき立ち、スチョーブカが小窓へ首を差し入れた。

「旦那ヴラヂーミル・アンドレーヴィチ!」と彼は叫んだ、「味方の合圖がありました。奴等が嗅ぎ廻つてゐます。」

ドゥブローフスキイは寢臺を蹴つて起つと、武器を鷲づかみにして小屋の外へ出た。剽盜達は口々に罵りながら、圍ひの中に犇めいてゐたが、彼の姿を見るとひつそりと靜まり返つた。

「みんな此處にゐるか?」とドゥブローフスキイは訊ねた。

「斥候のほかはみんなをります」と返事があつた。

「部署につけ！」とドゥブローフスキイが叫ぶと、一味の者はそれぞれの持場についた。そのとき三人斥候が門へ走り歸つて來た。ドゥブローフスキイは彼等を出迎へに行つた。

「どうしたのか？」と彼は訊いた。

「兵隊が森へはいりました」と彼等は答へた、「味方は圍まれてゐます。」

ドゥブローフスキイは門を閉めろと命じ、自分は大砲を檢べに行つた。森の中に幾人かの人聲が響いて、次第にこちらへ近づいて來る。剽盜たちは片唾を呑んで待ち受けた。突然三四人の兵士が森から立ち現はれたかと思ふと、味方に合圖の發砲をしながら、直ちに退却した。

「戰鬪準備！」とドゥブローフスキイが號令すると、剽盜のあひだに一時ざわめきが起こつたが、また靜まり返つた。

と、部隊の近づいて來る物音が聞こえた。武器が樹の間にきらめいたと思ふと、百五十人ほどの兵士がばらばらと森を駈け出て、喊聲をあげて土壘へ突進した。ドゥブローフスキイは火繩をつけた。見事に狙ひは定まつて、一人の首は宙に飛び、二人は負傷した。兵士は動搖の色を見せた。がそのとき將校が先頭に飛び出すと、兵士もそれに續いて壕のなかへ駈け込んだ。剽盜たちは小銃やピストルを彼等めがけて浴びせたが、やがて怒り狂つた敵が二十人ほどの負傷兵を壕に殘して、土壘へ攀ぢのぼりだすと、手に手に斧を振るつて防ぎはじめた。白兵戰になつた。兵士

はもはや土壘の上に出て、剽盜はぢりぢりと退きはじめた。とドゥブローフスキイは將校の前へ迫つて、その胸にピストルを突きつけて火蓋をきつた。將校がどさりと仰向けに倒れると、數人の兵士が抱きかかへて、急いで森へ運び去つた。指揮者を失つた殘兵は前進をためらつた。勢づいた剽盜は、相手のひるむ隙に乘じて突きまくり、壕へ追ひ落してしまつた。包圍隊は壞走した。剽盜は喊聲をあげて追擊に移つた。勝利はきまつた。ドゥブローフスキイは敵が全く混亂に陷つたのを見ると、はやる味方を押しとどめて、砦の中に閉ぢこもつた。そして見張番を二倍にふやし、負傷者の收容を命じ、一切砦を離れることを禁じた。

この最後の出來事に遭つては、政府ももはや笑つて濟ませる譯には行かず、ドゥブローフスキイの不敵な掠奪沙汰に眞劍な注意を向けることになつた。彼の所在に關する情報が集められ、一個中隊の兵士が、生かさうが殺さうが兎に角彼を捕へるために派遣された。數人の一味の者が捕へられたが、その申し立てによると、もはやドゥブローフスキイは、彼等のあひだにはゐないことが分かつた。あの戰ひから二三日すると、彼は一味の者をのこらず集めて、自分はこれで永遠に彼等と別かれるつもりだと告げ、彼等もたつきの道を變へたがよからうと忠告した。

「お前達は俺の下で働いて金持になつたし、みんなてんでに居住證（パスポルト）を持つてゐるのだ。それがありや何處か遠くの縣へ無事に落ちのびて、正業につきながら、餘生を裕福に送れる筈だ。だが

見渡すところ悪黨ぞろひだから、足を洗はうなんて考へないかも知れんな。」

この訓辭をすますと、仲間の一人だけを伴につれて、彼等を棄てて立ち去つた。彼の行方は誰一人知るものはない。はじめのうちは、この申し立ての眞僞は疑はれてゐた。何しろ剽盜一味が首領に捧げる心服は周知のことだつたし、從つて彼等がかばひ立てをしてゐるものと睨まれたのである。しかしその後の成行きでこの申し立ての本當なことが確かめられた。怖ろしい訪問や放火や掠奪はやみ、大道も安全になつた。別の情報で、ドゥブローフスキイが外國へ身を匿したことが分かつた。

ヌーリン伯

いざ時ぞ、時こそ來つれ！　と角笛が呼ぶ。
犬番の衆は狩裝束に身を固めて
夜の引き明けからもう馬に跨がつてゐる。
ボルゾイ犬は紐に繋がれて勇み立つ。
やがて主人は表段に立ち現はれて、
用意はいかにと、兩肘張つて眺め渡す。
さも滿足げな主人の面は
他所目にも快い威嚴にかがやく。
ぴつたりと下外套を着こなして、
腰帶には反りを打つたるトルコ刀
胸もとにはラム酒の滿てる水筒
さて青銅の鎖の先には角笛。

寢室帽に頭布を打ちかけて
睡たさうな眼をした奥がたは
窓ごしに佛頂面をのぞかせて、
集ふ人々、獵犬らのざわめきを眺めてゐる。
やがて主人の馬が引かれる、
むんづと馬の肩先に手がかかる、鐙へ足がかかる、
そして妻へ叫ぶ、「今日は歸らんぞ！」
言ひ棄てて遠出の狩へ出で立つ。

そもそも九月の末といへば
（などとは散文的で恐縮だが――）
田舍暮らしは味氣がない。泥濘、雨空、
秋の風、さらさらとこぼれる粉雪、
さてはまた狼の遠吠え。だがその代り
獵好き連は有罫に入るのだ！　甘睡の床も忘れて

人里はなれた野の土を蹄に蹴ちらし、
ところ嫌はず夜營の天幕、
罵り交はす、夜露にぬれる、酒酌み交はす
その日の大獵を祝いで。
ところで良人が狩に出た留守を
ひとり守る妻はそも何をかなすべき？
いやいや妻たるもの、用事は山ほどありまする。
簞を鹽に漬ける、鶏鳥に餌をやる、
夕飯の指圖、また夜食の采配、
納屋の見廻り、窖藏の檢分。
主婦の眼の不用な場所はないし
光らせば忽ちあらが目につかうもの。
困つたことには私達の女主人公は
（どつこい、名前をつけるのを忘れたぞ！

良人はナターシャと呼び棄てにしてゐたが、
僕らは――禮儀正しくナターリヤ・パーヴロヴナと
呼ぶことにしよう)、で困つたことには
このナターリヤ・パーヴロヴナは、
家事にも家政にも一向に
手をお染めにはならないのだ。といふ次第は、
父母の膝下で嚴しく躾けられる代りに
お上品なさる寄宿女學校で
フランス生まれの亡命婦人ファルベルの
黨陶を受けて生ひ立つたからで。

彼女は窓ぎはに坐つてゐる。
眼の前にはその名も高い紅涙小説、
『エリーザとアルマンの戀物語、
又の名は二家族の文の行きかひ』の

第四卷目がひろげてある。
これはまた古典的な、いとも大時代な
山鳥の尾のしだり尾と長々しい
女大學式なお行儀のよい小説で
ロマンティクな綾なぞは藥にしたくもない代物。

ナターリヤ・パーヴロヴナは初めのうちこそ
一心こめて讀んではゐたが、
やがて間もなく心の外れた先は
ちやうど窓の眞前に持ちあがつた
山羊奴と屋敷の飼犬の組み打ちで、
勝負や如何にとこつそり片唾をのんだ。
あたりには村の童の笑ひごゑ、
そのうちに窓の下へは
びしよ濡れの雄雞どのを先頭に

けっけっけっと七面鳥も罷り出る。
鴨が三羽、水溜りでぼちゃぼちゃ、やる。
ぬかる庭先を農婦がよちよち
垣根へ洗濯物を掛けに行く。
次第に空模様があやしくなつて、
どうやら白いものでも降つて來さうだ……
そのとき不意に馬の鈴の音がした。

永らく侘しい田舎暮らしをした人なら
遠音にひびく鈴の音が時にとつて
どんなに激しく僕らの胸をときめかすものだか
身にしみて覺えがあるに違ひない。
時刻に遲れてやつて來た友達ではあるまいか、
青年客氣の昔戀しい同僚ではあるまいか？
もしやあの女では？……やれどうしよう！

そらだんだんに近くなる。胸は高鳴る。
ところが鈴の音は塀について行き過ぎて、
微かに遠のき……丘をめぐつて消え失せる。

ナタールリヤ・パーヴロヴナは鈴のひびきに
胸おどらせてバルコンへ走り出る、
小手をかざして眺めると、川向ふの
水車小屋のほとりを疾驅してゐる馬車がある、
そら橋を渡る——やつぱりお客様だわ……あら違つた、
左手へ折れちまつた。そのあとを見送りながら
彼女は今にも泣きだしさう。
時しもあれや……まあ〳〵めた！ 急な坂道で、
とたんに馬車は横倒し。「フィーリカや！ ヴァーシカや！
そこにゐるのは誰？ 急いでおいで！ そら馬車があんなに。
早速あれを屋敷へ引き込んで

中の旦那にはお夕飯をどうぞとお言ひ！
でも生きておいでかしらねえ？……驅けてつてお尋ねおし！
さあ急いで、大急ぎだよ！」

召使はさつと駈けだす。

ナターリヤ・パーヴロヴナはそはそはと
房々した捲髪を編み返す、ショールを羽織る、
垂帷を引く、椅子を押し出す、
さて待ち受ける。ああじれつたい、まだか知ら！
やがてたうとう馬車が來る、こつちへ來る。
長の旅路に跳泥だらけな胴體に、
今の騷ぎで深傷を負つたその馬車が、
無殘な姿で、えいやらほうと曳かれて來る、
そのうしろには若い紳士が跛を引いてついて來る。
從僕のフランス人は傷手にもめげず、

《Allons, courage!》(1) と主人をはげます。
やがて表段へ辿りつく、もう玄關へあがつて來た。
扨てその紳士を出迎へて
まづまづこれへと別間へ案内して、
扉をさつと開けはなち、そして
忠僕 Picard があたふたと馳せ廻り
旦那が着替へをなさるその暇に、
一體これが何處の何者かを御紹介に及ばうか？

これこそ永年外國にあつて
流行の渦中に未來の收入まで使ひ果たした
ヌーリン伯爵その人の新歸朝姿、
今しも己を珍種の獸に見立てられようと
北の都をさして急ぐところであります。
携へた品は何々ぞ——燕尾服やチョッキの着替へ、

帽子やマントや、さてコルセット、
ネクタイ・ピンにカフス釦、柄附眼鏡、
色ハンカチ、à jour[2]の靴下、それぞれ幾揃ひ、
身の毛もよだつギゾオ[3]の論文、
頗る邪氣ある漫畫の手帖、
ウォルター・スコット[4]の新作小說、
花のパリの宮廷仕込みの bons-mots[5]に
ベランジェー[6]の新作小唄、
ロシーニやパエール[7]の樂旨や、
以下 Et cetera, et cetera.

食卓はととのつてゐる。もう夙に食事の時刻だ、
奥さんは待遠しくつてじりじりしてゐる。
と扉があいて、伯爵が歩み入る。
ナターリヤ・パーヴロヴナはちよいとお腰をもちあげて、

御氣分はいかが？　おみ足は痛みまして？　と
いと慇懃に問ひたづねる。
いや別に何とも、と伯爵が答へる。
そこで二人は食卓へ進み寄る。伯爵は席につくと
自分の食器を奥さんの方へ押しすすめて、
たちまち話に華が咲く。——
聖なるロシヤに惡口雜言、この雪の中で
よくも暮らせますなと目を丸くする、
二た言目には花のパリが懐かしいと仰せになる。
「お芝居の方はどうですの？」『いや、さびれましたな！
C'est bien mauvais, ça fait pitié.[8]
タルマ[9]はすつかり耳が遠くなつて、聾碌しましたし、
マール嬢[10]も惜しいかな歳をとりましてね。
それに代るものはポチエ[11]ですな、le grand Potier![12]
昔日の人氣をいまだに維持してゐるのは

なんと云つても彼一人あるのみですよ。』
「只今どんな作家が流行つとりまして？」
『やつぱり d'Arlincourt とラマルチーヌ[13]ですなあ。』
「こちらでも矢張りその二人を模倣いたしてをりますわ。」
『まさか！　本當ですか？　してみると吾が國でもそろそろ
智力が發達しはじめたと見えますな。
ああ、吾々も早く開化の民になりたいものですよ！』
「あちらでは腰線は如何ですの？」『とても低いのが流行ります、
殆んどその……つまり此の邊まで來てゐますね。
失禮ですが、ちよつと御着附けを拜見。
なある……襞縁、飾り襞、ここに模様と、
いかにも流行に近いお好みですな。』
「わたくしどもでは『新報』をとつてをりますの。」
『ほほう！……いかがです。きれいな小唄を
ひとつお聽かせしませうか？』そこで伯爵は

歌ひだす。「まあ、伯爵、どうぞ召しあがつて。」
『いや、もう充分で。』「では……。」

そこで主客は
食卓をはなれて席を移す。若い奥さんは
浮き浮きとのぼせあがつてゐる。
伯爵ははやパリのことも忘れ果てて、
ああ何て美人だらうと眼をみはる。
知らぬ間に夜は移る、更けてゆく。
伯爵は陶然とわれを忘れる、奥さんの眼ざしが、
あるひは零れるやうな愛嬌を漂はせ
あるひはふと應へもなくて伏せられるまにまに。
やがて氣がつくと、いつしか時刻は眞夜中。
控室にはとうから召使の鼾が聞こえ
隣り屋敷の鷄もだいぶ前から鳴き出して、

夜番の衆が鐵板を叩いて廻る。
客間の蠟燭ももはや燃え盡きた。
ナターリヤ・パーヴロヴナは立ちあがつて、
「大分遲くなりました、御機嫌よう！　寢床が待つてをりますわ。おやすみ遊ばせ。……」半ば戀ひ痴れた優しの伯爵は、殘り惜しげに席を立つて、
奥さんの手に口づける。こはそも何事ぞ？
つつしむべきは嬌態なるかな！
奥さんは茶目氣たつぷり（神よ許させ給へ！）
伯爵の手をそつと握りしめたものだ。

ナターリヤ・パーヴロヴナは衣裳をぬいだ。
小間使のパラーシャが侍つてゐる
そこで申し上げて置くが、このパラーシャは
萬事につけて奥様のお氣に入り。

針仕事をする、洗濯をする、金棒を引く、
奥様の部屋着のおさがりを狙ふ、
時には旦那様と惡ふざけをする、
時には旦那様に慳突を喰はせる、
そして奥様の前で大それた嘘もつく。
今も今とて勿體ぶつて
伯爵の人柄から役柄から
何から何まで洗ひざらひ喋り立てる——
どうして嗅ぎ出したかは神のみぞ知り給ふ。
擧句の果ては奥様もたまり兼ね
「もう澤山、厭々したよ！」と鶴のひと聲。
ジャケツと寢室帽を受けとると、
寢床にもぐつて、小間使を退らせた。
一方伯爵もフランス人に手傳はせて
衣裳をすつかり脱ぎ棄てた。

寢床にはいると、葉卷を御所望になる、
そこでムッシュ・ピカールが枕卓に
ガラス壜と、銀の大コップと、
葉卷の函と、銅燭臺と
ばね仕掛けの髮鏝と、めざまし時計と、
頁の切つてない小說本と――を並べ立てる。

さて溫々と夜着にくるまつて、
ウォルター・スコットの頁に眼を走らせる。
とはいへ心はここにはあらず、
煩惱しきりに湧き起つて胸ぬちを騷がせる。
彼は自らに問ひ、自らに答へる――
本當におれは惚れたのかしら？
ひとつ當たつて見ようかな？……いやこいつは乙だわい。
どつちみち、こりや素晴らしいぞ。

どうやら俺は、好かれたらしいし。……
そこでヌーリンは蠟燭を吹き消した。
息ぐるしいばかりの熱つぽさが總身を包んで、
伯爵は寢もやらず。意馬心猿の休まらばこそ、
彼の五官は罪ぶかい夢想に、あやしく
唆り立てられる。根が情には脆い生まれゆゑ
まざまざと闇中に思ひゑがくは
口ほどに物をいふこの館のあの夫人のあの眼差、
まるまるとししおき豐かな胴まはり、
いかにも女らしい柔しさ溢れるあの聲音、
都の女に絕えて見られぬ頰の色つや――
まつたく健康ほどに色よい臙脂がこの世にあらうか。
優にやさしい可憐な杏さきを思ひだす、
まざまざと、またありありと、

女の手がついうつかりと自分の手を
握りしめたのを思ひだす。吾ながら千慮の一失、
あの一刹那の氣まぐれを物にするため
是が非でも女の傍に居坐るところだつたわい。
とは云へ今からでも遲くはない。言はずと知れた
今このとき、扉の錠は外れてゐる筈。——
そこで矢庭に肩からふわりと
色も綾の絹の部屋着を引つかけて、
暗がりの手さぐり、椅子をどたりと引つくり返し、
甘い褒美にありつかう一心から
ルクレチヤ(11)の寢所を指して今様タルクィニウスは
用意おさおさ怠りなく出陣に及んだ。

女中さんに甘やかされた氣どり屋の
性根の悪い仔猫は時として鼠を狙つて、

煖爐の上の寢床からこんな風に這ひ出すものだ。——
足おと忍んでそろりそろりと
眼を細めながら相手に近寄り、
背中をまるめ、尻尾を宙にうごめかし、
邪悪な掌の爪を逆立てて
いきなりさつと獲物に跳びつく。

戀痴れた伯爵は暗がりをうろうろ、
手さぐりで奥へ奥へと進んで行く、
慾念のほむらに胸もふたがり、
息もろくろく咽喉をかよはず、
足もとの床板がみしりとでも云はうものなら
思はずどきりと顫へあがる。やつとのことで
宿願の扉のそとまで辿りついて、ひそやかに
銅の掛金の把手を握りしめる、

扉はそろりそろりと開きかかる。
覗いて見れば、ランプが微かにともつて
仄かに寢所を照らしてゐる。
寢所の主はやすらかに寢入つてゐる、
乃至は寢入つた振りをしてゐる。

彼は忍び入る、手探りをする、後じさりをする、——
やがての果てに、さつと寢床の裾に身を投げ伏せる。
すると彼女は……いや、ここで彼等二人の許しを得て、
わがナターリヤ・パーヴロヴナが
どんなに怖ろしい思ひで眼ざめたかは
ペテルブルグの婦人がたの想像にお任せするとしよう、
序でに彼女のとるべき道も決めて頂きたいものだ。

彼女はつぶらな眼をみひらいて、

伯爵をじつと見つめる——一方われらが主人公は
書物から借り集めた心のたけを述べ立てながら、
厚かましい片手をさし伸べて
あはや夜着にも觸れんず氣配に、
最初がほどは夫人もすつかり度を失つた。……
途端にはつと吾に返つた奥さんは、
誇り高い瞋恚の焔に燃え立つて、
とはいへおそらく恐怖も手傳つて、
タルクィニウスの頰をめがけて發止とばかり
平手打ちを喰らはした、いや全くさ！
平手打ちも平手打ち、それこの通り！

ヌーリン伯は顏から火の出る思ひ、
したたか煮湯を、がぶりと呑まされた。
物凄い劍幕でいきり立つたる伯爵が

騎虎の勢ひ、何を仕出かしたらうかは知らぬが、
とにかく矢庭に尨毛の小犬が吠えだして、
パラーシャの深い眠りは破られた。
近づく小間使の足おとに
伯爵は不運な夜の泊りを呪ひつつ、
氣ままな美女を怨じつつ、
不面目にも旗を卷いて退陣に及んだ。

その彼と、奥様と、パラーシャが
その夜の殘りをどうして過ごしたかは
宜しく勝手に想像されたい！
作者は諸君のお手傳ひをする氣はござらん。

やがて朝、むつつり顏で起き出た伯爵は、
ものうささうに身仕舞ひを遊ばす、

薔薇色の爪の仕上げも
欠伸まじりにぞんざいに片づけ、
ネクタイも投げやりに結びあげ、
短か目に刈り込んだ大事な捲髪を
濡した櫛で撫でつけもしない。
何の御思案かは作者も知らない。
そこへお茶の報らせが來る。
やむを得ん。伯爵は極まりのわるさと
心ひそかな忿怒を無理に抑へつけ
お茶の席へと罷り出る。

お茶目の若夫人は
皮肉な眼差を打ち伏せながら
眞紅な唇を嚙みしめながら、
あれやこれやと愼ましやかに

會話を運ぶ。初めは周章て氣味の伯爵も
次第次第に元氣が出て來て
微笑を浮かべて合槌をうつ。
かくてまだ半時もたたぬうちから
早くももう愛嬌たつぷりの冗談口、
またしても戀の奴になり兼ねまじい様子。
折しも控室に立ち騒ぐ人聲。どやどやと入り來る人を
誰かと見れば、「ナターシャ、今戻つたぞ！」

『まあ、もうお歸り！
伯爵様これが良人でございますの。ねえあなた。
こちらはヌーリン伯爵様。』

「お目にかかれて欣懐ですぢや。
何ともかとも鬱陶しい天氣ですなあ！
鍛冶屋のところで先刻見ましたが

あなたの馬車はすつかり修繕が出來とりましたよ。
ナターシャ！　あの野菜畠のところでな
灰色兎をみんごと一匹仕とめたぞ。
これこれ、ヴォトカを持つて來い！　伯爵、ひとつ御賞美を、
遠い町から到來した奴でしてな。
夕飯は御一緒に願へませうな？」

『さあ、それは。實は急ぎの旅でして。』

「いやいや御遠慮は御無用、伯爵、是非どうぞ。
家内も私も大の客好きでしてな。
いや伯爵、お歸しは致しませぬぞ！」

だが收まらぬは
伯爵の胸のうち、いまは一縷の望みも絶えて、
泣きべそ掻き掻き、是非おいとまをと我意を張る。
早くも一杯きこしめしたピカールは

うんうん云つて旅行鞄へ詰め込んでゐる、
下僕が二人がかりで大トランクを
馬車へ附けようと運び出す。
やがて玄關先へ馬車が横づけになる、
ピカールが手早く荷物を積み込むと
伯爵はそのまま辭し去つた。……さて諸君、
これで目出度し目出度しにしてもいいが、
二た言三言蛇足を添へたい。

馬車がまつしぐらに門から消えると、
妻は良人に萬事を話した。しかのみならず
わが伯爵のかの大手柄を
近隣くまなく觸れまはした。
ところでナターリヤ・パーヴロヴナと聲をあはせて
一ばん大笑ひをしたのはそも誰だらう？

そいつはとても諸君には分からぬ。――どうしてさ？
良人だらう？――いや大違ひ、良人ぢやござらぬ。
亭主殿はこの一件に大腹だちで
あの伯爵は頓痴氣だ、青二歳だと
散々に罵り立てた。かくなる上はあの伯爵め
ぎゆうぎゆう云ふ目に逢はせて呉れるぞ、
犬けしかけて嚙み殺させるぞ、と喚き立てた。
大笑ひをしたのはリーヂンといふ
當年二十三歳になる隣村の地主で。

さて今や私どもは、意を安んじて
われらの生きるこの時代には
貞操堅固な妻なるものが
敢へて珍らしからずと言ひ切れようものさ。

キルジャーリ

キルジャーリは生まれはブルガリヤ人である。キルジャーリといふのはトルコ語で、勇士、豪の者といふ意味である。彼の本名を私は知らない。

キルジャーリの物凄い掠奪ぶりは、モルダヴィア全土を怯えあがらせた。一體どんな男なのかを些か窺ふため、彼の手柄話を一つして置かう。ある夜のこと、彼はアルナウト人のミハイラキと二人で、ブルガリヤの或る部落を襲つた。二人は村の兩端から火をかけて、片つぱしから農家を掠めはじめた。キルジャーリは斬りまくり、ミハイラキは獲物を集めた。二人が、

「キルジャーリ！　キルジャーリ！」と呼ばはると、村人は先を爭つて逃げてしまつた。

アレクサンドル・イプシランチ[1]が叛亂を宣布して、義軍の募集にとりかかると、キルジャーリは數人の古い仲間を彼のところへ連れて行つた。神聖隊（タイリヤ）の本當の目的など碌々知らない彼等だつたが、戰爭になればトルコ人や、また恐らくはモルダヴィア人やを掠めて、一儲けできることは目に見えてゐた。

アレクサンドル・イプシランチは勇猛な人物ではあつたが、自分が實に熱烈に、そして無謀千

萬にも引き受けた役割を、果たすに必要な素質を缺いてゐた。彼は自分が導いて行かねばならぬ人々を、統御する術を知らなかつた。部下の方でも、彼を畏敬もせず信頼もしなかつた。ギリシヤ青年の精華を空しく死なせた敗戰のあとで、ヨルダーキ・オリンビオチは彼に引退をすすめ、自分がそのあとを襲つた。イプシランチはオースタリイ國境をさして落ちのびたが、そこから部下に宛てた呪詛の一書を送り、かれらを謀叛人、卑怯者、碌でなしと罵つた。ところがこれらの卑怯者、碌でなしの大部分は、味方に十倍する敵を向ふに廻して死守につとめた末、セク修道院の構内やプルート河畔で戰死を遂げた。

キルジャーリはゲオルギイ・カンタクジンの部隊に屬してゐたが、この人についてもイプシランチと全く同じことが言へる。スクリャーヌイ[2]の戰の前日、カンタクジンはわが國の官憲に請うて、ロシヤ側の檢疫所にかくまつて貰つた。かうしてその部隊には指揮者がなくなつた。しかしキルジャーリをはじめ、サフィアノース、カンタゴーニ、その他一味の者には、もともと指揮者は要らなかつたのである。

スクリャーヌイの戰の涙なしには聞けぬ眞相を、亘細に寫した人は慥かまだないやうである。七百人を算するアルナウト人やアルバニア人や、或ひはギリシヤ人、ブルガリア人、その他雜多な賤民の群が、戰術も何も皆目しらず、一萬五千のトルコ騎兵の姿を見て退却する有樣を、思ひ

描くがよい。この部隊はやがてプルート河畔へ追ひつめられて、苦しまぎれにその前面に小さな大砲を二門据ゑた。これはヤッスイ[3]のモルダヴィア侯の邸内で見つけだしたもので、命名日の祝賀の折などの祝砲に使はれてゐたものである。トルコ軍は喜び勇んで霰彈を浴びせようとしたが、ロシヤ官憲の諒解なしには流石に手が出せなかつた。霰彈が對岸のロシヤ領に飛來することは必定だつたからである。檢疫所の長官（今では既に故人であるが）は、四十年も軍籍に身を置きながら、生まれてこのかた彈丸のうなりを耳にしたことがなかつた。それが天の配劑で、やつと耳にする機會を得た譯である。そのうちの二三發は彼の耳をぴゅーんとかすめた。老人は物凄い劍幕で怒りだして、ちやうど檢疫所の守備に任じてゐた狙擊歩兵聯隊の少佐に、散々當たりちらした。少佐は途方に暮れて、河べりへ走り出ると、向ふ岸をこれ見よがしに馬を乘り廻してゐたトルコ軍の勇士連を、指を立てて威しつけた。それを見た勇士連は忽ち馬首を返して走り去り、トルコ部隊もそれに續いて全部引きあげてしまつた。この指先で大軍を走らせた少佐の名は、ホルチェーフスキイといふが、その後どうなつたかは知らない。

しかしながら翌日になると、トルコ軍は神聖隊（タイリヤ）に猛襲を加へた。霰彈も砲彈も使ふ譯には行かないので、彼等はいつもの戰法をやめて、刀劍を振るつて戰を決しようとした。むごたらしい戰であつた。半月刀で斬りまくつたのである。トルコ方にはまた、それまで彼等の使つた例しのない

槍が認められた。ロシヤ風の槍で、つまりネクラーソフ黨(1)がトルコ軍に混つて奮戰してゐたのである。神聖隊はわが皇帝陛下のお許しで、プルート河を渡つてロシヤの檢疫所に匿れてよいことになつてゐた。そこで彼等は渡河をはじめた。カンタゴーニとサフィアノースの二人は、トルコ側の岸に最後まで踏みとどまつた。前日の戰に傷ついたキルジャーリは、もはや檢疫所に横たはつてゐた。サフィアノースは戰死した。カンタゴーニといふのは、頗る肥つた男だつたが、腹を槍で貫かれた。彼は片手に刀を振り上げ、殘る手で敵の槍をつかむと、それをぐいぐいと自分の腹へ刺し込み、やつと刀を相手につけることが出來た。二人は重なり合つて仆れた。

戰はをはつた。トルコ軍は勝利を得た。モルダヴィアは掃蕩された。六百人ほどのアルナウト人がベッサラビアに散り散りになつて、糊口の途に窮しながらも、ロシヤの庇護を感謝してゐた。彼等は無爲の生活を營んでゐたが、放埒だつたとは言ひ兼ねる。半ばトルコ化したベッサラビアの處々にある珈琲店(カフェ)を覗けば、長煙管を口にくはへ、小さな碗で珈琲の出しがらを啜つてゐる彼等の姿を、必らず見掛けたものである。その模樣入りの上衣や先の尖つた上靴は、そろそろおんぼろになつてゐたが、相變らず總のついた球帽を横つちよにかぶり、依然として半月刀やピストルを廣い帶から覗かせてゐた。彼等のことで苦情をいふものは一人もなかつた。このおとなしい貧しい人々が、あの天下に隱れもないモルダヴィアの正敎ギリシヤ人であり、怖ろしいキル

ジャーリの仲間だらうとは、とても考へられないことだつた。ましてやキルジャーリその人が、彼等のあひだにゐようなどとは。……

ヤッスイを治めてゐた總督(パシヤ)は、それを探知すると、平和條約を盾にとつて、この剽盜の引渡し方をロシヤ官憲に求めた。

警察は捜索をはじめた。果たしてキルジャーリがキシニョーフにゐることが分かつた。彼はある晩、亡命の僧侶の家で捕へられた。七人の仲間と一緒に、薄暗がりの中で夜食をしてゐるところだつた。

キルジャーリは拘禁された。彼は別に隱し立てもせず、自分はキルジャーリだと白狀した。

「だがね」と彼はつけ加へた、「プルート河を渡つてこのかた、俺は髪の毛一本だつて他人の物に觸つたことはねえ、ジプシイ一人だつて酷い目に逢はしたことはねえ。いかにも俺は、トルコ人やモルダヴィア人やヴァラキヤ人にして見りや、强盜に違えねえさ。だがロシヤ人にして見りや俺は客人だ。あのサフィアノースの奴が、すつかり霰彈を射盡くしちまつた擧句、こつち側の檢疫所へやつて來て、最後の塡め物に手負ひの釘だの、釘だの、時計の鎖、半月刀の頭飾りなんかを集めたとき、俺は奴に二十ベシルィクやつちまつて、空つけつになつたんだ。このキルジャーリが物乞ひをして命をつないでたことは、神かけて嘘ぢやねえ。だのにいま、ロシヤ人が俺

を敵の手に渡すつてのは、一體どうした譯かね！」

さういふとキルジャーリは口を噤んで、自分の運命のきまるのを從容として待ち受けた。

大して待たされはしなかつた。官憲にして見れば、浪漫的な立場から剽盜を眺める義理もないわけだし、先方の要求の尤もなことも信じて疑はなかつたから、キルジャーリをヤッスイへ送致するやうに命じた。

當時は名もない若手の役人だつたが、今では重要な椅子に收まつてゐる或る智あり情ある男が、彼の出發の有樣を手にとるやうに話して聽かせた。

牢屋の門には驛遞用のカルーツァが停まつてゐた。……（ひよつとしたら讀者は、このカルーツァといふものを御存じないかも知れない。これは天井の低い籐編みの四輪馬車で、つい最近までは普通これに六頭乃至八頭の瘦馬をつけたものである。口髭を生やし羊皮の帽子をかぶつたモルダヴィア人が、その一頭に跨がつて、のべつに叱咤し鞭を鳴らすと、瘦馬はかなり急調子のトロットを踏むのである。やがてそのうちの一頭がへたばりだすと、彼は物凄い呪詛の言葉とともにそれを外して、その馬がその先どうならうがお構ひなしで大道へ放つたらかして行く。ところが歸り途にはその同じ場所で、青々した草野（ステププ）に悠々と草を喰んでゐるその馬に、きつと出逢へるのだから不思議である。八頭立てで宿場を發つた旅人が、次の宿場に着いた時には二頭立てになつてゐたなどといふ話は、ざらに轉がつてゐる。十五年ほど昔はこんな風だつた。今ではベッサラビアもロシヤ化して、ロシヤ風の馬具や馬車を採用してゐる。）

ざつとかうしたカルーツァが、牢屋の門に停まつてゐた。一八二一年の九月も終らうといふ或る日のことである。ユダヤ女は袖を垂れ下げ上靴をぺたぺた云はせながら、アルナウト人はぼろぼろの頗る繪畫的な身裝をして、すらりとしたモルダヴィア女は黑眼の赤ん坊を兩手に抱いて、カルーツァのまはりに人垣を築いてゐた。男は沈默を守り、女は瞳を燃やして、何物かを待つてゐた。

門があいて、三四人の憲兵士官が通りへ出て來た。その後から二人の兵卒が、足枷をはめられたキルジャーリを連れて出てきた。

年は三十前後と見える。淺黑い顏は、ととのひすぎて凄味のある目鼻立ちだつた。脊は高く、肩幅はひろく、何やかや引つ括めて非凡な體力が現はれてゐた。染分け卷頭巾（ターバン）を横かぶりにし、幅のひろい帶を細そりした腰に卷いてゐる。厚地の青羅紗で仕立てた騎兵風の短い上衣、膝頭まで垂れ下がつてゐるルベーシカの寬やかな襞、それに燦ぴやかな上靴――と數へたてれば彼の身なりは出來あがる。傲然と落ちつき拂つた樣子をしてゐた。

役人のなかから、釦が三つも首吊りをしてゐる羊羹色の制服を着た、赤ら顏の老人が進み出

て、鼻の代用をしてゐる紫色の瘤つ玉に錫の眼鏡をきゆつと挾むと、やをら紙を擴けて、鼻聲でモルダヴィア語の文面を讀み上げはじめた。足枷をはめたキルジャーリをじろりと睨むその老人の眸が、時を追うて威高氣になつて行くのを見ると、どうやらその紙には彼のことが書いてあるらしい。キルジャーリは聽耳を立ててゐた。役人は朗讀を終ると、紙を疊み、場所を明けろと群衆を怖ろしい聲で叱鳴りつけ、カルーツァを引け と命じた。するとキルジャーリは彼に向かつて、二た言三言モルダヴィア語で云ひかけた。その聲はをののき、顏も變つてしまつた。涙をはらはらと落とし、鐵鎖の響きを立てながら、役人の足もとに身を投げた。役人はぎよつとして飛びすさつた。兵卒はキルジャーリを起こしにかかつたが、キルジャーリは自分で鐵鎖を集めて起きあがり、一跨ぎでカルーツァへ飛び乘ると、「さあ行け!」と叫んだ。憲兵が彼の横に坐り、モルダヴィア人がぴしりと鞭を鳴らすと、カルーツァは走りだした。

「キルジャーリはあなたに何と言つたのです?」と若い役人が老人に尋ねた。

「奴はね、俺に何とまあかう頼みをつたですよ」と老人は笑ひながら答へた、「女房や赤ん坊の面倒を見てやつて呉れといふんですな。何でもキリヤに遠からぬブルガリアの村に住んどるさうでしてな。奴のため女房子供までが酷い目に逢ひはしまいかと、それを心配しとるんですよ。いやはや馬鹿な奴等ですわい。」

若い役人の話に、私は烈しい感動を覺えた。キルジャーリが可哀さうでならなかつたが、彼の運命については長いこと何一つ知る機會がなかつた。それから數年を經て、私は若い役人に再會した。二人は昔話に耽つた。

「時に君の友達はどうしました、あのキルジャーリは?」と私は訊ねた、「どうなつたか御存じありませんか?」

「知らない段ぢやありませんよ」と彼は答へて、次のやうな話をしてくれた。

キルジャーリはヤッスイへ送られると、總督の面前に引き出されて、杙刺しの刑を宣告された。但し處刑は何かの祭日まで延期といふことになつて、その日まで牢につながれた。

囚人には七人のトルコ人が見張りにつけられた。愚鈍な連中で、胸の底にはキルジャーリに劣らぬ强盜根性を持つてゐる。彼等はこの囚人を敬ひ、東邦人の通性として、貪るやうに彼の奇々怪々な物語に聽き惚れた。

見張りと囚人はすつかり仲よくなつてしまつた。ある日キルジャーリは彼等に言つた。

「なあ兄弟、俺らの末期も眼の前だ。誰しも天運だけは逃がれられねえ。間もなくお前さん達ともお別かれだ。そこでお前さん達に、何か形見を遺して置きたいんだがなあ。」

トルコ人は耳をそばだてた。

「なあ兄弟」とキルジャーリは言葉を續けた、「三年前の話だが、あの討死したミハイラキの奴と二人で荒らし廻つた頃、ヤッスイのぢきそばの野原の眞中に、山吹色のがざくざく唸つてゐる鍋を埋めといたのさ。このお寶も、今になつて見りや俺にも奴にも授からなかつた譯だな。まあ仕方がないや。あれを掘り出して仲よく分けたがよからうぜ。」

トルコ人は氣が狂はんばかりだつた。そこで、その聖なる場所をどうして見つけるか、といふ相談になつた。さんざん頭を搾つた末に、キルジャーリに案内させようといふことに決まつた。

夜が更けて來た。トルコ人は囚人の足枷を外して、兩手を繩で縛りあげると、連れ立つて町を抜けて草原(ステプ)へ出た。

キルジャーリは案内に立つて、古墳から古墳へと、まつすぐ方角を變へずに進んで行つた。大分歩いてから、やつとキルジャーリは大きな平たい石の傍に立ちどまると、眞南へ三十歩を測つて、とんと足踏みをして「ここだ」と言つた。

そこでトルコ人は手分けをした。四人が半月刀を抜いて土を掘りにかかり、殘る三人が見張りに立つた。キルジャーリは石に腰をおろして、彼等の作業を眺めはじめた。

「どうだね、もうぢきかい?」と彼は時々さう訊ねた、「掘り當てたかね?」

「いや、まだだ」とトルコ人は答へて、玉のやうな汗を流しながら、せつせと掘り進んだ。

やがてキルジャーリはじりじりしはじめた。

「何て野郎どもだ」と彼は言つた、「土も滿足に掘れねえんだ。俺らなら二分間で片づけて見せらあ。やいみんな、俺らの手を解いて呉れ、そして刀を借して見な。」

トルコ人は考へ込んで、また相談をはじめた。「なあに構ふまい」と彼等は決めた、「手を解いて刀を持たせてやらう。大したことはないさ。向ふは一人でこつちは七人だ。」そこでトルコ人は彼の手を解き、半月刀を借してやつた。

やつとキルジャーリは自由の身になり、しかも武器を手にした。そのときの彼の氣持はどんなだつたらう!……彼は手ばやく掘りにかかり、番人達は加勢をした。……と不意に彼は、番人の一人に半月刀を突き通し、刀身はそのまま相手の胸にあづけて、その帶から二挺のピストルを鷲づかみに拔いた。

殘る六人は、二挺のピストルで身を固めたキルジャーリを見ると、ばらばらと逃げ出した。

キルジャーリは現在ヤッスイ附近を荒し廻つてゐる。ついこの間も、モルダヴィア侯に手紙を出して五千リョフ(6)を强請り、愚圖愚圖ぬかせばヤッスイに火をかけ、侯の身邊にも危害が及ばうと脅迫した。五千リョフは彼の手にはいつた。

どうです、このキルジャーリは?

ゴリューヒノ村史話